
薙野ゆいら
金蘭の王国
恋の嵐は王宮に吹いて
角川ビーンズ文庫

金蘭の王国

恋の嵐は王宮に吹いて

薙野ゆいら

BEANS BUNKO
15655
角川ビーンズ文庫

金蘭の王国

恋の嵐は王宮に吹いて

薙野ゆいら

15655

角川ビーンズ文庫

金蘭の王国

恋の嵐は王宮に吹いて

一　章	災いの終わりと始まりは	7
二　章	異邦の公女	38
三　章	花軍の王宮	63
四　章	薬師の夜宴	93
五　章	その記憶こそ、我が理由	139
六　章	真実は祭の森で	177
終　章	約束の行方	241
あとがき		252


火雷明王(からいみょうおう)
綺理が降臨させた乾ノ神衆。強大な力をもつ。
真羅(しんら)
綺理たちが幼い頃《契約》を結んだ大淵妖。妖王の分身。
翔波(しょうは)
綺理たちの幼なじみの正三位乾術師。冬惺に絶対の忠誠を誓う。

登場人物紹介



冬惺（とうせい）
白桜王家・春怜王の弟。綺理のいとこで、護国大将軍の位をもつ。

綺理（きり）
瑛国の大貴族・玉造家の姫だが、毒薬の調合が趣味の型破りな少女。

本文イラスト／香坂ゆう

一章　災いの終わりと始まりは

「うわあ！　すごいすごい。とっても綺麗！」
綺理は大木の高枝によじ登ると、歓声を上げた。
明るい金髪が夏風に遊び、生き生きとした深緑の瞳は、彼方に広がる海を映してきらめく。
左手に見えるのは薄青に揺らめく泥の海――大地を浮かべる大いなる海、淵海だ。
そのとろりとした泥の海は右手にゆくにつれて澄んでいき、最後にはきらきらと輝く水の海へと変わる。玉と玻璃が溶け合ったような不思議な濃淡は、いつまでも眺めていたくなるほど美しい。
「すごいね、冬惺。白桜院の人が言ってた通り！」
息を弾ませて隣を見やると、すぐ横の枝で冬惺がうなずく。
「ああ。俺も、淵海と水海の境がこんなに綺麗だとは思わなかった。さすが瑛国三景の一つと言われるだけのことはあるな」
「うん、本当に素敵。――あ、ねえ翔波、ここにおいでよ。この場所からよく見えるから」
続いて大木を登ってきた銀髪の少年に、綺理は手招きした。そのまま自分の座っている場所を譲ろうとすると、翔波が一段下の枝からこちらを見上げてにっこりと笑う。

「ありがとう、綺理。でもここからもちゃんと見えるから大丈夫だよ」
「そう？　ならいいけど。あ、あそこに見えるのって船？」
綺理は水海にぽつんと浮かぶ豆粒のような影を指さした。
翔波が、右目を覆う片眼鏡の奥で、青銅色の目を瞠る。
「そうみたいだ。南晶島まで行くのかな。話には聞いていたけど、海の真ん中に船が浮かんでいるって変な感じがするよ」
「ああ、おまえは水海を見るのも初めてだったか。あれはたぶん琅公国に行く貿易船だ」
六、七歳の頃から一緒に過ごしてきたとはいえ、三人はまったく同じものを見て育ってきたわけではない。幼なじみにして従者の翔波が王都輪瑛より南に来たのは、今回が初めてだということを思い出し、冬惺は合点がいったように応じた。
水海は、淵海に浮かぶ二つの勾玉形の島――北瑛島と南晶島の間に存在する塩水の海だ。淵妖の棲む淵海とは違い、泳ぐことも船で行き来することもできる。
綺理たち三人がいるのは、そんな二つの海の境界にほど近い、王都南西の森だ。白桜王家の御料林だけあって盗賊の心配がないので、馬も荷物も下に置いたまま三人で木に登っている。
「んー、でもいい景色だし、ちょうど風が吹いてて気持ちいいね」
綺理は裸足をぶらぶらさせて言った。
真夏の強い日差しは緑の葉にさえぎられており、十六歳の少女のすんなりした肢体を包むの

は、生絹の上衣に丈の短い袴という涼しげな装束だ。南部は比較的湿気が少ないということもあり、風が吹きぬける大木の上は過ごしやすい。

冬惺も葉風になびく黒髪を軽く押さえ、琥珀の瞳を懐かしそうに細める。

「こうしていると思い出すな。昔よく木に登っただろう。玉造の里でも、白桜の離宮でも」

「うん、覚えてる。玉造の里では、大きな神木を私たちの秘密の見張り台にしてたよね」

「僕も覚えてる。よくあの神木の上でおやつを食べたよね。アケビとか桑の実とか、冬惺が盗んだ柿とか、冬惺が盗んだイチジクとか、冬惺が盗んだ……」

「待て翔波、あれはおまえたちも共犯だっただろう！」

すかさず冬惺がつっこみ、綺理はあさっての方を向いた。

「こう言っちゃなんだけど、なぜか盗んだ果物のほうがおいしかったもんね……」

三人が北部で養育されていた頃のことだ。『雷じじい』の異名をとる恐ろしい老人の屋敷の庭からどうやって果物を盗もうかと、三人で作戦を練ったのは一度や二度ではない。

果物泥棒の現行犯を見つければ、たとえその悪童が王弟の冬惺や大貴族の姫たる綺理であっても遠慮なく叱り飛ばす老人だったから、熾烈な攻防戦になった。その老人が唯一、果物泥棒に対してよりも激しく怒ったのが、近くの村のガキ大将が盗んだ柿を手下に公平に分配しなかったときだったということも含めて、今となってはいい思い出である。

――などということを考えていたら、綺理の腹の虫がくぅと音を立てた。

隣で冬惺が小さく笑う声がして、綺理は真っ赤になる。

「……聞こえた？」

「聞こえた。わかりやすいやつだな、おまえは。どうせもう昼食時だし、いっそこのまま木の上で弁当を食べるか？」

「いいね、それ。ちょっと取ってくるよ。君たちは座ってて」

言うと、翔波は綺理たちが手伝いを申し出る間もなく、身軽に木を下りていった。

木の上には綺理と冬惺が残される。二人きりだ。

（――や、二人きりだからどうっていうこともないんだけどっ）

一瞬脳裏をよぎった妄想を振り払い、綺理は冬惺を盗み見た。

冷たく端整な面差しの従兄。綺理のことを「わかりやすい」と言いながら、その実こちらの気持ちにはさっぱり気づいていないという鈍感な男だ。

（でも二人きりは二人きりなんだし、こういうときに少しずつそれらしい雰囲気に持っていかないと、いつまでたっても『ただの幼なじみ』のままな気がする……。王都に戻ったら、こんな機会もしばらく来ないだろうし）

――綺理たち三人が北部での淵妖退治を終えて帰途についたのは、十日余り前のことだ。

だが綺理は旅に出るにあたり、「極秘任務で出立した冬惺の無事を祈るため、白桜王家の氏寺にこもる」と家人に言い訳していたので、まっすぐ王都に帰るわけにはいかなかった。

そこで綺理だけが一旦、白桜院――事情を言い含められている白桜王家の氏寺――に立ち寄り、先に王都に帰った冬惺と翔波が後日彼女を迎えにいく、という形を取ったのである。

今はその白桜院から、連れ立って王都に戻る途中だ。

「――そういえば、淵妖退治の件を報告しに行ったとき、兄上が気になることを言っていた」

不意に冬惺が口を開いた。甘い雰囲気の醸成方法に悩んでいた綺理は、はっと我に返る。

「えっと、兄上って春怜陛下のほう？」

「ああ。あの色ボケ長兄に、綺理を迎えにいってくると言ったら、『帰ってくる頃には面白いことになっているぞ』と予告をされたんだ。それも、含み笑いをしながら」

「それは……確実に面白くないことが起きそうな予感がするわね……」

綺理はなんともいえない顔になった。瑛国王春怜といえば、自他共に認める華やかな美貌と女好きな性格の持ち主、という印象が強いが、同時に一筋縄ではいかない人物でもあるのだ。

なにか心当たりはないかと聞かれたが、冬惺にすら見当のつかないものが綺理にわかるはずがない。うんうん唸っていると、翔波が再び木を登ってくるのが見えた。

「まあいい。今日明日にはわかることだしな。――翔波、弁当は？」

「持って登るには量が多いから、引っ張りあげることにしたんだ。ええと、こっちの縄か」

彼は手首に絡めていた縄の片一本を手近な枝に結びつけると、もう一本をたぐり寄せた。縄につけられた弁当の包みや水筒、濡れた手巾を入れた竹管などが、順繰りに昇ってくる。

野趣あふれるタケノコ皮の包みを開くと、おいしそうな白いおにぎりが現れた。形は均整のとれた美しい三角形で、ふっくらと炊かれた米は一粒一粒がつやつやと輝いて見える。中に入った赤い梅干しを想像して、綺理はつばがわいてくるのを感じた。

「わーい、いただきまーす！」

三人並んで、ほどよく塩味の利いたおにぎりを食べながら、綺理は改めて思う。

冬惺と二人きりになりたいとか、いつか恋人同士になりたいとか願ってはいるけれど、その一方で、こんな風に三人で過ごす幼なじみ同士の時間も確かに好きなのだと。

昼食を終えると、翔波が先ほど枝に結んでおいた縄に手を伸ばした。弁当を引き上げたときと同じ要領で、たぐり寄せはじめる。

「翔波、そっちにはなにがついてるの？」

「夏みかんの袋……なんだけど、変だな。こんなに重いはずないんだけど」

不思議がる彼の頭越しに、綺理と冬惺は顔を見合わせた。横から手を伸ばし、三人で力を合わせて縄をたぐる。

協力の甲斐あって、やがて枝葉の合間から白い布袋が見えてきた。

「あれ？　ねえあそこ、なにか袋に引っかかって、る、みたい……」

だんだんと昇ってくる布袋には、なにか妙なものがしがみついていた。
妙なものは、ひょうたん水筒を背負った子狐だった。
思わず、三人同時に縄を放した。
「っぎゃわあぁぁぁ――――!?」
子狐の悲鳴が尾を引いて落ちてゆく。
地面に激突する寸前で、翔波がはっと縄をつかんで止めた。
「危ない……。夏みかんが潰れるところだった」
「いきなりなにをするのだね、君たちは！」
遥か下から抗議の声が飛んでくる。かと思うと枝々がザッと揺れ、綺理のすぐ隣に翡翠の目の子狐が姿を現した。
「真羅！　もう、びっくりした。あなたっていつも突然現れるんだもん」
「キリ、人を驚かすのも大淵妖の性なのだよ。……もっとも私に言わせれば、私の《契約者》たちもなかなかこちらの度肝を抜いてくれるのだがね」
子狐姿に化けた真羅は、背中のひょうたん水筒を下ろしながら首をすくめる。
彼は綺理たち三人と《契約》をした大淵妖だ。
七年前綺理たちは、旅の語り部のふりをした刹利という大淵妖に騙され、真羅を淵海から招きよせて彼と禁忌の《契約》を結んでしまったのである。

大淵妖といえば、人の世を乱して災いを生む悪しき存在。だが真羅に限っては違う。彼は《契約》の際に善き心を取り戻し、人間の味方をしているのだ。

長年《契約》を厭っていた綺理たちは、それを知って彼と共に歩んでいくことを決めた。そして真羅のほうもここしばらくは三人と行動を共にしていたのだが、そもそもが気まま勝手な大淵妖のこと。一昨日あたりどこへやら姿を消していたのだ。

「自力で登れるなら初めからそうしろ、横着子狐。で、散歩の収穫はあったのか？」

お座りしている子狐真羅を、冬惺はじろりとにらんだ。真羅のほうはといえば、改めて夏みかん袋を引き上げている翔波を一瞥する。

「あったといえばあった。まあ、夏みかんでも食べながら聞いてくれたまえ」

「？　うん。真羅も半分食べる？」

綺理がなんの気なしに夏みかんを二つに割って差し出すと、真羅は目をぱちくりさせた。

「魂のこもった水じゃないから力にはならないだろうけど……あ、もしかして真羅って、飲み物以外は駄目だったりする？」

勧めて悪かったかと反省しかけたとき、真羅が首と尻尾を急いで横に振った。

「いや。淵妖は湿ノ眷属なのでね、汁気の多い物なら食せるのだよ。ただ問題は――」

子狐真羅は、切なげに自分の前足を見る。

「……皮がむけない」



（うわ、可愛い！）

綺理は思わず、きゅんとなってしまった。

「じゃ、じゃあ私がむいて食べさせてあげ――」

「綺理、こいつを甘やかすな！」

瞬間的に冬惺の手が伸び、真羅の尻尾をつかんで逆さづりにする。なぜか不機嫌になっている彼に綺理は驚き、真羅はにやりと意地悪く笑った。

「なにを苛立っているのだね、少年。さては嫉妬かね？　この私の愛らしさに」

「なにをたわけたことを言っている。性悪狐の分際で、猫をかぶって綺理に甘えるな。綺理、おまえもおまえだ。こいつを無闇に甘やかすと、ろくなことにならないぞ」

そこに、傍観していた翔波がのんびりと口を挟んだ。

「うーん、まるで子供の教育方針でもめる夫婦の図だ」

「……翔波、真羅の阿呆な言動に毒されるな。馬鹿を装っているつもりが本当の馬鹿になるぞ。真羅、おまえはさっさと本題に入れ。今度はどんな厄介ごとだ？」

低い声に、綺理はは っとした。そうだった、夫婦と評されて照れている場合ではない。

――淵妖の王は、この瑛国がある北瑛島を狙っているのだ。

乾ノ神と湿ノ神によって創られたこの地上は、乾ノ力と湿ノ力の釣り合いが取れていなければ保たれない。特に湿ノ力が強まりすぎると、その地はやがて淵海と同化してしまうのだ。

そこで人は祈りや乾ノ術によって天上から乾ノ力を受け取り、地上を保っている。
だが淵海にいる妖王はその逆で、湿ノ力の塊ともいうべき淵妖に地上を荒らさせ、湿ノ力を強めることで、北瑛島を淵海に沈ませようと企んでいるのだ。
真羅はその妖王の分身でありながら、綺理たちと共に地上を守るために動いている。そんな彼がわざわざ「聞いてくれ」と言うからには、淵妖がらみのことに違いない。
ぽいと投げられた真羅は、一回転して枝に着地した。
「というより、厄介ごとが起きそうな予感がするのでその警告だな。――おそらく近いうちに輪瑛が淵妖に狙われる。今のままでは輪瑛の守りが手薄なのでね」
「王都が!?　守りが手薄って、どういうこと？」
驚いて叫ぶと、冬惺が舌打ちした。
「乾術師のほとんどが、北部の異変の後始末に行っているからか」
「そういうことだ。乾術師の力で北部の乾湿の力の均衡は回復する。その間王都は淵妖に狙われやすくなる。災いの終わりと始まりは、同じ札の表と裏なのだよ」
綺理は黙って夏みかんの房を口に運んだ。甘酸っぱくて、少し苦い。
――妖王の命で北部一帯の湿ノ力を強めていた刹利は、先日綺理たちが退治した。
しかし刹利とその配下の淵妖によって荒らされ、人の住めぬ異形の森や沼に覆われてしまった地は、乾術師に湿ノ力を払ってもらわなければ元に戻らない。乾術師部隊が役目を終えて帰

還するまでには、まだしばらくかかるだろう。

（春怜陛下の話だと、ただでさえ良くないことが起こるみたいなのに……）

「輪瑛は要地。もしも輪瑛が淵海に沈めば、北瑛島そのものの沈没が加速する。そこまではいかずとも、王都が淵妖に襲われたとなれば人の世が乱れるのは必至……。私には、妖王万宵がこの隙を見過ごすとはとうてい思えないのだよ」

不吉な予言に、翔波が「だけど」と反論する。

「そりゃ実戦経験のある専業の乾術師は出払っているかもしれないけど、乾ノ術を使える貴族は残っているんだ。輪瑛を守っている乾ノ力が、そんなに一気に弱まるはずはないだろ」

「確かに都を囲う乾ノ力の壁は健在だが、市中に満ちる力のほうは弱まっているよ。ひとたび淵妖の群れが中に入れば一巻の終わりだ。そして淵妖は、妖道を通れば輪瑛に入り込める」

妖道とは、淵妖が通りやすい道のことだ。

真羅が今いる枝を妖道に見立て、二本の後ろ足でとことこ歩いてくる。

「でも妖道は使えない。都を造るとき、妖道をふさぐように寺院を建てているんだから」

行く手をさえぎるように、翔波が枝の上に夏みかんの皮を置いた。

「さりとて大軍に関所なし。淵妖が群れなして押し寄せれば、ふさがれた妖道も力ずくで突破されかねないのだよ……っと」

真羅は皮をぽいっと投げ捨てて進み、綺理の肩に跳び乗ってきた。

「それで輪瑛に通じる妖道の近くに淵妖が寄ってきていてね。一体一体は取るに足らない雑魚だが、ここは威嚇の意味をこめて、一度火雷明王を呼んで蹴散らすことをおすすめする」
「あ、そっか。輪瑛は私たちが守ってるから狙っても無駄よってことを先に示しておけば、淵妖を牽制できるもんね。……で、その妖道ってどこにあるの？」
むいたばかりの夏みかんを渡すと、真羅は嬉しそうに平らげて言った。
「この森」

獣道をたどって鬱蒼とした森の奥に分け入っていくと、開けた岩場に出た。
手ごろな木に馬をつなぎ、綺理は日なたに立つ。
「帰命したてまつる――」
右手を太陽に伸ばし、長い呪文を唱える。
綺理が唯一使える乾ノ術、降神術だ。
乾ノ術とは、詠唱によって天上から乾ノ力を得て、さまざまに行使する術のことをいう。しかしその最高峰たる降神術の場合は特殊で、乾ノ神の眷属、つまり天上にいる乾ノ神衆に直接呼びかけて降臨を願うのだ。

冬惺と翔波が遠巻きに見守る中で、綺理の右手に乾いた熱風が下りてくる。ちなみに湿ノ眷属である真羅は、乾ノ神衆の気を「喉が渇く」と嫌っているので、綺理をけしかけるだけけしかけておいて姿を消してしまった。

「――のかけらを鎧い、万雷を紡ぎし灼熱の剣をとり」

初めてこの術を使ったときは動揺して暴走させてしまったものだが、四度目ともなれば肝が据わる。綺理は詠唱の終わりに合わせて、右手を振り下ろした。

「――天の雷窟より降臨したまえ、大天火雷金翅明王！」

雷鳴が耳をつんざく。

金色の光が視界を埋める。

一瞬目を閉じ、開くと、眼前に見知った乾ノ神衆が顕現していた。

背に金色の翼を持ち、鎧に身を固めた美しい青年姿の武神――火雷明王である。

「我が姫、此度は如何した」

低い大人の声が問う。光の強い金の瞳にまっすぐ見つめられ、綺理は急に緊張した。

（な、なんて言えばいいんだろう……。というか、あ、あれ？　私、前は火雷明王にどんな口調で話しかけていたんだっけ!?）

しまった、距離感がつかめない。

招請しておいて今さらだが、相手は神の座に連なる存在なのだ。以前はなんだかんだ非常事

態だったので勢いで話していたが、今回は気を回す余裕がある分畏縮してしまう。
「あ、あああ、あの……っ」
しどろもどろになって固まる綺理。そこに、緊張をぶち壊す声が割って入った。
「――やかましい。もう少し地味に登場できないのか、乾ノ神衆」
ぎょっとして振り返ると、冬惺が当てつけがましく片耳を押さえて立っていた。彼は、やんわりと制止しようとしている翔波を無視し、ぞんざいに言い放つ。
「いちいちうるさいし、まぶしい。今回は人目のない森の中だからまだいいが、毎度そんな派手な降臨の仕方をされたら、綺理が降神術を使えることがすぐにばれる。そうなったら厄介ごとが降りかかるのは綺理なんだぞ」
「冬惺！　なんてこと言うのよ、火雷明王に失礼でしょ！　すみません火雷明王、冬惺は口と目つきと態度と性格が悪いのでよく誤解されるんですが、本当は……あれ？」
しまった、弁護できない。
せめて冬惺が火雷明王の怒りを買ったときには、自分が盾になろう。そう思って綺理は冬惺に寄り添ったが、予想に反して火雷明王は怒った様子を見せなかった。
「承知した。ならば今後地上に降りるときは、耳目を引かぬよう力を抑えるとしよう。しかし我が姫に厄介ごととは？　降神術の使い手は人の世では敬される存在ではないのか？」
（……！）

冬惺の暴言を真面目に聞いて、真面目に返してきた。すごい、と綺理は真面目に感動する。勢いを削がれたのか、冬惺は黙り込んだ。代わりに翔波が手短に答える。

「女性の正一位乾術師――つまり降神術の使い手は、慣例で王妃になるよう定められているんです。僕らの綺理を、王妃や権力争いの道具にさせるわけにはいきませんから」

火雷明王は眉間のしわを深くすると、「面倒な世になったものだ」とつぶやいた。それから綺理に向き直り、改めて用件を問う。

「あ、そうでした。実は――」

事情を説明しながら、綺理は今度は気楽に話せていることに気づいた。冬惺の乱入のおかげで、余計な緊張がどこかへいってしまったようだ。

「――というわけで、妖道の近くに集まっている淵妖を火雷明王の御威光で追い払っていただきたいんです。お願いできますか？」

「構わぬが、それなら先ほど私が放った気で既に散っていよう。統率する大淵妖がいるのでもない限り、乾ノ神衆の降臨の光を見て逃げ出さぬ淵妖などそうはおらぬからな」

用件終了。

しばし沈黙があり、綺理はばつが悪い思いで頭を下げる。

「すみません……。なんだか呼びつけただけのようになってしまって」

「……いや、気にすることはない。今後も私の助けが欲しいと思えば、事の大小にこだわらず

に呼ぶがいい。我が姫の声は、必ず私のもとに届く」
言い切ってから、火雷明王は次の言葉に迷うように目を泳がせた。なにか言いかけて、また口を閉じ、そのまま陽光に透けるようにして天上に帰っていく。
（……？　なんだったんだろ、今の）
綺理は意見を求めて冬惺を見た。が、彼はふいと顔を背け、馬のほうへ歩いていってしまう。
「帰るぞ、二人とも。暗くなる前に綺理を玉造の屋敷に送っていかないとならないしな」
そう言って馬の縄をほどきはじめた冬惺の後ろで、綺理は翔波に小声で問うた。
「ねえ翔波、やっぱり冬惺って火雷明王のこと嫌いなのかな。そりゃ初めて会ったときはいろいろあったけど、あんなにいい方なのに……なんでだと思う？」
「うーん……わからなくはない。けど、僕の口からは言わないほうがいいと思う」
気になる答え方をして、彼は冬惺を手伝いに行った。
残された綺理は、二人の後ろ姿を眺めて首をかしげる。……よくわからないことばかりだ。

「衛門府」
「ふ。福寿草」

「う……う、うう……駅家」

夕日に照らされた森の中の道を行く、三頭の馬。

その先頭の鞍上で翔波が単語をひねり出すと、すかさず冬惺と綺理が続ける。

「矢印」

「し。心中草」

「また『う』!?　綺理、いい加減草の名前は禁止にしないかい。しりとりを始めてから七十六連続、ずっと『う』しか回ってきてないんだけど!?　そろそろいじめだよ、これ！」

「ええっ、これでも毒草以外の植物は使わないって、自分で制限をつけてやってたのに！」

心外だとばかりに綺理が叫ぶと、翔波だけでなく冬惺からもうめき声が上がった。

「待て、すると今までおまえが挙げたのは全部毒草か！」

「恋占草とかいかにも人畜無害っぽい名前も出ていたけど、あれもかい!?」

「えへ。恋占草は心中草の別名でね、女の子がよく恋占いに使うからそう呼ばれるの。花びらを一枚一枚取りながら、好き、嫌い、好き……って」

好き、と言ったときにちょうど冬惺と目が合ってしまい、綺理は慌てて視線をそらす。

「ど、どうせ、私がこんな少女趣味な話をするのは似合わないって思っているんでしょ。だけど私だって、これでも十六の乙女なんですからね」

「……いや、いつも通りの毒薬大好きな君だと思うよ？　むしろ僕は今の話を聞いて、花で恋

占いをするような純情な女の子がその花の毒で相手と心中を図るまでになるどろどろ愛憎劇が一瞬のうちに脳裏で展開されてしまったというか……あ、ごめん」

雰囲気をぶち壊したことに気づいたのか、翔波が肩ごしに謝罪のまなざしを送ってきた。

そして毎度のことながら、冬惺はなににも気づかない。

「恋占い、ね。単に花びらの数が不定なだけの植物から、くだらないことを思いつくものだ」

「くだらな……っ。冬惺は馬鹿馬鹿しいって思うかもしれないけど、恋する女の子は真剣なんだから。か、片想いに悩んでいたら、占いの結果だって気になるものなのよ」

つい熱を入れて反論した途端、冬惺がこちらをまっすぐに見た。

「――綺理も、そんな風に恋占いをしたことがあるのか？」

（……っ!?）

不意打ちに、綺理の鼓動が大きく打つ。

（な、なんで聞くの!?　しかもそんな真剣な顔で……）

自分の頬が急速に熱くなっていくのを感じる。早くなにか言わなければと焦るが、口がまったく動かない。琥珀の瞳に見つめられて、呼吸すらうまくできない。

（わざわざ聞いてくるってことは、気にしてくれてると思っていいの？　でもなんて答えれば……。わ――っ、もう、そんなにじっと見ないでよ！）

どうしよう。これだけ沈黙が続いたら、軽く流すのはもう不可能だ。

いたたまれなさに、もういっそ態度で察してと思うけれど、冬惺に気づく気配はない。この分だと、綺理の顔が赤いのも夕日のせいだと思っていそうだ。

せめて翔波か真羅が茶々を入れてくれれば、この恐ろしいまでの緊張から救われるのに、翔波は気を遣って見ない振りを続けているし、真羅もいっこうに現れない。

（うう、もう無理。なんでもいいから今すぐここに邪魔に入って！）

――混乱した脳内でそう叫んだ、まさにそのときだった。

「……――ぅあぁぁぁ――！」

遠くから聞こえてきた悲鳴に、冬惺が表情を一変させた。

瞬時に空気が切り替わる。

「翔波、今の声！」

「この道の先です、閣下！」

交わした言葉はそれだけ。三人は緊迫した顔でうなずき合い、一斉に馬を走らせる。

そのとき、馬を駆る綺理の耳を、人ならぬものの声がかすめた。

〈――テヤル、喰ロウテヤル〉

（淵妖！）

綺理は、人には聞けぬはずの泥の妖の声を聞くことができる。だが今のように集中していなくても聞こえるのは、強い淵妖が近くにいる場合だけだ。

（まさか、さっきの悲鳴は――）

「人が淵妖に襲われてる！――左の道！」

前方に分かれ道が見え、綺理は声のした方を指示した。本道から分かれたそちらの道に、三人は次々に馬を走りこませる。

「だけどさ、綺理。妖道に集まっていた淵妖は、火雷明王に追い払われたんじゃないのかい？僕らのせいで淵妖が寄ってくるってことは、もうないはずだし――」

《契約者》である綺理たちは、少量ながら湿ノ力を放つ体質になっているため、本来なら一つの場所に長期間とどまっていると災いを呼んでしまう。しかし今では真羅が湿ノ力の放出を抑制してくれるようになったので、そうした悪影響はないはずだ。

翔波の口にした疑問に、冬惺が嫌そうに答えた。

「淵妖が逃げていった先に、間が悪く人がいたんだろう。災いの終わりと始まりは、同じ札の表と裏……か。嫌な因果関係だ」

話しているうちに細い林道を抜け、視界が開けた。斜陽に染まった崖の上に出る。

「この下か！」

崖の際で馬を止めた冬惺が、下方を見て舌打ちした。続いて馬を寄せた綺理と翔波も、眼下の光景に息を呑む。

崖の下では、貴人の一行と思しき一団が淵妖に襲われていた。

道の真ん中で屋形車が横倒しになり、つながれた馬が恐慌状態になっていないている。その前には巨大な蜘蛛の姿をした淵妖が立ちはだかり、怯える人々を品定めしていた。

「ひいっ。く、来るなあ、化け物！」

数人の随身がかろうじてたいまつを振って威嚇しているが、長くはもたないだろう。

そんな状況をすばやく見て取ると、冬惺は太刀を抜いて馬上で叫んだ。

「翔波、あれに炎を叩き込め！　綺理はここで馬を頼む！」

「わかった――冬惺は？」

下りる道を探していた綺理が、手綱を受け取りながら問うと、彼は不敵に笑った。翔波の右手に生まれた炎の光が、その端整な相貌を一瞬照らす。

「飛び降りるのが、一番早い」

そして冬惺は、鞍の上から直接崖下に身を躍らせた。

綺理の驚いた顔が視界からかき消え、落下感が全身を包む。

下では、まさに屋形車を襲おうとした淵妖の鼻先に、翔波の火炎が降ったところだ。

泥の蜘蛛がひるみ、生じた爆風が冬惺の落ちる速度を減殺する。

冬惺は真下でうごめく淵妖を見すえ、空中で太刀を構えた。

落下の勢いを太刀にのせて、淵妖を叩き斬る！
紫電一閃。
泥蜘蛛の巨体が真っ二つに斬り裂かれ、その間に冬惺が身軽に着地する。
「――――！」
突如降り立った少年の姿に、襲われていた人々から言葉にならないどよめきが上がった。彼らの目には、冬惺が炎と共に天から降り、危機を救ってくれたように見えたのだ。
「――怪我は？」
冬惺は屋形車を振り返り、中で身を寄せ合っている二人の少女に問う。
装束からして貴族の姫とその侍女だろう。貴族ならば基本的に乾術師なのだから、炎の一つも放てばよいものを、この赤褐色の髪の姫は震えて声が出ないようだ。侍女の腕にひしとしがみついたままで、冬惺の問いにもかすかに首を振ったのみ。
対して、姫を背にかばっている黒髪の侍女は、気丈な声で返してくる。
「いいえ、姫さまも私もすり傷だけです」
「そうか。ならいい」
綺理の手をわずらわせずにすむ、とだけ確かめてから、冬惺はふと眉をひそめた。
よく見れば、姫の身なりも屋形車のこしらえも立派なものだ。屋形車が横倒しになっているので紋は確認できないが、かなり上級の貴族の姫の一行なのだろう。

（そんなやつらが、なぜこんな少数で裏道を通る？）

浮かんだ疑問を、しかし冬惺はすぐに頭から追い払った。二体に分かれた淵妖が背後で動くのを気配で察し、太刀の柄を握りなおす。

濁った咆哮と共に、左右から泥蜘蛛が迫る。

どちらに対処すべきか――と迷う必要はなかった。周囲の悲鳴をぬって、綺理の凛とした声が降ってくる。

「冬惺、右！」

声に従って、振り返りざまに右の淵妖を斬り伏せる。――同時に。

「天にありては万物を照らす御光、地上に来たりて万有を食む牙となれ！」

翔波の放った火球が左の淵妖に命中し、乾いた砂に変えて吹き飛ばした。冬惺に斬られて弱体化した淵妖も、その余波でさらさらと砂になっていく。

「おおっ、倒した……！」

周りの人々が感嘆の声を上げたが、冬惺はそちらにかまわず、崖沿いの道を下ってきた翔波を見上げた。目が合うと、銀髪の従者はにやりと笑う。

「まったく、うちの閣下はすぐ無茶をするんだから」

「それは、おまえたちがいると無茶できるからな」

こちらもにやりと返す。上で見ている綺理がなにも警告してこないということは、他の淵妖

はいないのだろう。そう判断して、冬惺は太刀を鞘に納めた。
「あの……あなたはいったい……？」
去り際に姫から声をかけられたが、面倒なので答えなかった。呆然としている人々を置いて、翔波と共に崖の上へ戻る。
――このとき既に面倒なことが始まっていたとは、今の冬惺には知るよしもなかった。

思いがけない寄り道のおかげで、輪瑛の玉造邸に到着した頃には日もすっかり落ちていた。
「お帰りなさいませ、姫さま！　お元気そうでなによりです。ささ、お早くこちらへ」
「ただいま。みんなも元気そうでよかったわ。……ねえ、なにかあったの？」
篝火に照らされた総門をくぐった綺理は、ほぼ一月半ぶりの我が家が妙に騒然としていることに目をぱちくりさせた。
挨拶もそこそこに邸内に引きずり込もうとする侍女頭を押しとどめ、事情を問う。
「もしかして、玻璃お姉さまと夏憬殿下が来ているとか？」
五歳上の姉と、その夫で冬惺の次兄でもある王弟の名を出してみる。玻璃は夏憬のもとに嫁いで以来ほとんど玉造邸を訪れていないが、真っ先に思いつくといえばそのあたりだ。

だが侍女頭はそうではないと言う。

「玻璃さまと夏憬殿下は殿下の所領にいらっしゃっているので、王都にはおられません。今は、玉造の本邸から旦那さまが帰っておられるのです」

「お父さまが？」

「はい。今は王宮へ出仕されていますが、もしも綺理さまがお帰りになったときに屋敷に旦那さまがいらっしゃったらと思うと……。ああ、本当によいときに戻られました」

綺理は侍女頭以下家人たちの思いを正確に理解し、引きつった笑みを浮かべた。

（あ、危なかったあああ！）

綺理の父にして玉造家当主である影珀は、北部貴族としての矜持の塊のような人間である。

そんな父に今の綺理の帰邸風景を見られていたら、大変なことになっていた。

冬惺と翔波以外に連れはなく、地味な装束と飾り気のない馬でのひっそりとした帰邸。

――まず間違いなく怒られていた。「なぜ豪勢な行列を仕立てて、南部貴族どもに玉造の権勢を見せつけてやらなかった！」と叱り飛ばされ、最悪の場合、「これから白桜院に戻ってもう一度帰りなおせ」と命じられた可能性すらある。

「ですから急いでお召し替えください。旦那さまが王宮から戻られる前に、そのいかにも野遊びをしてきたばかりのような恰好をなんとかいたしませんと！」

「わ、わかった。……ええと、冬惺たちはどうする？」

家令と話している冬惺を振り返ると、彼は実に微妙な表情をしていた。
「俺と翔波は王宮に帰る。詳しいことはまだ伝わってきていないが、王宮でなにか騒ぎが起きているらしい。影珀叔父上が夕刻からわざわざ出仕したのも、そのせいだとか」
「……もしかして、それが春怜陛下の言ってらした『面白いこと』？」
「だろうな。また後で連絡するが、騒動の内容によってはしばらく忙しくなるかもしれない」
「うん。大変なことじゃないといいけど……気をつけてね、二人とも」
そっと手を振ると、翔波が「君もね」と苦笑した。
「影珀さまに怒られないように気をつけて。あんまりひどく叱られそうだったら、僕らのせいにできるところは僕らのせいにしておきなよ？」
そうして二人して慌ただしく去るのかと思いきや、冬惺が綺理に手を伸ばしてきた。
彼の手が、綺理の頭にぽんとのせられる。
「約束、忘れてないからな」
「え？」
「馬鹿、お互いに髪結い紐を選んで交換するという約束だ。言っただろう、おまえに似合う髪結い紐を買ってやると。――そのうち暇を作るから、二人で市を回るぞ」
それは淵妖退治の旅から帰る途中に交わした約束。くしゃりと金髪をなでられて、綺理は胸の奥があたたかくなるのを感じた。

そばに控えている家人たちから「おおっ」と歓声のようなものが上がり、顔が火照る。どうしよう、嬉しいけど恥ずかしい、けど嬉しい。頬が自然にゆるんでしまう。

綺理の笑顔に満足したかのように、冬惺はもう一度金髪をなでてから手を引いた。

彼が馬にまたがり、翔波と共に去っていくのを、綺理はぼうっとなったまま見送る。

そして彼らの姿が門の外に消えた直後。

「さあさあ姫さま、お召し替えの支度は調っておりますからこちらへ！」

「わ――っ、ちょっとみんな、引っ張らなくても自分で歩きますって！」

余韻もなにもあったものではなく、綺理は侍女たちによって邸内へ引きずられていった。

それからしばらくは戦争状態だった。

怒濤の勢いで装束を脱がされ、寄ってたかって蒸した布で全身を拭かれる。鬼気迫る様子の侍女たちにもみくちゃにされて、綺理は自分の屋敷に帰ってきたのだということを実感した。

（でもこれだけばたばたしていれば、ばれないですみそう。……いろいろと）

――綺理は、この一月半白桜院にこもっていた、という証拠作りを怠ってはいなかった。

旅の間も自作の塗り薬で日焼けや肌荒れを抑えていたし、昨晩白桜院に泊まったときは、髪や肌着にまでしっかりと寺院の匂い――乾術師の使う香の匂いをしみこませておいた。

それでも多少は日焼けの痕や擦り傷が残っているので、それを指摘されたときに備えて「白桜院から帰る途中で久しぶりに野遊びをしてきちゃったから」という言い訳も用意している。だがよく観察されたら違和感をもたれかねないので、今の状況はありがたい、はずだ。

（これでお父さまとの対面がなければ気が楽なのに……）

長い裳をはき、紗の上衣を重ね、二重帯をしめるという姫君らしい装束を着せられながら、綺理は天井を仰いだ。

父のことは嫌いではないが、苦手だ。

もともと家庭的な人ではないし、娘に興味がないのか家族らしい交流をしたこともない。特に綺理の母が早世してからは、命令されるか叱られるか以外の会話を父とした記憶がない。会ったらまた叱られるだろうなあ云々、と考えているうちに髪を手早く結い上げられ、驚異的な速さで身支度が完了した。侍女たちは自分の仕事に満足したようにうなずくと、当主が帰るまでにはまだ猶予があると察して茶の用意をしてくれた。

ようやく一息つけた綺理は、椅子に深々とかけて冷茶で喉を潤す。

――と。

「それにしても姫さまは幸せ者ですわね。婚約者にあんなに愛されていらっしゃって」

侍女の唐突な台詞に、綺理は危うく茶を噴きそうになった。

「ちょ、ちょっと。なにを言い出すのよ、急に」

軽くむせて、碗を卓に置く。その反応を単純に照れと受け取ったのか、ほかの侍女たちも笑顔で卓の周りに集まってきた。

「そうそう、別れ際に堂々と逢瀬の約束を交わしていらして。見せつけてくれますよねえ」

「髪結い紐を交換なんて、なんだか急に恋人らしくなったんじゃありませんこと？　ふふ、姫さまったら、道すがら冬惺さまとなにかあったんですの？」

「市を回るというのは少々庶民的ではありますけれど、姫さまがたらしくてよろしいではないですか。冬惺さまは昔から姫さまにお優しいですものね」

古参の侍女の桂鈴にまでにこにこと言われ、綺理は言葉に詰まった。その間に侍女たちは、うっとりとした表情で続ける。

「親の決めた婚約者同士でここまで仲睦まじいというのも、珍しいですよね」

「陛下のお気に入りの弟君で、護国大将軍で。あんなに素敵な方に一途に愛されていらっしゃるなんて、綺理さまがうらやましいですわ。うちの姫さまは本当に幸せ者ですこと」

「……」

侍女たちが勝手に盛り上がっているそばで、綺理は黙って茶菓子をつまんだ。

（幸せに見えるのかな。……見えるよね、そりゃ）

想い人は事実上の婚約者で、自分をとても大切にしてくれている。障害は何一つなく、いずれは周囲の祝福を受けながら結婚する。——できすぎた物語のような「幸せ」だ。

それなのに、相手の「好き」が幼なじみとしての「好き」でしかないからといって不満足に思うのは、欲張りがすぎるのではないだろうか？

（私……贅沢なのかも。女の子として意識してもらうことにこだわらなければ、今のままでも十分幸せなんだから。これで満足するべきなのかな……？）

冷茶の碗を手に吐息を漏らす。水面が揺れて、そこに映っていた自分の憂鬱な顔が消える。

そのとき、廊下のほうから慌ただしい足音が近づいてきた。

父の伴ってきた家人の一団で屋敷内の人口が増えているのは確かだが、それにしても騒々しい。綺理がそう思ったのと前後して、部屋に一人の侍女が駆け込んできた。

彼女は、無作法をとがめる同僚の声を無視し、色を失って叫ぶ。

「綺理さまっ、旦那さまがお帰りになりました！　それが、それが……！」

綺理はぎくりとして立ち上がった。室内の空気がぴんと張り詰める。

「お父さまになにかあったの!?」

「いいえ、旦那さまが出仕されていたわけがわかったのです！　王宮で持ち上がっている騒動というのが、その……ああ綺理さま、どうかお心を確かに、落ち着いてお聞きください」

そして続けられた言葉は、間違っても落ち着いて聞けるようなものではなかった。

「冬惺さまが、隣国の公女とお見合いをなさるそうです」

二章　異邦の公女

冬惺が見合い。……見合い？

「わ……私がいるのに――っ!?」

真っ白になった頭で、とにかくそれだけ叫んだのは覚えている。

呆然としているうちに呼び出しがかかり、父の部屋に急げば、父は開口一番恐ろしい剣幕でその件について話しだした。

彫りの深い厳しい顔を、怒り一色に染めて怒鳴る。

「琅公国の公女だと！　春怜めが、狩占祭を隠れ蓑に裏でこそこそと話を進めおって。冬惺はおまえの婚約者だというのに、正式な婚約式を行っていなかったからといってこんな騙し討ちのような真似を。玉造家に対する侮辱ではないか！」

怒気に満ちた説明を聞くうちに、綺理はだんだんと思考能力が戻ってきた。

事の経緯はこういうことらしい。

かねてより、夏の祭礼である狩占祭に出席するため、琅公国の公女が瑛国を訪れることになっていた。これは瑛国白桜王家と琅公国の同盟関係を考えれば、おかしなことではない。

ところが狩占祭が半月ほど後に迫り、公女の一行が間もなく到着するという頃になって、これが冬惺と公女の内々の見合いを兼ねていることが判明したのだ。

ほとんどの者にとって寝耳に水の事態に、現在王宮は騒然となっているようだ。

「おまけにあの青二才の国王、この私が説明を求めに行ったのに、今日は会わんと突っぱねおった。前々から勝手なことばかりして目に余ると思っていたが、よもや天下の玉造家をここまで虚仮にしようとは。あの恩知らずの甥め、誰のおかげで王位に即けたと思っている！」

影珀は、綺理と同じ碧玉の瞳を鋭くして吐き捨てる。

状況を理解するに従って、綺理の胸にひやりとした現実感が迫ってきた。

（どうして急にこんなことになるの？　春怜陛下は私と冬惺のことを応援してくださっていると思っていたのに。私たちはどうなっちゃうの……？）

もうずいぶん昔から、自分と冬惺はいつか結婚するのだと信じて疑ってこなかった。

だが大前提と思っていたそれは、絶対ではなかった。こんな風に揺らぎもするものだったのだ。急に、足元になにもなくなってしまったような気分に襲われる。

『約束、忘れてないからな』

冬惺の言葉と、頭をなでられた感触を思い出し、綺理は冷たい手を膝の上でぎゅっと握った。

影珀はなおも苛立たしげに、指で卓を叩く。

「冬惺の奴もだ。あやつめ、おまえを連れまわしたり旅の無事を祈らせたり、我が娘をいいよ

うに扱っておきながらこの振る舞いか！」

「！　お父さまっ、冬惺だってこのことを知らなかったんです！」

さすがに聞き捨てならず、綺理は口を挟んだ。激昂した父に意見するなど普段は怖くてできないが、冬惺のこととなれば話は別だ。

「冬惺も今頃驚いて、困っているはずです。いきなりお見合いだなんて……そんなの、冬惺がほいほい受けるはずありません！」

言ってから、綺理は自分の口にした言葉に勇気づけられるのを感じた。

そうだ。冬惺だって綺理と同じで、この突然の縁談に反発を覚えているはずだ。綺理を蔑ろにして他の女性との縁談を受けるなんてこと、彼が簡単に納得するとは思えない。

娘の台詞に気勢を削がれたのか、影珀は咳払いをして口調をいくぶん和らげた。

「ああ、もちろんそうだろう。私としても、顔に泥を塗られたまま引き下がるわけにはいかんからな。玉造家の威信にかけて、此度の縁談は白桜王家側から断らせてくれる」

自室に戻った綺理は、心配顔の侍女たちを下がらせると、窓辺に膝を抱えて座った。

立ち込める不安を抑えて、格子窓の向こうに遠く見える王宮の建物を仰ぐ。

（そうだよね。冬惺は昔から悪知恵が回るもん。気の進まない縁談だったら、なんとかしてうまく断ってくれる……よね？）

「納得できません！」

冬惺は両手を卓に叩きつけ、兄王の涼しい顔を睨んだ。

春怜は豪奢な金髪を流したくつろいだ恰好で、優雅に頬杖をついている。

彼は末弟がこうして私室に乗り込んでくるのも予期していたのだろう。冬惺が扉を蹴破る勢いで入ってきたとき、室内は既に人払いがなされ、脇の卓には酒杯が二人分用意されていた。

冬惺は手のひらを卓につけたまま、身を乗り出して叫ぶ。

「俺と琅公国の公女の縁談なんて頭に虫がわいたような話、いったいどこからひねり出してきたんですか！　兄上の冗談のひどさは知っていたつもりですが、まさかこれほどとは！」

「そんなに悪い話でもないだろう、冬惺。琅公国といえば芸術の国。公女が南の最先端の文物を持ってきてくれれば瑛国の王宮もずっと華やかになる。それに公女自身もかなりの美人だそうだからな、きっと眼福だぞ。おまえも楽しみにならないか？」

「これで楽しみになる奴がいたら兄上並みの色ボケです。あちらの芸術を取り入れるのは兄上の勝手ですが、どうして俺に縁談など！　俺には綺理がいるというのに！」

「まあそう怒鳴るな。座って、酒でも飲んで落ち着かないか？」

「確実に鎮静剤が入っている酒なんて願い下げです。兄上が俺の北部行きをやけにあっさり許したのは、俺のいない隙にこのたわけた見合いを仕組むためだったんですね」

酒杯を押し返しながらずばりと切り込めば、春怜はにこやかに認める。

「なんだ、どちらも気づいていたか。さすがは我が弟。――だがなあ冬惺、文句は私のほうにもあるのだぞ。北部に発ったときも、私がこっそりつけてやろうとした護衛をまくし。危ないことはしないと約束していたくせに、『なりゆきで大淵妖を倒してしまいました』などと言ってあちこちに傷を作って帰ってくるし。心配する兄の身にもなってみろ」

「兄上の身になって考えても、今回の縁談に利があるとは思えません」

強引に話を戻した冬惺に、春怜は琥珀の瞳をきらりと光らせた。

「ほう？」

「俺が綺理と結婚すれば、白桜王家は玉造家を吸収して北部を掌握できる。兄上だってそう考えたからこそ、俺を玉造の里で養育させたんでしょう」

玉造家は瑛国で最も古い家柄の一つだ。白桜家の前身である金蘭王家が北瑛島を統一する以前から、北部一帯で勢力を持っており、今なお北部貴族たちから一目置かれている。

ところが現在の当主影珀は後継ぎに恵まれず、娘が二人しかいない。

長女の玻璃は、既に白桜王家の三兄弟の真ん中、夏憬のもとに嫁いでいる。となれば次女の綺理が冬惺と結婚すれば、玉造家の勢力基盤も莫大な所領も、いずれ自動的に白桜王家に組み



込まれることとなるのだ。

「それに引き換え、琅の公女との婚姻にはさしたる政治的意味がありません。琅との同盟ならとうに結ばれているし、これ以上同盟の証が必要な関係でもない」

「それで？」

「こんな縁談は、玉造家の面目を潰して影珀叔父上を怒らせるだけです！」

「そのとおりだ」

間髪をいれずに肯定され、冬惺は息を呑んだ。が、すぐに兄王の真意を悟り、ぐっと目許を険しくする。

「――それが目的ですか。玉造家の権勢に傷をつけ、その力を抑制することが」

春怜は弟の理解の早さに満足したようにうなずいた。彼は椅子の背もたれに体を預け、腕を組む。立ったままの冬惺を、真面目な顔で見上げる。

「どうやら影珀叔父は、『王造公』などと呼ばれて自分が一臣下であることを忘れてしまったようなのでな。このあたりで思い出させてやったほうがいいだろう。――いつまでも、この私を言いなりにできると思われていては困る」

「……」

冷ややかな物言いに、冬惺は巷でささやかれている影珀のあだ名を思い出した。

――『玉造ならぬ王造』『影珀ならぬ影の王』

金蘭王家が『白桜』と『紅楓』の二家に分かれて以来の王位争いの内乱で、白桜家が天下を取ることができたのは、玉造家の支持があったからだと言われている。影珀は、亡き妻の甥にあたる春怜の即位に尽力し、即位後は自分が王であるかのごとく権勢をふるっていた。

「影珀叔父の増長は目に余る。そもそも瑛国が他国に比べて王権が弱いのは、玉造家のような古い貴族がいまだに力を持っているせいだ。王の権威を高めるためにも、いかな大貴族といえど王の意向には左右されるものだ、と示しておきたいのだ」

「……でしたら、見合いの件が明るみに出た時点で目的は果たされていますよね」

冬惺は苛立ちを吐き出すように言うと、春怜の琥珀の瞳を真っ向から見返した。

「琅の公女との縁談、断らせていただきます」

「それは許さん」

即答。兄弟の間に、にわかに緊張感が生まれる。

春怜は組んだ腕をゆっくりと解き、自分のこめかみを指で叩いた。

「冬惺、私の目的はもう一つある。……私はいずれ、おまえに北部を掌握させるつもりでいる。先ほどおまえが言った通り、おまえを玉造の里で養育させたのもその布石だ」

「だったらなおさら、俺は綺理と――」

「だからこそ、その前におまえが私の忠実な弟であることを、内外に知らしめておく必要があるのだ。――いいか、冬惺」

春怜が椅子から立ち上がる。長身の兄に目の前に立たれ、冬惺は我知らず一歩下がった。
「今縁談を取り下げれば、白桜王家が玉造家の威光に屈したことになるだろう。玉造家側が下手に出て懇願してくるまでは、決してこの縁談を断りはしない。――そしておまえは、私の命じた見合いに従順に臨むんだ。いいな？」
「……ですが兄上、それでは綺理はどうなるんですか。兄上の考えはわかりますし賛同もしますが、なにもこんな、綺理を一方的に侮辱するようなやり方で――」
「冬惺」
春怜は弟の抗議をさえぎると、口元にうっすらと笑みを浮かべた。女好きのする華やかな美貌から甘さが消え、独特の凄みが宿る。
「白桜の冬惺。おまえは兄の命令と玉造の綺理と、どちらが大事だ？」
「……っ」
兄の手が肩にのせられ、冬惺は言葉を詰まらせた。
王宮というこの場所に戻ってきたのだと、ゆるゆると実感する。
北部に行っている間、淵妖と戦っている間は、ただ綺理と翔波を守ることを最優先にして全力を尽くしていればよかった。けれど、ここでは多くのしがらみが手足を重くする。
その振り払えない最たるものが、肩に置かれたこの手だ。
冬惺は目を伏せ、静かに答える。

「――兄上のご命令に、従います」

幼い頃は、自分はいつか追い出されるのだと思っていた。

『あんな汚らしい色の髪の子供、わたくしの春暁の子であるはずがありません！』

先代白桜家当主、春暁が戦死した後、白桜家は春暁の生母によって取りしきられていた。

冬惺や綺理にとっては祖母にあたる女性。だが彼女は、金蘭王家の金髪を持たずに生まれた冬惺を孫とは認めようとせず、彼を視界に入れることすら厭っていた。

『あのふしだらな女が、どこかの下賤な男を引っ張り込んで作った子に決まっています。あんな子が白桜を名乗っているだけでもおぞましい。動かぬ証拠さえ見つかれば、すぐにも叩き出してやれるものを……！』

祖母の支配する白桜の離宮で、冬惺はいつも不安定な思いを抱えていた。

――突然、おまえが不義の子である証が見つかったと言われ、宮を追放される。白桜家のしきたりに則ってつけられた『冬惺』という名も取り上げられ、自分は何者でもなくなる。

いつかそんな日が来るのだと思っていた。だから未来の約束をしなかった。

『じゃあね冬惺、また明日遊ぼう！』

無邪気に手を振る綺理に「また明日」と返そうとして、いつもその言葉を呑み込んだ。『明日』は来ないかもしれない。綺理の笑顔も、自分の名を呼ぶ声も、まぶしい金髪もつないだ手のあたたかさも、みんな突然冬惺の世界から失われるかもしれないのだ。

そんなある日のことだった。

冬惺は虫の居所が悪い祖母と鉢合わせになってしまい、大広間の真ん中でひどく殴られた。うずくまったところを堅い樫の杖で何度も打たれ、罵声を浴びせられる。周りには家人や白桜方の貴族が大勢いたが、止めに入る者は誰もいなかった。

痛みをこらえながら、この場を綺理に見られていませんようにと願った。もしも綺理が暴力に怯え、疎まれ者の冬惺と遊ぶのをさけるようになったらと思うと、怖くてたまらない。

そうして、祖母がひと際大きく杖を振りかぶったときだった。

『やめろ！』

冬惺の背後から伸びた手が、まさに頭上に振り下ろされようとした杖をつかんで止めた。

はっと後ろを振り仰ぐ。そこに立っていたのは、十歳年上の長兄だった。

お気に入りの孫の乱入に、祖母が驚いたように声を震わせる。

『春怜！　高貴な血を継ぐおまえが、なぜこんな白桜の面汚しをかばうのです。これはおまえの父の子ではないのですよ！』

『たとえそうだったとしても！』

春怜は叩きつけるように返した。大広間中の視線を浴びながら、声を張り上げる。
『それで、冬惺が私の弟であることになんの変わりがありますか！』
（――――！）
揺るぎないその言葉に、冬惺は胸を打たれた。すがれる確かなものをもらった気がした。まばたきを忘れて見つめる先で、春怜が力の抜けた祖母の手から杖を抜き取る。
『太母上、この際ですからはっきり言っておきましょう。――白桜家の当主は、今はこの私です。当主の弟に害なすことは、誰であれ許さない！』
威圧的な音を立てて、杖の先を床につく。若き当主の持つ威厳に打たれたように、その場の全員が静まり返った。静寂の中で、春怜は冬惺の肩に手を置く。
『おまえは白桜の冬惺だ。誰がなんと言おうと、それは変えさせない』
その手と言葉の、確かな重みにほっとして、冬惺は緊張の糸がふっと切れた。体が傾ぐ。兄の腕に抱きとめられるのを感じながら、今度綺理と会うときは『約束』をしようと思った。
明日も明後日もその次の日も、ずっと一緒に遊ぼう――と。

「――閣下、冬惺公閣下」
名を呼ぶ声に、冬惺は思考を現実に引き戻された。

周りを見ればいつの間にか自分の殿舎に戻ってきており、翔波が呆れ顔でこちらを見ている。
「なにを呆けているんだよ冬惺。もしかして君、陛下のお部屋を退出してからずっと、無意識に僕について歩いていたのかい？」
「ああ、そうみたいだ。少し考えごとをしていたからな」
「……。君って変なところで無防備だね。僕が嘘ついてとんでもない場所に案内しても、のこのこついてきそうというか。……ま、それはともかくとして」
冬惺の私室に入ると、翔波は後ろ手に扉に閂をかけた。手早く灯明台に火をともし、冬惺と向き合って座る。
「縁談の件、どうなったんだい？　もちろん断らせてもらうんだろう？」
「ああ……そのつもりだったんだがな――」
冬惺はため息混じりに、兄王との会話の内容を順を追って説明した。予想はしていたが、話すにつれて翔波の青銅色の目がどんどん険しくなっていく。
「……それじゃ君は、縁談を断らないっていうのかい？　さんざん綺理をたぶらかすような真似をしておきながら、陛下の命令とあらば綺理を捨てて別の女に走るんだ。ふうん」
待て翔波、いつ俺が綺理をたぶらかした――と、冬惺はよっぽど反論したかったが、話がそれるのでやめた。訂正すべきところは他にもある。
「短絡思考で人を責めるな、単純馬鹿従者。俺の一存で断るという形が取れないだけで、俺も

兄上もこの縁談を本気でまとめるつもりなどない。兄上はただ、影珀叔父上をひざまずかせる材料が欲しかっただけだ」

「だけど影珀さまが折れなかったら？　そのまま縁談が進んじゃうじゃないか」

「心配せずともその場合、狩占祭が終われば琅公国側が勝手に断ってくれるんだ」

「は？」

ぽかんと口を開けた翔波に、冬惺は兄との会話の続きを話した。あのとき春怜は冬惺の忠誠を確認すると、今回の件の裏事情を機嫌よく説明しはじめたのだ。

それによるとこの縁談は、琅公国側から内々に打診されたものだったらしい。

内々に、というのは、この場合「駄目元で言ってみた」とほぼ同義である。

なぜなら琅は、豊かな国ではあっても所詮は公国。南晶島の大国、晶の一領主がほんの数代前に独立して建てた国に過ぎない。その大公家である貴銅家は、金蘭王家の流れをくむ白桜家に比べ、家格がずっと低いのだ。

よって琅公国側は、冬惺個人の武勲を見込んで縁談を申し入れてはみたものの、断られても当たり前だろうと最初からほとんどあきらめている。春怜はそんな琅公国に対し具体的な返事はせず、「断るかどうかは当人同士会わせてみてから考えよう」と提案しただけだ。

つまり瑛国側から断っても、琅公国側から「やはり分不相応なので」と申し出を取り下げても、二国の間で角が立つことはない。――そして琅公国は、必ず断ることになる。

「兄上の情報網によると、当の公女が見合いをひどく嫌がっているんだそうだ」
「嫌がっているって……」
「俺は公女の好みから完全に外れているらしい。武人は荒っぽいから嫌、北部育ちは洗練されていないから嫌、髪の色は金がいい、王族なのに乾ノ術を使えないなんて信じられない――」
あまりの嘆きように、娘に良かれと思って縁談の申し入れをごり押しした大公は困惑したらしい。そこで娘に甘い大公は、「縁談は断っていいから、とにかく瑛国を訪問する予定だけはつつがなくこなしてくれ」と、泣き暮らす公女をなんとか送り出したのだという。
「……なんだ、つまりこれは絶対に成立しない縁談なんだね？　ああ、ほっとした」
翔波は脱力したように卓に突っ伏した。
かと思えばすぐに顔を上げ、やさぐれた目つきで冬惺を見る。
「あのさ冬惺、幼なじみとして遠慮なく聞くけど」
「今までも遠慮があったとは思えないが、なんだ？」
「君はあくまでも綺理以外の人との結婚は嫌なんだよね、そう思っていいんだよね？」
質問というより脅迫をするような口調に、冬惺は目をしばたたかせた。
「まあ……そうだな」
「君が綺理と結婚したいと思っているのはなぜか、聞いていいかい？」
どうして翔波の声がこんなに不穏なのだろう、と内心首を傾げながら答える。

「なぜと言われても政略結婚として一番順当だし、お互い昔からそのつもりでいたからな。今さらほかには考えられない」

「……たったそれだけなのかい？」

責める響きに、さすがの冬惺もむっとした。年下のくせに生意気な従者をじろりと睨む。

「なにを苛立っている。おまえはいったい、俺になにを言わせたいんだ？」

「苛立ちもするさ！　君はいったい、綺理のことをなんだと思って――」

翔波が席を立って身を乗り出した、そのときだった。

真上から落ちてきたひょうたん水筒が、すこーんと間抜けな音を立てて彼の頭に当たった。音からして中身は空だったようだが、衝撃で翔波の片眼鏡がはずれる。

「……真羅。君ね……」

拳を震わせる彼の頭上で、聞きなれた声が明るく謝る。

「おっと、すまないね従者。うっかり落としてしまった」

間を置かずに、声の主が卓の上にふわりと降り立った。

人間離れした美貌の、十歳ほどの少年だ。老成した光をたたえた瞳は鮮やかな翡翠色。短い髪はつややかな黒で、金と銀が一房ずつ交じっている。

いつもの童子姿で現れた真羅は、卓の端に鷹揚に腰をかけた。

「どうも王宮中が騒がしいと思ったら、そんなことになっていたのかね。当代の瑛国王も人が

悪いと言おうか、腹が黒いと言おうか、この弟にしてこの兄ありと言おうか……」

ぶつぶつ言う彼の後頭部を、冬惺は拾ったひょうたん水筒でぱこんと殴った。長兄の悪口を言われたからではなく、先ほどの従者のかたき討ちに。

「それより真羅。今、王宮中と言ったな。おまえは王宮内を自由に動き回れるのか？」

強い乾ノ力に守られているはずの王宮に、大淵妖が自在に侵入できるというのでは危険すぎる。危機感を覚えて問えば、真羅は平然とうなずいた。

「君たちに声をかける機会がなかっただけで、前にも王宮に来たことはあるのだよ。ただの大淵妖なら入り込めても力をふるうことはできないが、私はこれでも妖王の分身なのでね」

（……それでは、もしこいつが妖王万宵の意のままに動いていたとしたら、今頃は――）

冬惺は今さらながら背筋を冷たいものが伝うのを感じた。

――真羅が地上を守りたいという心を取り戻したのは、ほとんど偶然に近い。

もしその幸運な偶然が起こらなければ、七年前、自分たち三人が勾玉の釣り針で彼を淵海から釣り上げた時点で、北瑛島の命運は決まっていたかもしれないのだ。

（あのとき俺たちは、知らないうちにとんでもない危機を乗り切っていたわけか……）

そんな冬惺の内心も知らず、妖王の分身はのん気に空のひょうたん水筒を振る。

「とはいえ、ここにいると激しく喉が渇くのでね。早速酒がなくなってしまったのだよ」

「なるほど、それで僕たちのところにねだりに来たんだ。いいよ、どうせ冬惺は飲まないし」

翔波がちょうど部屋にあった清酒の瓶を取ってきて、詰め替える。一杯になったひょうたん水筒を腰帯からぶら下げると、真羅は座っていた卓から飛び降りた。
「さてと。君たちの湿ノ力の放出を抑えねばならないのでそう遠くへは行けないが、淵妖の動静は私が探っておこう。君たちも警戒しておきたまえよ」
「ああ、頼む。俺たちはしばらく自由に動けそうにないからな」
冬惺が応じると、真羅はつかの間動きを止めた。肩ごしにこちらを振り返る。
「私は後でキリを訪ねるつもりだが、なにか伝言はあるかね？」
綺理の名前に冬惺は思わず口をつぐみ、翔波に睨まれた。
「あるよね？　縁談の裏事情を報せてあげないと、綺理が不安になるよね？」
「おまえ、さっきからしつこいぞ。玉造家を不安にさせて揺さぶりをかけるのが兄上の目的なんだから、俺がそのことを綺理に教えるのは命令違反だろう。翔波、おまえも言うなよ」
「……っ、閣下がそう言われるなら私は従いますが、綺理の気持ちも考えてくださいよ！」
ふてくされた様子の彼に、冬惺は嘆息した。――昔からそうだ。この忠実な従者が主人に対しここまではっきり不満を漏らすのは、綺理が絡んだときと決まっている。
「いいか、翔波。俺たちは綺理になにも教えられない、伝言もできない。――が、どこかの大淵妖が会話を盗み聞きして勝手に綺理に教える分には、不可抗力だ」
ぎりぎりの線で折り合いをつけて言うと、真羅が心得たように笑った。

「そうだね。そういう悪い大淵妖が、王弟閣下の関知しないところにいるかもしれないね」

「――というわけで、どの道、少年の縁談は流れることになるのだよ」

「……ん、そっか。ありがと真羅、伝えに来てくれて」

綺理が礼を言うと、薬簞笥の上で一献傾けていた真羅は肩をすくめた。

「肝心の《調停者》たちの心がばらばらでは、いざ淵妖と戦う必要ができたときに私が困るのでね。せいぜい仲良くしたまえよ」

そっけないそぶりで装束の袖を翻し、毒蔵、もとい、玉造邸の綺理の薬房から姿を消す。

彼は、綺理が気分転換に毒薬を調合していたところに現れ、事情を説明してくれていたのだ。おかげで最大の懸念は消えたが、もやもやした気分はまだ残っている。

(冬惺から断ってくれるわけじゃ、ないんだ)

父と春怜の意地の張り合いという状況は理解できる。口ではいろいろ言っているが、冬惺が春怜のことを慕っているのも知っている。

それに冬惺は、自分のせいで綺理と翔波を《契約》に巻き込んだ、という長年の罪悪感から解放されたばかりだ。今まで綺理たちのことを最優先に考えていた反動で、余計にそれ以外の

ことに心を向けるようになっても不思議はない。
ただ、自分と相手との気持ちの違いを実感する。
綺理は薬種をすり潰しながら、長いため息をついた。
（もし私と冬惺が恋人同士になれていたら……冬惺にとって私との結婚が『単なる政略結婚』じゃなかったら、冬惺はこの縁談をはねつけてくれていたんじゃないかな……）

翌々日の昼下がり――。
冬惺は、夕刻に開かれる歓迎の宴に先駆けて、公女と対面することになっていた。
「理由もなく礼服で庭園を散歩していたところ、都合よく東屋の前で出くわし、どういうわけだかお互いに相手と話をしたくなり、しばし歓談をする……か。茶番だ」
「仕方ないでしょう、閣下。一応この見合いは非公式なんですから。いくら公然の事実でも」
翔波と身も蓋もない会話をしながら、池の反り橋を渡る。
ちなみに、翔波が後ろに付き従っているように見えるが、実際は彼が冬惺の道案内をしている。常識外れな方向音痴の冬惺が独力で歩いたら、まず目的地にたどりつかないからだ。
「まあ、公女が俺を嫌っているというのが救いだな。早々に面会を切り上げられる」

池の中島に足を踏み入れ、玉砂利の道を行くと、葉陰から朱塗りの柱の小亭が見えてきた。

冬惺たちが近づくと、先に到着していた公女とその侍女が急いで頭をたれる。

さすがに、「偶然出会った」というお芝居まではするつもりはないようだ。琅風の紗の被き布を被った十六歳の公女は、緊張に震えた声で名乗る。

「お初にお目にかかります。琅公国第一公女、貴銅の明花と申します」

（――ん？）

今、なにかが記憶の糸に引っかかった。だが冬惺は気のせいだろうと流し、名乗り返す。

「瑛国へようこそ、明花姫。瑛国王春怜が末弟、白桜の冬惺です」

――途端、明花が大きく息を呑んだ。

明花が弾かれたように面を上げ、冬惺と彼女は互いにはっきりと顔を見合わせる。

ふわふわした赤褐色の巻き毛。やや目じりが垂れた、大きな赤銅色の瞳　そして驚きに彩られた可愛らしい顔立ちには、気のせいではなく確かに見覚えがあった。

（……っ、こいつは……）

「あなたは、あのとき淵妖から助けてくださった……！」

感極まった声を上げた明花に、冬惺は頬を引きつらせた。翔波も後ろで主人と同じような反応をしていることは、確実だ。

間違いない。白桜院からの帰り道、淵妖に襲われていた屋形車の中にいたのはこの公女だ。

よく見れば、隣で愕然と目を見開いている黒髪の侍女も、あのとき公女のそばにいた気丈な少女である。

そしてよく聞けば、冬惺を嫌っているはずの公女が聞き捨てならないことを口走っていた。

「運命ですわ……。まさか冬惺さまが、わたくしの運命の方だったなんて……」

非常にまずい予感がする。

いっそ白を切るかとも考えたが、冬惺が淵妖を斬る特異な力を持っていることは、王宮では多くの者が知っている。すぐ露見する嘘をついても意味はない。どうしようもない。

（待て。この公女は俺を嫌っているはずで、だからこの縁談も勝手に壊れるはずで――）

珍しく、本当に珍しく冬惺が混乱しきって硬直していると、明花が胸の前でもじもじと指を絡めた。頬を染め、熱いまなざしで見上げてくる。

「先日は命をお救いいただき、ありがとうございます。お会いしたときからずっと、あなたのことばかりを想っておりました。あなたがわたくしのお見合い相手だったなんて……本当に嬉しいですわ、冬惺さま」

最悪だった。

冬惺の心中も知らず、明花は彼との対面を終えた後も夢見心地でいた。

王宮内に用意された自室で、夕刻の宴に向けて準備をしながら、ぼうっと物思いにふける。

――最初はお見合いなんて嫌で嫌で仕方なかった。

他国に行くのは不安だし、相手は武勇に優れた王弟だと聞かされていたから、きっと琅の将軍たちのように粗暴で厳つくて筋肉自慢でガハハと下品に笑う怖い人なのだと思っていた。

それに、自分はまだ恋をしていない。

絵巻物や語り部の恋語りの姫君のような、胸を熱く焦がす運命の恋をしていないのだ。

だからこの国の王都への道すがら、憂鬱な気分を紛らわすように、獣牙製の札を使った得意の占術で占った。「わたくしはいつ運命の方に出会えるの？」と。

結果は「街道脇の森の奥で運命が待っている」というもの。そこで随身たちに言って行列を待たせ、自分の屋形車だけで森に寄り道をしたところ、あの恐ろしい淵妖に襲われ――。

「そこに冬惺さまが、颯爽とわたくしを助けにきてくださったのですわ……！」

途中から侍女たちに語り聞かせていた明花は、話が佳境に入ってうっとりと目を閉じる。

「まるで乾ノ神衆のように神々しく天から舞い降りて、わたくしのためにたった一人で勇ましく化け物を退治してくださったのです。ああ、あの凛々しいお姿……。『お怪我はありませんか、姫君』と優しく声をかけてくださって、わたくしが大丈夫ですと答えると、『それならよかった。美しいあなたが傷を負うのは忍びない』と……。そうして麗しい笑みを浮かべると、

名も告げずに爽やかに立ち去ってしまわれたのです」

明花は記憶から完全に翔波を抹消し、大変な改変を加えていたが、その場に共にいた侍女が口を挟まないので妄想に歯止めをかけるものはない。

「わたくしの心を一目で奪った運命の方が、お見合い相手の冬惺さまだったなんて……。それに改めてお話ししたら、想像していたのと違ってずっとずっと素敵な方」

美男子で名高い兄の春怜王とは似ていないと聞いていたので、てっきり醜男なのかと思っていれば、美しさの系統が違うだけで冬惺もはっとするほど端整な容姿をしていた。立ち居振る舞いも気取ったところはないが上品で、少し話せば風流を解する教養の持ち主だとわかる。

そして一度恋に落ちれば、年来の理想だった優しい金髪の王子さま像と食い違っていることも気にならない。むしろ、見合いを断ろうと考えていた過去の自分が馬鹿に思えるくらいだ。

「また宴でお会いするのが待ち遠しいですわ。ああ、わたくしこんなに幸せでよいのかしら」

宴に着ていく装束や玉飾りを選びながら、明花はほうとため息をついた。そんな彼女に、侍女の一人が遠慮がちに声をかける。

「姫さま。そのことで、お耳に入れておかなければならないことが……」

「あら、なにかしら。奏珠」

奏珠という名のその侍女こそ、淵妖に襲われた際に共にいた黒髪の侍女だ。明花の侍女の中では新参者だが、淵妖を前にしても逃げ出そうとせずに主人に寄り添ったことから、今では明

花から全幅の信頼を寄せられていた。

奏珠は漆黒の瞳を翳らせると、「実は」とそっと声を潜めた。

「玉造の綺理という姫が、冬惺さまの許嫁を自称してつきまとっているそうなのです――」

三章　花軍の王宮

暮れ方、王宮の車宿りには貴人たちの屋形車が続々と集まっていた。
中でも最も豪壮な玉造家の車から降りた綺理は、侍女と共に宴の催される殿舎へと向かう。
（こういう華やかな場に出るのも久しぶりなのよね。この前まで北部の森をうろうろしていたから、変な感じ。懐かしいといえば懐かしいけど、なかなか感覚が戻らないなあ……）
盛装した綺理は、二人の侍女を従えて廊下を歩きながら、釣り灯籠に照らされた殿舎を見回した。頭を動かすたびにかんざしの垂れ飾りがシャランと鳴るのも、久しぶりの感覚だ。
――と、不意に後方から、とてとてと小さな足音が近づいてきた。
ぴんときた綺理が身構えた数秒後、金色の旋風が侍女たちを追い抜いて綺理の前に躍り出る。
「ごきげんよう、綺理さま！」
明るく可愛く元気よく挨拶しながら、綺理の裳裾を思い切り踏んづけたのは、ひらひらした紅梅の装束をまとい、淡い金髪を二つに結った少女だ。
利発そうな琥珀の瞳に、上気した桜色の頬。長じれば瑛国一の美姫となりそうなこの愛らしい少女は、数ヶ月前に八歳になった瑛国第一王女である。
「お久しぶり、千紗姫。また侍女をまいてきたの？」

千紗王女に裾を踏まれる寸前で足を止めた綺理は、余裕で挨拶を返す。
敵を転ばすのに失敗した千紗は、足をどけながらつんとそっぽを向いた。再び歩き出した綺理と並んで行きながら、ませた口調で言う。
「侍女に合わせてのんびり歩いていたら、どこかの年上の女の方に私の冬惺叔父さまを取られてしまうもの。せっかく叔父さまが帰ってらしたのに」
「私が冬惺と話していたって、千紗姫は遠慮なく割り込んでくるじゃない」
「だって冬惺叔父さまは私の叔父さまだもの！」
「私の従兄でもあるのよ！……ところで千紗姫、どうして小走りになっているの？」
「綺理さまだって早足になっているくせに。叔父さまに先にご挨拶するのは私なんだから！」
千紗は、べえだと行儀悪く舌を出した。綺理はむぅと彼女と顔を見合わせる。
（あ、なんか感覚が戻ってきたかも）
春怜王の長女である千紗は、歳が近いこともあって叔父の冬惺にやたらと懐いている。
母王妃と冬惺の不仲などなんのその。その懐きようといえば、冬惺に近づく女性に敵愾心を燃やし、追い払おうとするほどだ。綺理も王宮の宴に出るたびに、なんらかの形で彼女の妨害を食らっている。
今日もついつい千紗と競って足を速めていると、侍女の梨英に呆れ声でたしなめられた。
「姫さま。そろそろ、やんごとなき姫君にあるまじき速度になっておられます」

「そうですとも。千紗殿下もそんなに走ったら転ばれてしまいますわ。ほら、梨英」
年長の侍女の桂鈴もおっとりと言い、二人してがしっと綺理と千紗の腕をつかんで止める。
「気が急いておられるのはわかりますが、少し落ち着かれませ。きっと冬惺さまは、すぐに姫さまに説明してくださいますわ。琅の公女殿下との縁談は断る――と」
「……」
桂鈴は確信ありげに微笑んだが、綺理はそうならないことを知っている。複雑な心境のまま、綺理は千紗と共に廊下を歩いていった。

宴の間に着いた綺理たちを迎えたのは、軽いどよめきとわずかに緊張した空気、そして数多くの好奇の目だった。興味深げな視線や不安げな視線が広間中からちらちらと送られてくる。
（……？　なに、この雰囲気……？）
綺理は見知った貴族と簡単な挨拶を交わしながら、さっと広間の状況を確かめる。
玉造家と親密な北部貴族たちははらはらした様子でいるし、逆に、玉造家の権勢を快く思っていない南部貴族たちはにやにやしていた。特にどちらかの派閥に属するというわけではない者たちは、とびきりの演し物を前にした観客のような表情で成り行きをうかがっている。
その理由はすぐにわかった。
綺理は梨英と桂鈴が息を呑むのを聞いて、二人の視線の先に目を転じ、――そこで繰り広げ

られている光景に音を立てて固まった。
冬惺が、赤褐色の巻き毛の美少女と仲睦まじく話している。
（あ、あれって琅の公女さまよね？――なんで!?）
会話の内容まではわからないが、公女はそれはそれは楽しそうに談笑している。
冬惺のほうも、作り笑顔ではあるものの公女の相手をやめたがっている様子はない。そもそも、あの冬惺が、毒舌で相手を怒らせることも泣かせることもしていない！
ゆうらりと公女のほうに視線を戻せば、彼女はほんのりと顔を赤らめ、潤んだ赤銅色の瞳で冬惺を見つめている。そのまなざしに込められた意味は、一目瞭然だ。
不安と一緒に、別の不快感が綺理の胸にこみ上げる。
（話が全然違うじゃない。冬惺だってお見合いを嫌がってる風に見えないし。だいたい、冬惺のくせになんでそんなに愛想がいいの!?　そんな態度だから公女さまが冬惺に恋しちゃったんじゃ……って、手、手、手が――！）
公女の手が冬惺の頬に触れるのを見て、綺理の中でなにかが吹っ飛んだ。
野次馬が「修羅場だ、修羅場だ」とわくわくささやくのも、一切耳に入らない。怒りによく似た、けれどずっともやもやと渦巻く感情に突き動かされて、綺理は足を踏み出した。

（この馬鹿閣下、この馬鹿閣下、この馬鹿閣下――っ！）

翔波は、綺理が殺気立って近づいてくるのをいち早く察知し、かたわらの主人の背を蹴り飛ばしたい衝動に駆られていた。

（なんでこういうことに限って鈍いんだ君は。だいたいこの状況でこの相手に「睫毛が頬に落ちておりますわよ」なんて言われて、どうしてそのまま取らせてしまうんだ間抜け！）

変なところで無防備な冬惺に胸中で毒づいていると、彼はようやく綺理に気づいた。まずい状況だという自覚はあるようで、いつになくうろたえた様子で互いを紹介している。

「――明花姫。こちらは私の……従妹、の玉造家の二の姫です」

「初めまして、明花さま。冬惺の従妹の、玉造の綺理と申します」

綺理は冬惺をきっと睨むと、むっつりした顔のまま挨拶をした。やきもちを隠そうとしないその態度は、千紗が冬惺に近づく女性に対してするものとよく似ている。つまり、八歳の千紗と同じくらい子供じみている。――相当、冷静さを失っているようだ。

冬惺が彼女の肩を揺すり、綺理、と耳元で小さくたしなめたが、翔波としては「余計ややこしくなるから恋愛音痴閣下は引っ込んでいてくれ」と叫びたい。

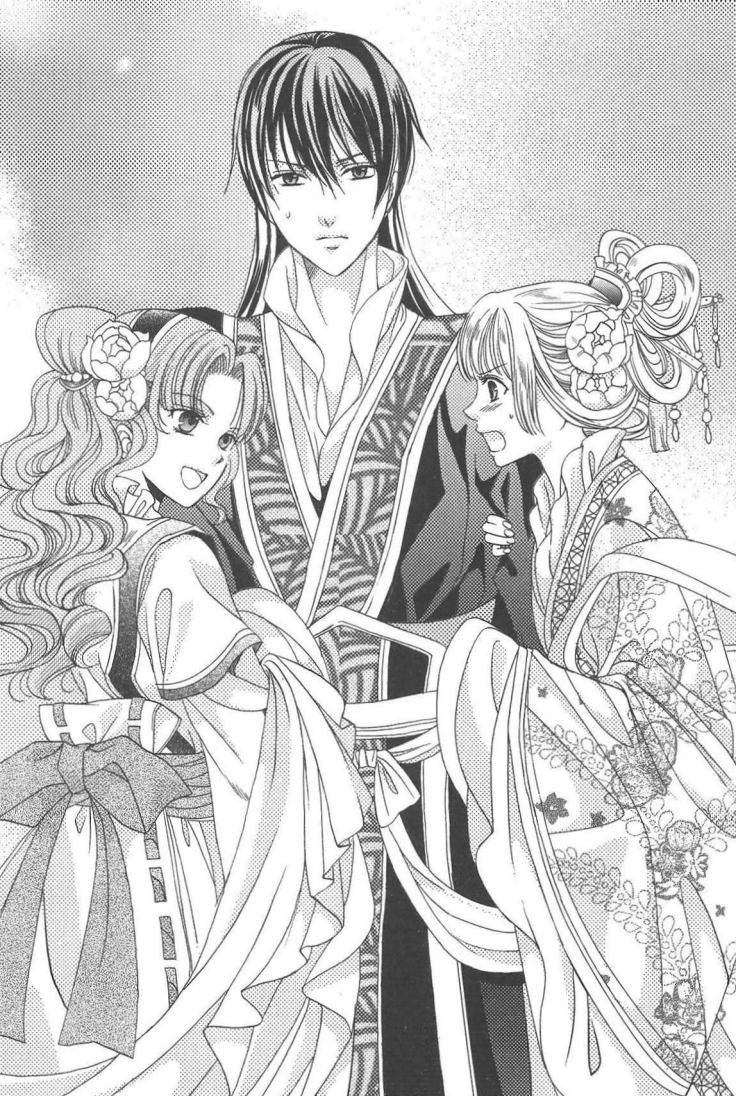
案の定、二人の親密な様子に、明花がさっと顔を強張らせた。

「綺理さま……。では、あなたが、わたくしの冬惺さまの……」

既に、冬惺と綺理の関係を聞き及んでいたのだろう。明花は、そばに控える黒髪の侍女と目

を見交わすと、意を決したように綺理と向き合う。
（まずい。この公女、絶対になにかまずいことを言う気だ！　しかも直球で！）
翔波は焦って妨害策を考えた。周囲の人だかりに目をやり、この場に乱入してくれそうな千紗王女を捜す。だが運悪く、千紗は侍女に小言を言われていて身動きが取れそうにない。
その間に明花は、あろうことか冬惺の腕を取って叫んだ。
「綺理さま。――わたくし、あなたには負けませんわ！」
決定的な宣言。広間がざわっと揺れる。
「わ、私だって冬惺は渡しませんから！」
綺理もかっとなったように冬惺の反対側の腕にしがみついた。
無責任な野次馬がさらにどよめく。
非公式の見合い相手、対、事実上の婚約者。
激しく火花を散らす二人の少女を両腕に、冬惺が虚ろな目をさまよわせていたが、翔波にはこの苦境から主人を救うすべは考え出せなかった。

その後の宴はさんざんだった。



綺理と明花が競うように冬惺に話しかけ、自分の勧める料理を口にしてもらおうと躍起になり、人目もはばからずに冬惺の取り合いを繰り広げる。

その周囲では互いの侍女同士が敵意を燃やし合い、翔波が冷や汗を流しまくる。なお、途中で翔波と桂鈴の姿が広間から消えたのは、桂鈴が殿舎の裏で「これはどういうことですの？」と翔波を笑顔で尋問していたからしい。

最終的に、千紗が子供にだけ使える必殺技「泣いて駄々をこねる」を使って冬惺を宴席から連れ出したため、宴はなんとなく宙に浮いた空気のまま終わった。

だが冬惺争奪戦というこの事件が一夜のうちに王宮中に広まることは、疑いなかった。

玉造邸に帰った綺理は、憤怒の形相の父の前に立って恐々としていた。

影珀は宴には参加せず、春怜と個人的に話をしてきたところだ。白桜王家側からは今回の縁談を断らない、と突っぱねられて激怒しているところに、娘が宴で騒ぎを起こしたと家人から報告を受けたのである。累積した怒りがどうなっているのか、想像するだに恐ろしい。

（というか、よく考えたら私、ものすごくはしたないことしたよね？　人前で冬惺にしがみついて、あ、あんなこと叫んで……）

綺理は赤くなったり青くなったりしながら、とにかく頭を下げた。

「申し訳ありません。桂鈴たちが止めるのも聞かず、宴席で無作法なことを……」
「姫さま！　旦那さま、私たちが姫さまをお止めしなかったのです。お叱りは私たちが――」
部屋の隅に控えていた桂鈴が、慌てて綺理の言葉を遮る。――しかし。
「いや。綺理、おまえはよくやった」
予想外の台詞に、綺理と桂鈴は固まった。
「……お父さま？」
「公女にそこまで言われて黙っていたら、玉造家の名折れだ。玉造家の婚約者を公女に横取りされるなどという侮辱、これ以上許してはおけん。かくなる上は、綺理！」
「は、はい！」
びくっと背筋をただした綺理に、影珀は据わった目で命じた。
「――色仕掛けで冬惺を陥落しろ！」

数秒、綺理の思考が停止した。
（色、じか、け。……）
言葉の意味を思い出した瞬間、耳まで赤くなる。
「でっ、でででできますかそんなこと――！」
うっかり、薄着で冬惺にしなだれかかって甘えた声を出して片目をぱちんとつむっている自

分を想像してしまい、綺理は顔から火を噴きそうになった。
（無理、絶対に無理！　しかも「おまえがそんなふしだらな真似をするとは思わなかった」って軽蔑される気がする。そんなことになったら、恥ずかしくて冬惺と顔を合わせられない！）
羞恥のあまり全身真っ赤になっている娘に、影珀は追い討ちをかける。
「既成事実さえ作ってしまえばこちらのものだ。冬惺はおまえとの婚儀を拒めなくなるし、玉造家の姫が琅の公女に勝ったことにもなる！」
「嫁入り前の乙女になんてこと言うんですか――っ！　結婚前の男女が、そんなふしだらな！　そ、それに私は、冬惺といきなりそんな……」
「？　だがおまえと冬惺はずっと婚約者同士として過ごしてきたのだし、接吻の十やその少し先くらいまではいっているだろう？」
「いってませんっ！　まったく、ちっとも、何一つ！」
綺理が全力で否定すると、影珀はさすがに思うところがあったのか黙った。息を切らしている娘を上から下まで見て、しばし考えこむ。
「……確かにおまえたちは子供の頃からのつきあいだからな。男女の関係というものを意識するきっかけがなかったのかもしれん」
わかってくれた、とほっとした矢先に影珀が続けた。
「だからこそこの機会に色仕掛けでもしなければ、ずっと女として扱われんままだろうが！」

一理ある。

（……って、なに考えてるのよ私！）

綺理が恥ずかしさのあまりわたわたしているうちに、影珀は桂鈴と梨英に話をつけてしまった。彼女たちも彼女たちで、力強く請け負う。

「お任せください、旦那さま。衣装と化粧で無いはずの色気を作り出すのも侍女の仕事です」

梨英がよくよく聞くと失礼なことを言い、桂鈴も穏和な顔で不穏なことを言う。

「ええ。冬惺さまが誰のものか、はっきりさせておかなければなりませんものね。冬惺さまも陛下の顔色をうかがわれるより、姫さまの色香に浮かされればよろしいのです」

「梨英、桂鈴！　あ、あなたたちねえ……」

口をぱくぱくさせた綺理に、影珀はこれ以上の問答は無用とばかりに拳で卓を叩いた。

「玉造家当主として命じる！　綺理、おまえは冬惺を骨抜きにして白桜王家側から此度の縁談を断らせるのだ。正攻法で難しければ、媚薬でも調合して一服盛れ！」

とんでもない当主命令を下された、翌々日のことだ。

綺理は王妃のごく私的な楽の会に招待され、王宮を訪れていた。

この会には冬惺と明花も招かれているというので、綺理の身支度にかける侍女たちの熱意には並々ならぬものがあった。身支度の指揮を執った梨英と桂鈴は、今も綺理の隣で自信たっぷりにうなずいている。

「金蘭の血を引かれているだけあって、姫さまはもとがよろしいですから。着飾らせ甲斐がありますこと。このまま猫をかぶっていれば、大人びた装いもよくお似合いですよ」

「梨英の言うとおり。姫さまはお肌が少々血色がよくていらっしゃいますけど、お化粧次第ではかなげな風情にもなりますのね。本当にお綺麗ですこと。きっと冬惺さまも、いつもと違う姫さまに心を奪われてしまいますわ」

口々に言う侍女たちに、綺理も心が浮き立ってきた。鏡池に張り出した回廊をしずしずと歩きながら、水面に映る自分を見下ろしてみる。

以前冬惺に「綺理に似合うのは緑か萌黄」と言われたので、今日は『女郎花』と呼ばれる緑系の装束を選んだ。やわらかい光沢の純白の裳に、黄緑と緑の紗の上衣。刺繍を施した濃緑の広帯の上から、金糸の細帯を品よく締めている。

長い金髪は、両脇の一房を残してすべて頭上にかんざしでまとめ、うなじをさらす型だ。

しっとりと落ち着いた装束に合わせて、化粧も格段に大人びた趣で施されている。最初に鏡を見たときは、大人っぽい雰囲気に自分でも少し驚いてしまったほどだ。

（早く冬惺に見せたいな。冬惺も驚くかな。……翔波は驚くけど、冬惺は顔に出さなそう）

そっけない冬惺のことだから「綺麗だ」とは言わないだろうけど、この際「見違えた。馬子にも衣装、綺理にも化粧だな」と意地悪く笑むくらいの反応をくれればそれでいい。

うきうきして角を曲がった綺理は、その先に明花がいるのを見てふっと微笑みを消した。つい、まじまじと観察してしまう。

明花はふわふわの赤褐色の髪を背に流し、一部を組み紐ではなく淡色の細布で結んでいた。紅系の上衣を何枚も重ねた紅の匂の装束をまとい、ひらひらした細長い白布を肩にかけたその姿は、悔しいがとても可愛らしい。

「真夏だというのにあんなに着込んでいらして。南部趣味の方はやせ我慢がお好きですね」

梨英は反感をこめてつぶやいたが、綺理のうきうきした気持ちは急速にしぼんでいった。明花に比べたら自分の恰好は地味で見劣りするのでは、と不安になってくる。

明花は綺理に気づかず、部屋の内側にいる誰かと話していた。ゆっくりと歩む綺理の耳に、その相手の声が滑り込んでくる。

「――綺麗ですね、よくお似合いですよ。やはり文化の中心、琅公国の方は趣味が洗練されている。瑛風と琅風の装束をかけ合わせて、これほど美しく着こなされるとは」

冬惺の声だ。そう気づいて、綺理は胸がしめつけられるのを感じた。――冬惺が女性の恰好をまともに褒めているのなんて、初めて聞いた。

「ありがとうございます。琅と瑛は相性がよいのです。ですからわたくしと冬惺さまも――」

「私は北部育ちなので、琅風に合う南部の流行には明るくないのですが……ご迷惑でなければ、瑛にいらした記念に、あなたの御髪に似合う髪飾りを贈らせてください」

「まあっ、冬惺さまに髪飾りを選んでいただけるなんて光栄ですわ！」

（贈り物、なんて……。冬惺、明花さまに優しいんだ）

やだな、と思う。冬惺が明花の機嫌を取っているのを聞くと、彼が明花をきちんと『女性』として扱っているのを聞くと、嫌な気持ちがどんどんこみ上げてくる。

視線の先で、明花がすっと部屋の奥に入っていく。

そこで綺理は、自分が完全に足を止めていたことに気づいた。明花に続いて入室しようと一歩踏み出し——彼女と入れ替わりに出てきた翔波と、廊下で鉢合わせになる。

「翔波！　ごめんね、一昨日は全然話せなくて」

気詰まりのない相手にほっとして声をかけると、翔波は目を瞠った。戸惑ったように視線をそらし、また綺理の恰好に戻しては照れくさそうに言う。

「……驚いた。すごく大人っぽくて、綺麗だよ。なんだか僕らの綺理じゃないみたいだ」

「えへへ、ありがと。翔波も文官服着てると、きりっとしてていつもより恰好いいよ」

綺理は自然に微笑んだ。幼なじみの言葉に勇気付けられて、冬惺に早く見てもらいたいという気持ちが復活する。

「そりゃどうも。やっぱり綺理は見る目あるね、もう一人の幼なじみと違って。——と、さっ

きの会話が聞こえていたみたいだから言うけど、儀礼的な贈り物を選ぶのは僕だからね？」

翔波は桂鈴のもの言いたげな視線にたじろぎ、小声で言い添えた。心強い味方のおかげで、綺理の胸に立ち込めていたもやもやした思いも晴れてくる。

ありがとう、とささやき返したところで、翔波の後ろで足音がした。

（冬惺！）

会話している気配を察したのか、深紫の武官礼装に身を包んだ冬惺が廊下に出てくる。

「翔波、綺理はそろそろ……と、ああ、来ていたのか綺理」

「うん、ついさっき。……ええと。ごきげんよう、冬惺さま」

翔波がすっとわきに退いて綺理の全身が見えるようにすると、冬惺は綺理の数歩前で立ち止まった。いつになくじっと見つめられて、綺理の鼓動が速くなる。

時間がたつにつれて緊張で息が詰まり、綺理は耐え切れずに顔を伏せた。

（どうしたんだろ冬惺。いつもはこんなに黙り込んだりしないのに。気合い入れすぎで馬鹿みたいって思ってるのかな。まさか、呆れてものも言えないほど似合ってないってこと？）

それとも明花と比べてがっかりしているのだろうか――。そんな疑念が脳裏をよぎり、心臓をぎゅっとつかまれたような感覚に襲われたときだった。

「――なんて恰好をしているんだ、おまえは」

不機嫌な声に、綺理はびくりとした。顔を上げると、冬惺が侍女たちを睨んでいる。

「そんな恰好で、王宮の中をここまで歩いてきたのか。――桂鈴、梨英。このふざけた身なりはおまえたちの見立てか？」

「女郎花の襲を選ばれたのは姫さまですが、それ以外は。なにかご不満でも？」

桂鈴は、玉造の里にいた頃から面識があるだけに、冬惺に対してもあまり遠慮がない。梨英共々、挑戦的に胸を張った。

「不満？　当然だ。薄手の装束に、体の線が出る着付け。首筋も襟回りもさらしすぎだし、化粧といい香といい、いったいどこの男を誘うつもりだ？」

ものすごい単語を聞いて、綺理はざっと青ざめた。言われてみればこの恰好は、大人っぽさというより色っぽさを狙ったものに見えないこともない。

（ひょっとしてこれ、いきなり色仕掛け作戦だったの!?　冬惺はそれに気づいて怒ったんだ。ど、どうしよう。軽蔑されちゃったかも……）

綺理は涙目になってうつむいた。

その途端、翔波がガッと冬惺の向こうずねを蹴り飛ばす。

「閣下、その物言いはあまりにもひどすぎます。謝罪してください」

「……おまえの主人への態度もたいがいひどいぞ。だいたいおまえは心配にならないのか。俺以外の男の目に触れるところで、綺理がこんな恰好をしていて！」

「……え？　冬惺以外の男の方って……」



なにを言われたのか、綺理はすぐにはわからなかった。ほかの男ということでとりあえず翔波に目をやると、彼は「違う違う」と手を振る。

「閣下の不機嫌はそちらでしたか。では綺理が綺麗だということは認めているんですね」

「そんなことは俺だけが知っていればいいんだ。今までは婚約者の俺がいたから身の程知らずなことを考えるたわけ男もいなかったが、今の状況では綺理に粉をかける馬鹿どもがわいて出てくるだろう。綺理、おまえは俺の目が行き届かないところで無自覚に着飾るな」

（……！）

冬惺の「心配」の意味を理解して、綺理の心はどん底から天まで一気に浮上した。

しかも今、さらりとすごいことを言わなかったか。彼がどこまで意識して発言していたのかは謎だが、嬉しいものは嬉しいし、面映ゆい。頬がかあっと熱くなるのを止められない。

「あの、冬惺。ありがとう、心配してく――」

「冬惺叔父さま！　今日は私も箏を奏でるの。聞いてくださるでしょ？」

だしぬけに、千紗が綺理と冬惺の間に飛び込んできた。

（そうだった。この子もいるんだ……）

思い切り邪魔されてがっくりした綺理の前で、千紗が冬惺の腕にぶら下がる。

「綺理さまったら、なあに、そんなに唇赤くしちゃって。やらしいの！　叔父さま、化粧おばけは放っておいて、私と一緒に参りましょ！」

「化粧おば……っ」
硬直した綺理たちをよそに、千紗は苦笑する冬惺を引っ張って先に部屋に入っていった。

瑛国王妃、朱華は昔から冬惺と仲が悪い。
春怜王と並んでも見劣りしないほどの派手な美貌の持ち主である王妃は、冬惺が初対面のときに彼女の美しさにかけらたりとも関心を示さなかったことをいまだに根に持っているらしく、この義弟を虫かなにかのように忌み嫌っているのだ。
もっとも冬惺は春怜の浮気を堂々と諫めてくれる唯一の者なので、一応益虫だと認めているようではある。とはいえ、彼女が冬惺を私的な集まりに招くことはまずありえない。
今そのありえない事態が起きているのは、ひとえに王妃が冬惺を針のむしろに座らせて楽しみたいからであった。
「どちらの姫の音色も素晴らしかったこと。ほほ、冬惺公は、明花姫の奏でた恋歌と綺理姫の奏でた夏歌と、どちらがお気に召しまして？」
管弦の遊びを終えて茶会の卓を囲むと、王妃は答えにくい質問をにこやかに振った。
聞くな、と言いたげに冬惺の口元がかすかに引きつる。
綺理は茶碗を口元に運んだまま、勝ち誇ったように微笑んでいる明花を横目で見た。

廊下で冬惺と話したときの嬉しい気持ちは、とうにかすんでいる。

明花の演奏は文句のつけようがないほど素晴らしかった。それに引き換え自分は、もともと十人並みの技量しかない上に、明花が冬惺にべたべたしているのが気になって四度もとちったのだ。あれでは八歳の千紗のほうがよほど上手だ。敗北感で、気持ちが沈む。

「――演奏の技量は、芸術の国の姫の右に出る者はいないでしょう。ですが恋愛と夏の風景とを並べて甲乙つけろというのは無理な話。特に、どちらも古くから伝わる名歌となれば」

「ほほほ、うまくかわしたこと。――明花姫。義弟はこの通り、美を素直に讃えるということを知らぬ無粋者ですの。ですがこれだけは安心なさって。冬惺公は浮いた噂一つない真面目な方ですから、ひとたび結婚すればどこかの姫に見向きをすることはなくなりましてよ」

「義姉上のご夫君とは違いましてね」

「お黙り！」

王妃はくわっと冬惺に噛みついてから、我に返って「ほほほほ」と誤魔化し笑いをした。

綺理は、今の皮肉で明花が冬惺に幻滅してくれないか、と期待した。しかし惚れた欲目か、明花には冬惺が何を言っても素敵に見えているようだ。

そして王妃は、玉造家の権勢を苦々しく思っている側の人間である。その後も明花を冬惺にあてがわせるような発言を繰り返しては、冬惺が困惑するのと綺理が不安な顔になるのを、敵の不幸は蜜の味とばかりに眺めていた。

寒い会話がしばらく続き、置いてけぼりにされた千紗が退屈を訴えだした頃、王妃が思い出したようにぽんと手を打った。

「そういえば明花姫は、占いがたいそうお得意だとか……」

「占い？」

「そうよ、千紗。あなた、占いが好きでしょう？　明花姫にお願いしてみたら？」

千紗がこくりとうなずくと、明花は自分の独壇場が訪れたとばかりに笑った。

「わたくしは貴銅の明花ですから。もともと貴銅家は鬼道――占術の類を生業とする家なのです。よろしければその業の一端をお目にかけましょう。――奏珠、占骨札を用意して」

隅に控えていた明花の侍女の一人が、一礼して螺鈿の小箱を持ってくる。

奏珠と呼ばれていたその侍女を、綺理はなにとはなしに注視した。

十七、八歳といったところか。まっすぐな黒髪に、伏し目がちな漆黒の瞳。雰囲気が地味なので侍女たちの中にいると目立たないが、よく見れば整った目鼻立ちをしている。

奏珠が小箱から一組の獣骨製の札を出すと、壁際で見ていた翔波が感嘆の息を漏らした。骨董好きの彼が反応するだけあって、どの札にも美しい絵柄が極彩色で描かれている。

「ではまず千紗さまを占いましょうね」

明花は札をよく交ぜ、何枚かを引いて卓の上に並べた。端から順にめくっていくと、北瑛島ではあまり見られない花や獣や物品、暗示的な図像が現れる。

「悪くない運勢ですわ。嵐は起きますが船は沈みません。あなたの信じたい人は、信じてよい人です。選択の時がきたら、大切な人の望むほうを選んでください。……ええと、千紗さまの大好きな叔父上さまが選んだほうの人に、お味方するのがよいということかしら」

子供にわかりやすく言い換えながら、明花は「わたくしを信じて、わたくしに味方して」と言わんばかりの熱視線を千紗に送る。冬惺の親族から懐柔しようと考えているのか。

そこに、奏珠がやんわりと口を挟んだ。

「明花さま。お次は、綺理さまを占ってさしあげてはいかがです？」

「私、ですか？」

なぜに、と綺理はきょとんとした。

明花も可憐な顔をしかめる。けれど彼女は、奏珠になにごとかを耳打ちされると一転して乗り気になった。綺理が遠慮するのも聞かずに占いはじめる。

「まあ、綺理さま。ひどい運勢ですわ。――あなたの手札が裏返ります。大きな変転が訪れ、味方だと信じていた人がそうではなくなります。動きだした車輪を止めることはできません。あなたは、海からの使者が玉をさらっていくのを見送ることになるでしょう」

弾んだ声で告げる明花に、綺理は胸がざわざわした。

――婚約者だと信じていた人がそうではなくなる。進みだした縁談は止められない。水海の向こうから来た公女が冬惺をさらっていく。……今の占いは、そう聞こえないだろうか。

綺理の心中を察して、梨英がふんと鼻を鳴らした。
「お気になさることはありません、綺理さま。ただの占いなんですから」
この台詞に、奏珠以外の明花の侍女たちが一斉に眉をつり上げる。
「ただの、とはなんですの？　貴嗣の明花さまの占術といえば、よく当たることで評判なんですのよ。琅の宮廷では、明花さまに占っていただくために遠方からわざわざ訪れる者が後を絶たないというのに……」
「それでは公女殿下は、琅公国の方々にたいそう求められているのですね。それほどの御方をごく短期間とはいえ瑛国の宮廷で独占してしまうとは、おそれおおいことです」
とっとと帰れ、と暗に言った梨英に、明花の侍女衆がいきりたつ。
一触即発の空気の中で、冬惺が茶碗を置く音を室内に響かせた。
「――古来、凶事の予言者は疎まれるものだということは、鬼道の家が一番よくご存じでしょう。そして予言が当たるか否かは、人の言葉ではなく時が証明する。その時が来るまで、人の身にできるのは、疑心がさらなる凶事を招かぬよう心しておくことではありませんか？」
絶妙な言い回しだった。
「信じないのは当然。悪い占いを気にする心が悪い結果を招く」と言っているようにも聞こえるし、「占いが当たってから『それ見たことか』と溜飲を下げればいい」とも聞こえる。
双方が自分に心地よいほうに受け取って引き下がり、場が鎮静化する。叔父の機転が場を収

めたということだけはわかったのか、千紗が得意げな顔をした。綺理もほっとする。
（……ん、そうだよね。明花さまの占いが当たるとは限らないもんね）
一人だけ空気を読んでいない明花が、潤んだ瞳で冬惺を見上げた。
「ええ！　いずれ時が証明しますわ。わたくしの運命の方についても……」
「……」
この公女の占い、当たらない気がする。
綺理と冬惺と翔波はまったく同じことを考え、思わず三人で目を見交わした。
「うふふ、それではわたくしの冬惺さまの運勢も占いますわね。ええと……まあ！」
嬉しそうに札を並べていた明花が、札をめくり終えるなり顔色を変えた。
「大変ですわ、冬惺さま！　女難の相が出ております！」
「……」
やっぱり当たるのかも。
三人がついそう思ってしまった瞬間であった。

「奏珠。あなたの言っていたことは本当でしたわ」

その日の夕方。自室に戻った明花は、薄暗い寝間にこもって硬い声を出した。
「茶会の席では詳しく告げませんでしたけれど、冬惺さまの占いの結果は『蜘蛛が巣を張っている。呪われた約定の女が害をなす。金色の鎖が迫り、背信が明らかになる』……」
ほかの侍女たちは下がらせたので、部屋にいるのは明花と奏珠だけだ。部屋の隅にたたずむ奏珠に、明花は寝台の上で札をもてあそびながら言う。
「冬惺さまの周囲で罠が張られているのです。『呪われた約定』と言うべきなにかを過去に行った女があの方を害す。『鎖』は心を捕らえている存在。……そして最後に出たのはこの札」
敷布の上に散らした札から、一枚を拾い上げて残照にかざす。
不確定の未来や、障害物、幻惑を示す『霧』の札だ。だが明花にはこの札が、綺理を示しているように思えてならなかった。
「あなたの集めてきた情報によると、綺理さまは毒薬を扱う悪の薬師なのよね。やはり綺理さまが、冬惺さまを害そうとしている『金色の鎖』なのですわ。あなたの言っていた通り、怪しげな薬でわたくしの冬惺さまをたぶらかして……ああ、なんて恐ろしい方なんでしょう！」
明花は、昼間に会ったときの綺理を思い出す。
陰影を加えた目許。濡れたように赤い唇。惜しげもなくさらされた喉元やうなじから匂い立つ色香。明花には決して似合わない『女郎花』の装束を着こなし、最高級の玉飾りの数々をさりげなく身につけたその姿は、まさしく女圧し――他の女性を圧倒するほど美しかった。

（初めてお会いしたときは『元気でお可愛らしい』という印象しかありませんでしたのに、あんなに化けるなんて。あれこそ、綺理さまが魔性の薬師である証ですわ！）

絵巻物でも、可憐で純粋な主人公の前に立ちはだかる恋敵は、妖艶で意地悪な女だと決まっている。そしてその女は恐ろしい野望のために、怪しげな術で殿方を意のままに操っているのだ。主人公は運命の人を救い出して真実の愛に目覚めさせるため、戦わなくてはならない。

「そうですわ。冬惺さまが色よいお返事をくださらないのも、綺理さまに惑わされているからです。――ああでも、か弱いわたくしはどうやってこの試練に立ち向かったらよいの？」

綺理を占った結果を考えると、最終的に魔性の薬師が負けることは確実のようだが、そこに至るまでには明花が彼女から嫌がらせをされたり毒を盛られたりするかもしれないのだ。

自分を抱いて震えた明花のすぐ後ろで、静かな声がした。

「姫さま、恐れることはありません。一つ、対抗する術がございます」

振り返ると、いつの間にか奏珠がそばに来ていた。明花は赤銅色の瞳を見開く。

「術？　乾ノ術の一種か、貴銅家に伝わる古の術かしら？」

「古の術です。怪しげな術を使う綺理さまを破るには、姫さまも御力を手に入れねばなりません。……冬惺さまのためにやり遂げるご意志はおありですか？」

落ち着いた語り方だ。ひょっとして奏珠は貴銅家の古い文献からなにかを見つけていたのかもしれない。奏珠は優秀な侍女だし、彼女の言う通りにすれば安心という気がする。

なにより「冬惺さまのために」という言葉に動かされ、明花は答えた。
「あの方を手に入れるためなら、なんでもしますわ。奏珠、その術を教えて」
奏珠は漆黒の瞳をわずかに細めた。
「――それでは、姫さまの望みのままに」

（……やっぱり気になる）
綺理は今夜も薬房にこもり、もやもやした思いを解消したくて調剤に励んでいた。父は綺理が媚薬の用意をしているものと思っているようだが、調合しているのはただの毒薬である。
（だって、結局冬惺がどうするつもりなのか聞いてない。狩占祭が終わるまでに明花さまが断らなければ縁談はまとまっちゃうっていうのに、冬惺は明花さまに優しいし。……べたべたされても振り払わないし。……そりゃあんなに可愛らしい方に迫られたら悪い気はしないのかもしれないけど。……わ――っ、もう、二股かけられてる気分！　冬惺の馬鹿ー！）
苛立ちをぶつけるように毒草の根をぶった切り、ぐりぐりとすりつぶす。
その後で、精製していないこの根の汁なら毒性が低いから一服盛ってもお腹を壊すだけだし大丈夫だよね、という魔のささやきが脳裏をかすめ、そんな自分を猛烈にぶん殴りたくなった。

「薬師が節度を失ったら終わりだ」と、薬師の師匠から口癖のように言われていたのに！

今日はもうやめておこう、と調剤器具を片付け、綺理は椅子の背にもたれた。

（……なんか、一人で悩んでると駄目だ。むかむかするし、心細いし……）

目を閉じると記憶の声が耳に蘇り、ますます綺理を不安にさせた。

『あなたの手札が裏返ります。大きな変転が訪れ、味方だと信じていた人がそうではなくなります。動きだした車輪を止めることはできません。あなたは、海からの使者が玉をさらっていくのを見送ることになるでしょう』

壮麗な王宮を中心に、貴族の邸宅や大小の寺院、種々の倉、都人の家々、職人の工房などが幾重もの輪のように建ち並んだ王都――輪瑛。

その輪瑛の一角、月明かりに照らされた高楼の屋根の上で、真羅は酒杯を傾けていた。

（あれ以来、妖道の森に淵妖が集っている気配はない。雑魚を従える大淵妖がいないのだから当然とも言えるが……この静けさは不気味だな）

空になった杯を指で弾き上げ、虚空に消す。早くも残り少なくなったひょうたん水筒を腰帯に吊るし、真羅は乾いた風に吹かれて立ち上がった。

「さて、従者のところに酒をせしめに行こうか、キリのところに薬をねだりに行こうか。……キリの毒薬のほうが渇きは癒えるのだし、不味くても、死ぬほど不味くても我慢するか」

独り言で結論を出すと、高い屋根の上からふわりと身を躍らせる。――そのとき。

〈見つけたよ。もう一人の私〉

声がした。頭がズキンと痛み、四肢が強張る。

（！）

どさりと地面に落下した真羅は、ゆるゆると身を起こして震える手を握った。体はすぐに自制を取り戻したが、頭痛はやまない。頭の中でまた声が響く。

〈真羅。君は私とのつながりを完全に断てたと思っていたのかね？　本体と分身をつなぐ魂の糸は、そう簡単に消えはしない。一度見つけたからには、もう逃がしはしないよ〉

「――万宵」

真羅は翡翠の瞳を見開き、本体の妖王の名を愕然とつぶやいた。

――淵妖が体を分けて生み出した分身は、本体に従属し、本体の意識の干渉を受ける。だが真羅は分身でありながら、例外的に本体と別の心を持った。だからそのときから、首縄を切って逃げ出した子狐のように、淵海にいる万宵とのつながりは失せたのだと思っていた。けれど万宵は真羅を見つけ出し、再びそのつながりを結んでしまったのだ。

「……そうか、刹利なのだね。君の力のかけらを持っていた刹利に触れてしまったから、君は

刹利を通して私の魂につながる糸をつかんだ」

自分の言葉を思い出す。災いの終わりと始まりは、同じ札の表と裏――。

〈そのとおりだよ、真羅。君を捕らえて一つに戻るのもいいが、せっかく君は地上にいるのだしね。地上にいるまま、君が私になればいいと思い直したのだよ〉

くすくすと笑う声が脳裏で響き、真羅はすっと青ざめた。装束の左胸――かすかに震える核の勾玉のあたりを、ぎゅっとつかむ。

「――万宵、私は決して君の心に引きずられたりはしないよ」

〈それはどうかな。君が持つのは、所詮は私の過去の心だ。ならば君は私の過去をなぞるだけ。私が地上を守るという約束を棄て、北瑛島を沈めると決めたように、君も必ず心を変える〉

「……っ」

〈心が揺れたかね？　まあ、今夜は予言だけで退くとしよう。どうせ君と私のつながりは、二度と断たれることはない。それでは過去の私、いずれまた――〉

万宵の気配が遠ざかり、頭痛が消えた。

真羅は背筋に冷たいものが下りるのを感じ、険しい顔で夜空を仰ぐ。

そこにかかった満月は、淵海から強い妖気が立ち昇っていることを示す、不吉なあかがね色をしていた。

四章　薬師の夜宴

「翔波どの、少々よろしいですか？」
書庫でそう呼びかけられたとき、翔波は激しく嫌な予感がした。書棚から抜いたばかりの綴じ本を手に振り返ると、明花の侍女が五、六人で翔波を取り囲んでいる。
「……仕事中ですので、手短にすむ用件でしたら」
渋々応じれば、侍女たちは矢継ぎ早に質問を投げかけてきた。
「冬惺さまのご趣味は」に始まり、好きな食べ物、好きな色、好きな楽曲、読んでいる本――。
手当たり次第に冬惺の情報を聞き出そうとする彼女たちに、翔波はうんざりした。
当たり障りのない質問にだけ答え、追いすがる侍女たちを振り切るように書庫から退散する。
すると今度は図書殿の回廊の途中で、小さな手に文官服の袖を引かれた。
「千紗さま。またお一人で……て、あの、どちらへ？」
「しっ。いいから来て。逢い引きにちょうどいい茂みがあるの」
たぶん千紗は、逢い引きとは内緒話のことだと思っているのだろう。大人社会で育っているせいか、変なことばかり聞きかじってくる王女に引っ張られ、翔波は庭園の茂みの裏に回った。
千紗は周りにほかの人間がいないことを確認し、叔父の従者に問う。

「翔波。叔父さまはどこ？　また綺理さまと明花さまが来ているんでしょ？」
「はい。南の露台で話しておられます、が……そちらではありませんよ？」
「いいの、こっちで。南の露台なら、のぞき見にちょうどいい茂みがあるから」
別の方向に向かった千紗を追っていくと、確かに露台をのぞき見るのにいい位置に出た。
茂みの向こうでは、今日も今日とて揉め事が繰り広げられている。
「わたくし、冬惺さまのことを想って昨晩守り袋をお作りしましたの。これを持っていてくだされば、わたくしの想いが冬惺さまを悪い女や災いからお守りしますわ」
「明花さま。せっかくですけど冬惺は、この私が昔さしあげた守り袋を持っていますから！」
「まあ、あのみすぼらしい守り袋は綺理さまの手作りでしたの？　お可哀想に。教育係に恵まれなかったのですね。お裁縫に優れた教育係さえついておられれば、器用な綺理さまのことですもの。あんな形も柄も縫い目も滅茶苦茶な守り袋にはならなかったでしょうに」
「あ、あの形にも柄にも縫い目にも深遠な意味が――」
「深遠な意味？　本当に真心をこめて縫われていたら、あんな呪いの道具のような代物にはなりませんわよ。ね、冬惺さま。わたくしの守り袋、受け取ってくださるでしょ？」
（断りなよ、冬惺！　綺理の守り袋をけなした奴の贈り物なんか！）
同じ守り袋を懐に持っている翔波は、茂みの陰で反射的に青筋を立てた。二人の少女をなだめようと苦心している冬惺を見ながら、隣で千紗がふくれっ面をする。

「私、明花さまのことは綺理さまと同じくらい嫌いだったけど、今は綺理さまよりも嫌い。だって明花さま、あの占いをした日の後から感じが変わったもの」

「……あの日が境かどうかは私にはわかりかねますが、確かに綺理に対して強気で攻撃的になったという印象はありますね。まあ、綺理にもまったく棘がないとは言いませんが」

公平を期して言うと、千紗が翔波の腕を引いた。翔波をしゃがませて耳元に口を寄せる。

「大人の女の人って、陰でひそひそ悪口ばっかり言ってるのよ。綺理さまの侍女は明花さまのことを『頭が弱くて浮ついた占いかぶれ』とか『可愛い顔して腹黒い泥棒猫』って言ってるし、明花さまの侍女は綺理さまのことを『婚約者を自称してつきまとう鼻持ちならない雌狐』『怪しい術で冬惺さまをたぶらかしている性悪毒使い』って噂してるの」

（……怖……っ！）

翔波は本気で震えた。冬惺の毒舌には耐性があるが、陰湿な陰口には底冷えがする。

「――っと、それを私に教えてくださるということは、閣下への間接的な告げ口ですか？」

「そうよ。みーんな叔父さまに嫌われちゃえばいいんだから！」

「……千紗さまもたいがい策士ですね。それに、侍女たちの噂話をどうやってそんなに仕入れたんです？」

従者の身では王女殿下に対し馴れ馴れしい態度だが、一緒にのぞき見をしているという妙な連帯感が手伝って、翔波は問うた。千紗がえっへんと胸を張る。

「親切な扉の隙間と、親切な垣根の穴が教えてくれたの」
王女は盗み聞きの達人らしい。しかも今の言い回しは、冬惺が小さい頃に使っていたものだ。
（千紗さまになにを教えているんだよ、冬惺……。侍女のまき方を教えたのも君か？）
さらに千紗は、翔波が頭を抱えている間にどこかへ行ってしまった。
すぐ戻ってきたかと思えば、一匹の黒い猿を抱えている。千紗の母王妃が飼っている、異様に手癖の悪い猿だ。……また、激しく嫌な予感がした。
「あの、千紗さま。その猿はなんでしょうか。というより、その猿の用途は」
焦って問いかけた翔波を無視し、千紗は茂みの向こうを睨む。
「ふんだ。綺理さまも明花さまも、冬惺叔父さまから離れればいいんだわ！」
そして千紗は、翔波が止める間もなく猿を露台に放りこみ――、
「きゃああっ、猿がわたくしの作った守り袋を――！」
「待ちなさい、引ったくり猿！　私の作った守り袋を引き裂いちゃ駄目――！」
「こら、千紗！　いたずらが過ぎるぞ！……くそ、このはた迷惑猿が！」
王宮の一角で、今日も大混乱が起きたのだった。



綺理と明花が冬惺の気を引こうと張り合い、そこに千紗が乱入して双方の邪魔をする――。

そんな展開がお決まりと化した冬惺争奪戦は、いろいろな意味で王宮中の注目の的だった。

玉造家派の北部貴族たちは、「なぜ冬惺公は琅の公女をきっぱり拒絶しないのだ」と気をもみ、綺理を応援している。

一方、反玉造家派であり伝統的に北部と仲の悪い南部貴族たちは、「玉造の影珀の意のままになる時代は終わった。北部派寄りと言われていた冬惺公も、陛下の命とあらば玉造の姫を捨て置いて公女と結婚するのでは？」と吹聴し、明花を応援している。

そうした派閥争いに関係なく、出生の疑わしい冬惺を日頃から疎んじている上級貴族の面々は、冬惺が二人の少女の間で四苦八苦しているのを見て溜飲を下げている。

さらに関係のない者たちは、単なる野次馬として女の戦いを見物していたのだった。

（本当にもう……なにやってるんだろ私）

朝から鼻息を荒くした侍女たちに着飾らせられ、明花の悪口を聞きながら王宮へ行く。

着けば明花が冬惺に近づいているのを見てむかむかし、一刻も早く引き離そうと割って入る。

逆に明花に邪魔をされると頭に血が上り、煮え切らない態度の冬惺にも苛立つ。

夜宴が終わって玉造邸に帰れば、影珀に「なぜまだ冬惺を落とせんのだ」と怒鳴られる。

そんなことが四日も続いた、あくる日のことだ。
午後の予定がぽっかりと空いた綺理は、自室にこもって悶々としていた。
侍女たちは綺理がしょげていると、元気付けるつもりで明花の悪口大会を始めてしまうので、全員下がらせてある。静かな部屋で、綺理はため息をついた。
（私ってこんなに嫉妬深くて嫌な子だったんだ……。でももし冬惺が、このまま明花さまと結婚してもいいって思っちゃったら絶対に嫌だし。明花さまを追い払わないと不安になるし。……これじゃ駄目！　誰かに相談して気持ちを整理しないと、考えがどろどろしてくる！）
綺理は寝転んでいた寝台から降り、すっくと立ち上がった。
が、肝心の相談相手がいない。翔波は王宮だし、彼は立場上綺理に話せないこともあるから、冬惺と綺理の板ばさみになりかねない。真羅は派閥争いのしがらみはないが、いつ現れるかわからないし、冬惺との関係に《契約》も影響を与えていることを話すのは気が引ける。
（私たち、秘密がたくさんあるもんね。隠し事なしで相談できる相手なんて……あ）
一人、いた。
宮廷の利害関係にまったく縁がなく、《契約》のことを既に知っていて隠し事をする必要がなく、しかも綺理が呼べばすぐに来てくれる相手が。
――たぶん、このときの綺理は頭の中が煮詰まりすぎて判断力が鈍っていたのだろう。
綺理は思いついた勢いのまま行動した。西日の当たる離れの裏庭に移動し、念入りに人払い

をすると、右手を太陽に向かって伸ばす。
「帰命したてまつる――」
乾ノ神と湿ノ神が地上を創りし時から、幾星霜――。
果たして、恋愛相談のために乾ノ神衆を招請した正一位乾術師がいただろうか。
「あの……本当にすみません。こんなことでお呼びたてして……」
綺理は離れの部屋の縁側で、真っ赤になって火雷明王に頭を下げた。
火雷明王は前回約束したとおり、派手な雷鳴や雷光を伴わず翼も消した状態で降臨してくれた。その場に紅と金の火柱が立ったと思ったら、一瞬で鎧をまとった武神の姿になったのだ。
「おぬしの声に危急の響きがなかったゆえ、火急の用向きでないとはわかっていたが……いや、謝罪には及ばぬ。力になれるかはわからぬが、その相談事とやらを承ろう」
火雷明王の眉間にはしわが寄っていたが、彼はそれが地顔なのだろう。口調は決して迷惑がっていなかったので、綺理は彼の言葉に甘えて相談することにした。
人目につかない縁側の長椅子に並んで座り、堰を切ったように話しだす。
自分と冬惺の関係、縁談の裏にある政治的事情、冬惺をめぐって明花と争っていること、嫉妬と不安でどんどん醜い気持ちになっていくこと――。
「――今まで私、冬惺をほかの女の人に取られるなんて思ってなかったんです。《契約》があ

るし、千紗姫は恋敵のようなものとはいっても冬惺の姪ですから。冬惺が甘やかすのもわかるし、千紗姫になら意地悪されても怒りは続かないんです。……でも明花さまは違う」

思い出してまたむかむかしていると、じっと聞いていた火雷明王が口を開いた。

「私は恋情といったものがよくわからぬのでな、見えたままにしか言えぬ。私が見た限りでは、あの金蘭の末裔の冬の少年は、姫のことを大切に考えて守ろうとしていた」

「でもそれは、冬惺が私を女の子として大事ということでは――」

「姫も冬の少年を大事に思い、守ろうとしていた。……が、今の姫からはそれが感じられぬ」

淡々と続けられた言葉に、綺理ははっとした。

「今のおぬしは己の感情と恋敵のことばかり思い悩み、冬の少年のためを思う気持ちを忘れているように見受けられる。少なくとも、私が好ましいと思った姫ではない」

火雷明王の横顔をまじまじと見る。

「――そのとおりです」

胸の中でもつれていた糸が、すっとほどけたような気分だった。――明花より優位に立ちたいとか、冬惺のどっちつかずの態度が気に入らないとか。自分の気持ちばかり考えて苛々していたから冬惺の立場を気遣わずに彼を困らせ、そんな自分に嫌気がさしていたのだ。

（どうすれば冬惺のためになるか、それを考えればよかったんだ）

「そうだったんです。火雷明王、教えてくださってありがとうございます！」

綺理がすっきりした笑顔で礼を言うと、火雷明王は面食らったようにまばたきした。
「……うむ。……ある者の受け売りなのだが、嫉妬の炎というのは想いの深さの証で、決して悪ではない。ただそれを悪意で煽り、触れる者や我が身を焼き焦がすほどの劫火に育てることが良くないのだ。小さな焚き火ならば身があたたまるが、猛火になれば大火事を呼ぼう」
「――はい。心得ます」
綺理は侍女たちの悪口大会を止めようとしなかった自分を反省し、神妙にうなずいた。
火雷明王が居心地悪そうに身じろぎする。
「……その、だな。我が姫のそうした素直な気性は、好ましいと思う。……決して詮索するわけではないが、おぬしはあの冬の少年のどこを好いておるのだ？」
まさか乾ノ神衆がそんな個人的なことに関心を示すとは思わず、綺理は目を瞠った。火雷明王の目には冬惺が、人に好かれるとは思えないほど根性悪な人間に見えていたのだろうか。
「冬惺はちょっとひねくれているだけで、根は優しいんです。翔波のいい主人をしているところも、いいなって思いますし。それに私のお母さまが亡くなったとき泣いている私に一晩中ついて頭をなでていてくれたり、紅楓方の兵士に追われて山の中をさまよったときも――」
勢い込んで語っていると、いつの間にか昔話になっていた。
出会った頃は無愛想だった冬惺が、綺理が何度も遊びに誘ううちに笑顔を見せてくれるようになったこと。それが嬉しくて嬉しくて、祖母に冬惺と遊ぶことを禁止されてもこっそり会い

に行ったこと。「明日また遊ぼうね」と言っても絶対に返事をしてくれなかったから、毎日会いに行くたびに、今日も私と遊んでくれるかなとどきどきしていたこと。でも冬惺がいつも優しい顔で迎えてくれたので、ほっとしたこと。そんな冬惺がある日「明日一緒に遊ぼう」と言ってくれて、大喜びで彼と指きりげんまんをしたこと――。

冬惺が翔波を従者にし、最初はおどおどしていた翔波に二人で木登りのしかたを教えた話までいったところで、綺理は我に返った。空を見れば太陽がずいぶん傾いている。

「すみません！　変な用事でお呼びした上に、調子に乗って長話につきあわせてしまって」

甘えすぎだ自分、と反省して謝ると、火雷明王はすぐに否定した。

「いや、謝ることはない。むしろ私のほうこそ、気の利いた相槌を打てずにすまぬ。こうした他愛のない話を、今まで招請者としたことがなかったのでな」

それはそうだろう。綺理はますます、すみませんと言いたくなった。

「私の最初の招請者はたいそう破天荒で、頻繁に淵妖と戦っては私を呼んで顎で使っていたが、自分自身のことを語ってくれることはなかった。乾ノ神衆の助けが必要な緊急事態にしか私を呼ばなかったから、話す暇もなかったのだ。……先ほど『ある者の受け売り』といったのはその人のことだが、あの話をしたのが唯一の雑談だった」

続けて語りだした火雷明王に、綺理は目をぱちくりさせた。こんなに話す人だったのかと驚く一方、「その人」という呼び方になにか慕わしげなものを感じて小首を傾げる。

「その最初の招請者さまのこと、お好きだったんですか？」
「わからぬ。強くて気高い人だとは思っていたが、なにもわからぬまま彼女が私を呼ぶことはなくなってしまった。――だから、今度はわかりたいと思うのだ」
火雷明王は前を向いたまま「綺理」と名を呼んだ。
「おぬしが相談相手として私を思い出してくれたこと、嬉しく思う。私は人の心の機微にはどうにも疎いのだが、愚痴の聞き役にはなれる。他愛のない昔話も我が姫のことを知れて快い。……つまり、だな。私の助けがいるときしか私を招請してはならないと思う必要はないのだ」
（そっか。前に火雷明王が帰り際に言いかけていたのって、これだったんだ）
綺理は頬が自然にゆるむのを感じ、「はい！」と元気よく答えた。
火雷明王が微笑む。その眉間のしわがふっと消えるのを見て、こんな穏やかな顔の火雷明王と会えば冬惺も彼を嫌う気になれなくなるんじゃないかな、と綺理は胸があたたかくなった。
「そろそろ刻限が近い。今日は帰るとしよう」
太陽の出ている間しか地上にいられない火雷明王は、西の空を見て立ち上がった。それからためらうようなそぶりを見せ、視線をあさっての方向にやったまま言う。
「……その、あれから泥人形はどうしている？」
「え？　真羅ですか？――て、あああのっ、真羅は可愛い子狐ですから！　じゃなくて、いい大淵妖ですから！　私たちも彼と仲良くやってますし、心配することはなにも――」

綺理が火雷明王と真羅の不和を思い出して慌てると、「そうではない」とさえぎられた。
「そうではないのだ。……ただ、蘇生したあときちんと回復したのか気がかりでな」
歯切れ悪く言った彼に、綺理は碧玉の瞳を大きく見開いた。――それは、つまり。
「……大丈夫ですよ。心配しなくても、真羅は元気です。喉が渇いたと言って、時々私の薬を飲みに来ますけど」
「む、そうか。いや、その、気がかりといっても決して心配していたわけではなく」
火雷明王はもごもごと口ごもる。小さすぎて聞き取れないその声に重なって、不意に鈴の音がした。離れの部屋にこもっている者に用があるとき、母屋側から鳴らされる鈴だ。
「いけない、薬師の手袋が今日届くんだった！　あれは私が直接受け取らないと……。すみません火雷明王、私行きますね。今日はいろいろありがとうございました！」
侍女がじかに綺理を呼びに来て、火雷明王の姿を見られるとまずい。綺理は手短に礼を言うと、慌ただしく渡り廊下を駆けていった。
後に残された火雷明王は、綺理の足音が消えるのを待って、おもむろに振り返る。
「――なんの用だ、泥人形」
「なんだ、気づいていたのかね。焼き鳥のくせに感心、感心」
火雷明王の視線の先、部屋の奥の暗がりに、輝く翡翠の瞳の童子がいた。真羅は長櫃の上に悠然と座り、青年姿の乾ノ神衆を上目遣いに見ている。

「愚弄するか。鈴が鳴ったときにおぬしが現れたことくらい、容易にわかる」
「ところが残念。私が来たのは君が最初の招請者の話をしていたときなのだよ、雛鳥」
真羅は、頬を引きつらせた火雷明王ににっこりと笑んだ。
「君がキリと仲良くなろうと不器用に励んでいるあたりから、と言い換えたほうがよいかね？実に微笑ましかったよ。堅物な乾ノ神衆が少女の前でやに下がっている図というのは」
「やに下がってなどおらぬ！　おぬし、歪んだ眼で私を揶揄するか！」
「おや。するとこれも私の歪んだ耳のなせる業だったのかね？　君が私のことをそれはそれは深ーく心配してくれていたように聞こえて、笑いをこらえるのに必死だったのだが」
「……、……っ！」
火雷明王は憤死寸前の形相になった。真羅を睨み、歯の間から言葉を絞り出す。
「なにゆえ我が姫は、この泥人形にほだされているのか……！」
「さてね。――キリも少年も従者も、どうも地上の妖王である私を信用しすぎているようだ」
微妙な物言いに火雷明王が眉をひそめると、真羅は朗らかに笑った。
「ま、君くらいは私を信じないでいてくれたまえ。金の翅の明王」
どういう意味だ、と問いただそうとした瞬間太陽が隠れ、火雷明王は天上に帰っていった。

自室に戻った綺理が包みを開けると、薬師の紋が甲に丁寧に刺繍された手袋が現れた。
北部で紅楓家の朔秋に捕まったとき、この薬師の証の手袋を取り上げられてしまったので、綺理は薬師の組合に再発行を申請していたのである。
（よかったー。これがないと買えない薬って多いもん。でもこんなに早く再発行してもらえるなんて、もしかして師匠が組合の近くをふらついていて口を利いてくれたとか……あれ？）
綺理はふと、手袋の中になにか入っていることに気づいた。
手紙だ。慌てて開くと、反古紙の裏に走り書きでなにか記されている。
その筆跡はここしばらく会っていない薬師の師匠のもので、字の色は朱――師匠が事件の起きたことを報せるときに使う、朱色をしていた。

同じ頃、冬惺は春怜の私室で絵札遊戯につき合わされていた。
明花が占いに使う占骨札をずっと簡素にしたような絵札が、卓の上に重ねられていく。
「琅の宮廷で流行している遊戯だと明花姫の侍女から教わったのだがな、三人以上でないとできないというので、その侍女がやりたがらんのだ。そんなことより男と女の二人でできる遊戯をいたしませんか、と言って……おい、冬惺。卓の下で私の足を蹴るのはやめないか？」

「客人の侍女をたらしこまないでください、妻子持ちの分際で。……どの侍女ですか？」
冬惺は手札を場に出しながら春伶を睨んだ。春伶は冬惺の足をよけ、にやりと笑う。
「一番美人な侍女だ。誰だと思う？」
「さあ。俺は顔の美醜で女性を見ているわけではないので。翔波、おまえは見当つくか？」
人数合わせのため同席している翔波に話を振ると、彼は眉根を寄せてしばし考えこんだ。
「……奏珠どのですか？」
「いや、黄麗という侍女だ。……あー、確かに奏珠どのも隠れた美人だが、あの娘はどうも口説く気が起きんのだ。顔は好みの系統なんだがなあ」
春伶は不思議そうに首をひねり、片手を振って出せる札がないと示す。
「その黄麗から聞いた話によると、明花姫は相当思い込みが激しい質らしい。他愛のないまじないの儀式でもすぐその気になったり、我らが従妹姫の悪口を吹き込まれればそのまま信じたりとな。――だが、占いの的中率は本当に高いそうだ。私も占ってもらった」
冬惺は遊戯を続けながら、ちらと翔波と目を見交わした。
最近王宮で、明花に占ってもらうことが一種の流行になっていることは知っている。玉造家派の北部貴族でさえ、はずれたらケチをつけてやろうという腹で占いを頼みに行くので、明花のもとには毎日客が引きも切らないほどだと聞く。
だが、この兄王の口から占いを気にするような言葉が出ると、違和感がある。

「なんでも明花姫は、札を見ると暗示的な文章がふっと浮かぶのだそうだ。私がこの王宮について占ってもらったときは『庭に蛙が紛れこみ、赤い手で花を手折る』と出た。蛙手は楓。しかもその手は赤い。――紅楓王家がこの王宮を狙っている、と読めないか？」

「最大限努力すれば。鵜呑みにするんですか、兄上？」

「さてな。ところで私の情報網によると、紅楓方の勢力が今回の明花姫の瑛国訪問に乗じて、なにか策謀をめぐらしているらしい」

そう言って春伶が場に出した札には、いつの間にか報告書の小片が貼り付けられていた。

にわかに緊迫感の増した事態に、冬惺と翔波は顔色を変える。

春伶は二人の驚いた様子に、してやったりとばかりに口の端を上げた。

「心しておけ、冬惺、鏡作の。狩占祭に向けて、紅楓方がなにか仕掛けてくるかもしれんぞ」

「師匠の馬鹿ー！　どうして、どうしてこんな間際になって、頭痛がするほど解読しにくい暗号手紙で報せてくるの？　今から行ってぎりぎりじゃない！」

綺理は自室で忍び歩き用の装束に着替えながら、涙目で窓の外を見やった。空には月が低く昇っている。真夜中だ。師匠からの手紙と格闘していたら、真夜中になってしまったのだ。

今までは綺理が師匠の悪筆を読み解いた後、冬惺と翔波が手伝ってくれたので、さほど時間はかからずに暗号解読できた。しかし一人ではその三倍どころか十倍はかかる。

正確には、一人ではなかったのだが——。

「しかしだな、早く読めたところでキリは夜中にならねば屋敷を抜け出せないのだから、あまり変わらなかったと思うのだが。そもそも君は本当に行く気なのかね？」

人が寝ていると見えるよう寝台に細工をしながら、真羅が言った。綺理が着替え中なので、彼はこちらに背を向けたまま続ける。

「怪しい人物が王都で危険な薬を集めている。それだけわかれば収穫なのでは？　薬師の会合にその人物が現れるかもしれないからといって、わざわざ夜中に出向くこともないと思うが」

「そりゃ私一人だったら心細いけど、真羅がついていれば夜道も安心だもん。淵妖の動きとは関係なくても、今王都でおかしなことが起きているっていうのが気になるの。冬惺と翔波だって、聞けば少しでも詳しく調べようって言うに決まってる」

綺理は剣を腰に下げ、ぐっと拳を握った。

王都に帰って以来薄れていた活力が、みなぎってくる。

たぶん自分は、恋愛のことだけで頭を一杯にしていられる人間ではないのだ。じっとしているのは性に合わない。目的に向かって走っている、という実感が持てないと落ち着かない。

「薬師の会合にも興味あるし……と、そうだ。真羅、行く前にその髪を隠さないとね」

綺理はぽんと手を打った。真羅の三色の髪が目撃されたら、彼が人間でないのがばれる。
（薬師の会合が動物持ち込み禁止じゃなかったら、子狐に化けてもらうんだけど）
変装道具を急いで探していると、真羅が呆れ声を上げた。
「急に生き生きとしてきたな、君は。というか私が護衛に同行することは大前提なのかね」
「え？　だって真羅は、私を一人で行かせるほど薄情じゃないでしょ？」
「……ま、《契約者》に死なれたら地上にいられなくなって、私が困るのでね。もっとも私がいても弟連れにしか見えないだろうが。ときにキリ、それはなんだね？」
「髪染めの薬。金と銀のところだけ黒く染めちゃえば、目立たないかなと思って」
「いや、その手は使えない。大淵妖は大嘘つきだが、髪と瞳の色だけは嘘をつけないのだよ」
大淵妖の髪の色は《契約者》と同じに、瞳の色は《契約》時に受け取った勾玉と同じになるからだと、真羅は自身の翡翠の瞳を指さして説明する。
「そっか。髪粉がすぐ落ちちゃうんじゃ意味ないね。それじゃ……そうだ！」
綺理はちょいちょいと真羅に手招きした。
怪訝な顔で寄ってきた彼の頭に、藍色の布をふわりとかぶせる。
「……？」
「市井の子供の間でね、こんな風に頭に布を巻くのが流行っているの。こうやって後ろで結んで、布の端を髪の房みたいに長く垂らすんだって」

真羅の後ろに回って細長い布の端を結び、金髪と銀髪の房を布の内側に隠す。
できた、と布の上から真羅の頭をなでると、彼は慣れないのかそわそわと布をいじった。
「これでよしっと。じゃ、行くわよ。急がないと！」
綺理は、髪染めの薬で光沢を抑えた自分の金髪にも布を巻き、そっと庭に出た。足音を消して茂みの陰を歩いていると、部屋の内側から閂をかけていた真羅がふっと隣に現れる。
「キリ、忠告を一つ。そちらではなく、あちら側の壁を乗り越えて出ることをおすすめする」
「？　うん。ありがと」
人けのない安全なほうを教えてくれたのだろう。綺理は単純にそう信じこんで、真羅の指さしたほうへ向かった。
築地塀に剣を立てかけ、鍔を足がかりにして身軽に塀に上る。剣は塀の下に残るが、柄に巻きつけていた組み紐の一端を手首に絡めているので、上から引っ張り上げればいい。
（この蓬の組み紐、冬惺がくれたんだよね）
濃淡の萌黄の糸で作られた組み紐を手に、綺理は胸がぽっとあたたかくなるのを感じた。
そして回収した剣をすばやく腰に下げ、塀から飛び降りようとしたときだった。
「おい、そこの！」
誰もいないと安心しきっていたところに鋭く声をかけられ、綺理は仰天した。まずいと思ったときには体の均衡を崩し、ぐらりと塀の外に落ちる。

地面に背中を打ち付ける間際、後ろから誰かの腕に抱きとめられた。
男の腕だ。嗅いだことのない香の匂いがふわりと鼻腔をかすめ、綺理は身を硬くする。
「だ――」
誰、と身構えて振り返ろうとした。が、それよりも背後の男のほうが速い。
「んっ……」
片手で口をふさがれ、もう片方の手でいとも簡単に動きを封じられる。男に後ろから抱きすくめられた恰好のまま路地に連れ込まれ、綺理は恐慌状態になった。
（なんで？　どうして真羅がいないの？　真羅が助けてくれるはずじゃ……）
塀を上るまでそばにいたはずの真羅がどこにもいない。護衛役を引き受けてくれたと思っていたのに。いやそもそも、この場所から出ろとすすめたのは真羅なのに！　なんて薄情な！
綺理は男の腕を振りほどこうともがいたが、絶対的な腕力差の前にはなすすべもない。
（やだ、やだやだ怖い。助けて！――冬惺！）
胸中でその名を叫んだとき、耳朶に吐息が触れた。
「――暴れるな、綺理。俺だ」
冬惺の声だった。
綺理はぴたりと動きを止める。――そして自分を抱きすくめている男が冬惺だと認識した瞬間、冷えた体が燃えるように熱くなった。

（え……えええええ!?）

暗がりで冬惺と密着しているという状況に頭が大混乱に陥り、心臓がひっくり返る。だって冬惺だ。綺理の唇に触れているこの手のひらも、綺理を抱きしめている力強い腕も、背中に感じる体温も、耳元でささやかれるこの声も――！

「手を放すが、大声を出すなよ。人が来るとまずい」

そう言われて解放された途端、綺理は腰が砕けてその場に座り込んでしまった。

「悪い、口を長くふさぎすぎたか？　だがおまえも早く俺だと気づけ。鈍すぎるにもほどがある。俺は綺理が塀から落ちかけた時点でおまえだとわかったぞ」

見上げれば、冬惺が呆れ顔で手をさしのべている。確かに、いくら驚いたからとはいえ、最初に声をかけられた時点で好きな人の声だと気づかなかったのは綺理の不覚だ。

「で、でも、香がいつもと違ったし……冬惺がここにいるなんて思わなかったし……」

「間抜け。隠密行動中は香も変えることくらい常識だろう」

墨染めの装束に身を包んだ冬惺は、綺理を立たせると玉造邸を顎で示した。

「綺理。おまえこそ、どうしてあの屋敷から出てきたんだ？」

「……？　えっと、薬師の会合に行こうと思って屋敷を抜け出してきたところなんだけど」

「待て、するとあそこは玉造家の屋敷なのか？」

「うん。……冬惺こそどうしてここに？」



沈黙が落ちた。冬惺が顔を手にうずめ、路地の奥に向かって低い声で問う。

「……答えろ、翔波。なぜ市中の情報屋から王宮へ帰る途中で、玉造邸のそばを通るんだ？」

「最短経路で案内しろとは言われなかったから。君、本当に気づかないまま僕にのこのこついて歩いていたんだね。方向音痴って面白いなあ」

路地奥の暗がりから歩いてきたのは、翔波だった。冬惺と同じ墨染めの装束を着て、銀髪を茶に染め、闇に光る片眼鏡をはずしている。

さらに翔波の後ろから真羅が何食わぬ顔で現れたので、綺理は口をぱくぱくさせた。

「し、真羅。あなたまさか、冬惺たちがいるって知っててあそこから塀を越えろって……」

四人は顔を見合わせ、互いの状況を理解した。

――ひそかに情報収集に出ていた冬惺と翔波は、翔波の計略で玉造邸にやってきた。それに気づいた真羅が、綺理と冬惺が鉢合わせするように謀った、ということらしい。

翔波と真羅が、がしっと握手を交わす。

「真羅。君、たまにはいいことするじゃないか」

「従者。おかげで、少年がキリを力ずくでかどわかすという心躍る一幕が見られたよ」

「……人聞きの悪いことを言うな真羅。翔波、おまえもなにをやっているんだ」

冬惺の言い方が不機嫌に聞こえたので、綺理は不安になって上目遣いに彼を見た。

「えっと……冬惺、私に会いたくなかった？」

「いや、会いたかった。会えて嬉しい」
さらりと返され、綺理は絶句した。本当にこの男は、心臓に悪い。
「それより綺理、薬師の会合に行くとか言っていたな。仮にも婦女子がこんな夜中にふらふら出歩くなど、無防備を通り越して阿呆だぞ。俺たちも同行する。おまえの耳に入れておきたい情報もあるしな」
相変わらず平静な冬惺に言われ、綺理ははっとした。
「そうだ、私、急いでいたんだ。私も冬惺たちに報せないといけないことがあるから、お願い、つき合って。歩きながら話そ！」

月明かりの小路を四人で連れ立って行きながら、冬惺が考えこむように顎に指をかけた。
「――紅楓方が陰謀をめぐらしているかもしれないときに、危険な薬を非合法で入手しようとしている輩が出没している、か。符合しすぎていて逆に引っかかるな」
「えー……ひねくれすぎてない？　普通に考えたら、紅楓方の間者が毒薬を入手して誰かの暗殺を企んでいる、ってところだと思うけど」
綺理は小首を傾げて、冬惺の横顔を仰いだ。
ここしばらく王宮で会っていたときはお互いぴりぴりしていたので、彼と普通に話せているなあと思うと、物騒な内容にもかかわらずちょっと安心してしまう。

「まあ綺理ほど頭を空にして考えればそうなんだが……情報屋の伝手から裏を取ってみたところ、どうも紅楓方暗躍の情報の出所が怪しいらしい。故意に流された情報である可能性がある。情報の真偽はさておき、少なくともこの件にはまだ別の要素が絡んでいる臭いがする」

「別の要素。ふむ。あー君たち、淵妖が王都を狙っている可能性もお忘れなく」

真羅が口を挟み、翔波が彼の隣で腕を組む。

「そりゃ忘れてないけど、時期が重なっているだけで全部の事件を関連付けるのは無茶じゃないかい？　淵妖のことは宮廷の陰謀とはまったく関連性ないだろ」

「しかしだな、狩占祭という夏の祭礼は、輪瑛郊外の御料林で行われるのだろう？　あそこは妖道の真上なのだよ？」

ぴきん、と音を立てて空気が凍った。翔波が恐る恐る確認する。

「……あのさ、御料林といっても広いし、狩占祭で使われる区域はけっこうずれているよ？　この前火雷明王を招請した場所と王都の間の区域には、近寄らないはずだよ？」

「おや？　私は妖道が直線に延びているなどと言ったかね？」

丸々三秒間があって、冬惺と翔波が同時に真羅の頭をはたいた。

「……そういう変化球は先に言え、この存在丸ごと変化球大淵妖が……っ。するとなにか。狩占祭の前後で、淵妖の一件と、紅楓方の陰謀と、悪趣味な縁談と、この怪しい薬の件のすべてが降りかかってくるわけか？　盛りだくさんで楽しい祭になりそうだな」

冬惺は頭痛をこらえるようにこめかみをぐっと押さえた。綺理も、彼が明花との縁談を悪趣味と評していたことにほっとしつつも、にわかに物々しさを増した事態に寒気を覚えた。
（なんか大事になってきちゃった。こうなったらせめて、怪しい薬を欲しがっている人のことだけでも先に解決しないと。……よし、薬は私の領域だもん。私ががんばらなきゃ！）



たどりついた先は、都外れの荒れ屋敷だった。
築地塀の崩れた場所から、雑草が子供の背丈まで伸びた荒れ放題の庭に足を踏み入れる。
「あのさ、綺理。薬師の会合って本当にこんなところで開かれているのかい？」
いかにも幽霊屋敷といった風情のあばら屋を見やって、翔波が不審げに言った。
「うん。ちょっと危ない薬の売り買いもやるときは、興味本位の一般人とか悪いこと考えている人が紛れ込まないようにひっそりと開くの。日時と場所も、限られた薬師にだけ伝わるようにして。あ、でも合法だよ？　毒薬を扱う資格のある薬師同士の集まりだもん」
答えながら、綺理は自分の荷物をごそごそと探る。
「入る前に覆面してね。私は薬師だから白だけど、みんなは黒と紺と深緑のどれがいい？」
綺理は頭にかぶっていた布を巻きなおし、隅に刺繍がされた白い面布で顔の下半分を覆った。

装束の上から前掛け布をつけて、薬師の手袋をはめる。
一方、覆面を渡された男たちは、なんともいえない表情になっていた。
「おい、合法の集まりが覆面集会なのか？」
「そうよ。万が一に備えて防毒面をするのが普通なの。それと、こういうときは暗号名を名乗る人も多いかな。ちなみに私は『桐』ね。身分がばれると面倒だもん」
「……そうなんだ。僕はもう、どこから突っこめばいいかわからないよ……」
翔波が遠い目をして紺の覆面をつけ、冬惺ももはや何も言わずに黒の覆面を手に取る。
真羅だけは覆面を丁重に断り、草の生えたあばら屋の屋根を指さした。
「私は外で待っているとしよう。少年と従者がいれば護衛は十分だろうし、どうやら子供が交ざっていては不自然な場のようなのでね」
彼が音もなく姿を消したので、綺理たちは三人だけであばら屋に入っていった。
入り口の二重の暗幕を抜けると、受付と思しき小部屋に出る。綺理は昔師匠から聞いた作法を思い出し、受付台にいる不気味な仮面の人物の前に立った。
「こんばんは、悠蓮衆の『桐』です。後ろの二人は護衛。三人分の受付証をお願いします」
白覆面に刺繍された蓮と桐の紋、薬師の手袋を見せると、受付の人物が歓声を上げた。
「おお、悠蓮老師のお弟子さんですか！　いやはや、受付時刻に間に合われてよかった。もう少し遅くいらしていたら、悠蓮衆の方に門前払いを食らわせるところでした」

こちらが今夜の受付証です、と乾燥した紫の花の小束を三つ渡される。綺理たち三人は花の束を装束の飾り紐に結びつけ、奥へと進んだ。

帳をくぐると、会場の広間は明るくにぎわっていた。

室内は覆面をつけた老若男女で一杯で、怪しい酒場のような体をなしている。

入り口付近にいた者たちが最後に来た綺理たちを見て「あの紋は悠蓮衆の……」「あの御仁も悠蓮衆じゃ」とさざめくのを聞き、翔波が耳打ちしてきた。

「悠蓮老師って君のお師匠だよね。あの人、薬師の間では有名なのかい？」

「そうみたい。噂では、何十年も前から薬師組合を陰で牛耳っているとかいないとか……」

「いやいや待ってよ。あの人、六年前の時点でまだ二十代半ばだっただろ？」

「今会っても二十代半ばに見えると思う。師匠いわく、『薬師に年齢はない』んだって」

翔波は黙った。入れ替わりに、室内の様子を抜け目なくうかがっていた冬惺が口を開く。

「白覆面に蓮と花の紋が悠蓮の弟子ということか？……女ばかりのようだが」

「うん。師匠は女の子をはべらすのが好きだから、男性の弟子は取らないみたい。でも師匠って放浪癖持ちでいつも放浪先で弟子を取るから、悠蓮衆同士でも面識ないのよね」

「……綺理。今、あらぬ表現を聞いた気がするんだが、悠蓮はあれでも一応女だろう？」

「だから師匠は、男装して女の子にきゃーきゃー言われるのが好きなの。師匠いわく、『薬師の変装に性別はない』らしいから。あ、だけど趣味は普通だよ？　師匠、恋人にするなら可愛

い男の子に限るって言ってたもん。可愛い男の子に女装させて遊びたいんだって」

「それは、絶対に普通とは言わん……っ」

冬惺もうめいて黙り込んだので、綺理は卓の間を歩きながらあたりを見回した。紅楓方の間者かもしれない怪しい人物がいないか捜す。

中央の大きな卓では、珍しい薬種や新薬の製法が競りにかけられている。

その隣の卓では薬種問屋の店が開かれ、さらに隣ではある成分の抽出法に関する議論が白熱している。いくつもの卓に薬師が四、五人ずつ集まり、話に花を咲かせているようだ。

「絶対に旅立草の煎じ薬ですよ。彼の側室が暗殺された時代と、季節と、場所柄を考えてください。手軽に入手できて、原始的な製法で作れる毒といったら――」

「あの毒は苦味が強いと聞くから、致死量を盛るのは難しい。むしろ――」

「見よ、この暗殺吹き矢を！　文献を元に完全再現したぞ。これさえあれば熊退治も――」

「おぬし、その毒をわしの鳥兜と交換しとくれ！　これで毒薬蒐集数、二百種突破じゃ！」

（しまった、怪しくない人がいない！　全員覆面しているから正体もわからないし！）

綺理は今さらその事実に気づいた。

（あ、あっちの卓で議論しているのって、瑛国史七大謎の一つの連続毒殺事件の真相じゃない。うう、交ざりたいなあ。あれって最初に使われたのは君影草の毒だと思うのよね）

あちこちから聞こえてくる魅力的な話題の数々に、気を取られそうになる。

そのとき、ある声が耳に飛び込んできた。
「この輪瑛で、やばい薬を闇で手に入れたがっている奴？　そんなもん、いくらでもいるだろうがよ。はん、悠蓮衆はそんなもんを調べてんのか？」
はっと広間の反対側の卓を振り返る。そこには二人の薬師がいた。
片方は女性で、白覆面の下部に蓮と椿が刺繍されている。もう片方――さっき嘲るような口調で言ったほうは男性で、白覆面には黒いねずみの紋が入っていた。
「ごく最近、初めて毒の密売に関わってきた人間、に限定して知りたいのです。闇取引の情報も、『黒ねずみ』、あなたのところになら回ってきていると聞きます」
「まあ噂くらいなら山ほどな。けどよぉ、俺はそちらさんの師匠が大っ嫌いでね。悠蓮衆だって薬師の商売敵だ。金を積まれたって情報を売りたかねえんだよ、『椿』の嬢さん」
柄の悪い仕草で手を振る男を、綺理は碧玉の瞳で見すえる。
（あの人が情報を持ってる……）
師を同じくする女薬師に加勢して、談判しよう。そう決意して足を踏み出したとき、そばの壁に寄りかかっていた冬惺から「やめておけ」と小声で止められた。
「あの薬師兼情報屋、おまえごときとは格が違う。小悪党じみた口調や態度は演技だ。相手を油断させるためと、表の自分と裏の情報屋としての自分を結びつけられないためのな」
「だけど、せっかく手がかりがつかめそうなのに……」

「急くな。あの情報屋は自分の握っている情報が、悠蓮衆以外に買い手のつかないものだとわかっている。その上で手札を最大限高くさばこうとしているんだ。まあ見ていろ」

そう言う冬惺は、気のないそぶりで会場を眺めている。

綺理が彼に従って卓の様子を傍観していると、確かに情報屋の男は一方的に交渉を打ち切ろうとはしていなかった。彼は悠蓮衆の女薬師が食い下がるのを待ってから、切り出す。

「そんなに言うなら仕方ねえ。俺と勝負して買ったら情報をやるよ。嬢さんが欲しがってる情報は三つ。三本勝負で、勝てた数だけ教えてやろう。ただでな」

やけに譲歩した、と綺理がまたたいた矢先、男は覆面の下で品悪く笑った。

「けけけ、ちぃとばかり危険な勝負だから受ける度胸はねえだろうがよ。一つ、毒針の仕掛けられた細工箱を開ける。二つ、やっぱり毒針の仕掛けられた細工箱を開ける。三つ、またまたやっぱり毒針の仕掛けられた像を分解する！　どれも毒にやられるかもしんねえが、運良く即死しなけりゃお仲間の薬師が助けてくれるぜぇ？」

（そんなの、もうほとんど薬師の領域じゃないでしょ！）

とんでもない勝負内容に、綺理は血の気が引いた。

（この人、勝負と称して自分の請け負った仕事を他人にやらせようとしているんだ。勝負に負ければ、情報と引き換えに仕事が片付くから。でも、どうしよう……）

毒薬の正体当ての類であれば負けない自信はあったが、これは綺理の専門分野からはずれて

いる。『椿』という姉弟子も同様なのか、覆面越しにも青ざめているのがわかった。
（こんな危ない勝負、勝算なしに挑むのは無謀だよね。だけど、せっかくの情報が……！）
じっとりと汗ばんだ手を握った、そのときだった。
綺理の隣で、手袋をはめていない手がすっと挙げられる。
「――その勝負、僕が受けてもいいかい？」
翔波が、薄く笑みを浮かべて言った。

会場がざわつき、卓の周りに人が集まってくる。
情報屋『黒ねずみ』と差し向かいに座った翔波に、綺理は椅子の後ろからささやいた。
「どうしてもやるの？　下手したら死んじゃうかもしれないのよ？　ね、考え直して。情報なんかよりあなたのほうがずっと大事なんだから。……ほら、あなたも止めてってば！」
小声で呼んだのに、冬惺は壁際から動こうとしない。
彼は腕を組んだまま、自分の従者の目をまっすぐに見た。
「勝つ自信はあるのか？」
「あります」
「――ならば勝て」
たったそれだけの、短いやり取り。翔波は一つうなずくと、情報屋の男に向き直った。

「僕は、悠蓮衆『桐』の護衛その二だ。さて、『黒ねずみ』どの。勝負を始めようか。……あ、手袋はいらない。指先の勘が鈍るし、たぶん手袋も突き通す毒針だろうからさ」

片眼鏡を右目にかけながら、翔波は余裕たっぷりに笑む。

「大丈夫だよ、綺理。美術品の類は僕の専門分野だ。この細工箱の仕掛けも知ってる」

彼は、卓上に置かれた小箱を気楽な手つきで持ち上げた。

細かい彫刻と象嵌が施され、隅に金属の板が留めつけられた飾り箱だ。翔波はじっと観察すると、懐から針金や小さな工具を取り出し、箱の装飾部をいじくる。

「危ないから毒針の仕掛けははずしておくよ。はい、開いた」

奇術のようにあっけなく箱が開き、見物人たちが沸いた。綺理はほっと胸をなでおろす。

男は箱に納められていた包みを「万歳！」と取り出してから、こほんと咳払いした。

「三本勝負だからな、情報は全部に決着がついてからだ。次はこれだ」

二番目に出されたのは、最初の物より何倍も大きな細工箱だ。

こちらは少し時間がかかったが、やはり翔波は仕掛けを見抜くなりあっさりと開ける。毒針の罠が解除され、中身が出せるようになった箱を、男は嬉しそうにしまった。

だが三番目の勝負になると、男は心なしか緊張した様子になった。助手に合図して大きな箱を持ってこさせ、布で包まれた像を出して卓に載せる。

「――最後はこれだ。『桐の盾』の坊主」

さっと布を取り払う。それは一抱えもある寄木造の神衆像だった。
宝剣を持ち、背に翼を備えた勇ましい武神、大天火雷金翅明王の像である。
「僕らってこの像に縁があるのかな？……うわ、これってあの有名な仕込み像師、四代慶鳥の作品じゃないか！　晩年の作かな。すごいや、手付かずの真作がまだあったんだ！」
翔波は興奮で目をきらきらと輝かせ、工具を使って早速検分しはじめる。
彼とは対照的に、見物人の間からは悲鳴じみた声が上がった。
「ありゃあ七人殺しじゃ！　あの坊主、危ないぞ」
「七人殺し？　なんですか、それ？」
綺理が後ろにいた薬師に聞くと、毒殺用暗器の熱狂者だというその老爺は早口で答える。
「四代慶鳥は、自分の師匠を毒針仕込みの像で暗殺して名前を奪った、暗黒の仕込み像師じゃ。その作品は通称『七人殺し』と言うて、像の中身を奪おうとする者を殺すために七本の毒針が巧妙に仕掛けられておる。うかつに分解しようとすれば、恐ろしいことになるぞ」
老爺の語尾に重なって、カシンッという鋭い動作音がした。
ぎくりとして見れば、像の宝剣から太い針が突き出し、翔波の工具の柄に刺さっている。
綺理はぞっとしたが、冬惺が「勝て」と言ったからには、綺理がいくら止めても翔波は聞かないだろう。はらはらと見守る中、翔波は像を慎重に解体していく。
両腕をはずしたとき、それぞれの付け根から針が出て空を切る。足をはずせば鎧のすね当て

の部分から針が伸び、翔波が手のひらに当てていた金属板にぶつかって止まる。
これで五本。翔波は真剣な顔つきで両翼の細工を動かしていく。
内部でカチリと音がして、翼が像からはずれた。直後、翼から勢いよく針が突き出る！
「……これで七本」
両手の指と指の間から出ている針を見て、翔波はほっと息をついた。
「すごいぞ、あの『桐の盾』とかいう若者。七人殺しを破った……！」
人垣から感嘆の声が漏れる。翔波は両翼を脇に置いて、額の汗をぬぐった。
そして彼は、像を解体する最後の鍵である頭部に手をかけ——ふと、その手を止めた。
「——僕の幼なじみの片方がさ、けっこう性格悪いんだよね」
訝しげな顔になった見物人たちの前で、言葉を継ぐ。
「悪賢いっていうのかな。三人組で柿を四個盗んで見つかったら、『一個しか盗んでない』と言い張った挙げ句に『本当は一人一個盗んでいる』とうっかり白状して、三個返すんだよ。で、残りの一個は安全に持ち帰る。そういうのを見ているから、僕も疑り深くなるんだ」
言いながら、翔波は像から手を離した。再び両手に工具を持ち、像の頭部を挟んでゆっくりと持ち上げる。——と。
バシン！　とひと際大きな音がして、像の頭から八本目の毒針がぎらりと突き出した。
一瞬の静寂。

像の胴体がぱっくりと二つに分かれ、内部に隠されていた螺鈿の宝箱が姿を現す。
「おおお、七人殺しが開いたぁあ！」
「なんと！　七人殺しという通称自体が罠だったのか！」
「すごいすごい！　本当に開けちゃった！」
見物人がどっと沸きかえり、綺理は思わず昔のように翔波の首に抱きついた。
翔波は照れくさそうに笑うと、冬惺をちらと見る。
「おまえの美術品趣味が、間者や泥棒に転職しなくても役に立つとはな。――よくやった」
「ありがとうございます、悪賢い幼なじみさま」
二人はにやりと笑みを交わし、宝箱と像の残骸を片づけている情報屋の男に目をやった。男はまとめた荷物を助手に預け、機嫌よく席を立つ。
「すげえじゃねえか、『桐の盾』の旦那。俺の完敗だ！　俺は約束を守る男だからよぉ、どーんと情報を進呈するぜ。どうする？　場所を変えるか？」
翔波は冬惺や綺理と二言三言相談し、広間の隅を指さした。
「――いや、そこでいいよ。悠蓮どののほかのお弟子さんたちも知りたいみたいだしさ」
翔波が目を向けると、見物人の中から悠蓮衆の『椿』、『菊』、『松』、『梅』と名乗る女薬師たちが進み出てきた。綺理たちは大所帯になって隅に移動する。
冬惺が壁にもたれて目を光らせているが、盗み聞きをしようと寄ってくる礼儀知らずはいな

い。聞き手に囲まれた情報屋の男は、ほかの者に漏れ聞こえない絶妙な声量でささやいた。

「さてと、情報は三つだと言ったよな。一つ目はこの前の満月の次の次――四日前だ。その晩、媚薬を極秘裏に買おうとして断られた若い女がいる。西の柳通りの薬屋でのことだ。顔は隠していたが、王宮に出入りしていてもおかしくねえくらい上品な女だったらしい」

媚薬。綺理は「冬惺に媚薬でも盛ってしまえ」と父に言われたことを思い出し、反射的に明花との対立を連想した。……その上品な若い女とは、誰かの侍女だったりしないだろうか。

「二つ目は一昨日の晩、闇市で毒虫を買った男だ。なんでも上等な装束の若い女に使いを頼まれてのことらしい。まだ断言はできねえが、その女ってえのは媚薬の女と同一人物だろう」

毒虫の種類を告げると、男はぐっと緊迫した声になって続けた。

「――三つ目は、これまでのとは明らかに毛色の違う奴だ。そいつが毒や暗器を扱う密売人に接触したのは七日前。歩き方や身のこなしが常人とは思われず、尾行も軽くまき、正体につながるものを一切残さなかった不気味な男だったと聞く」

（師匠が教えてくれたのはその人のことだ！　それが、紅楓方の放った間者……？）

綺理の周りで、姉弟子たちも反応している。悠蓮は、それほど危険な臭いのする男が王都で暗躍しているとの噂をつかんだからこそ、王都にいる弟子たちに報せてきたのだ。

「その男が話しているのを聞いた奴は、声からして三、四十代だろうと言っていたが、ああいう輩の中には声色を自在に変えられる奴もいるってえからな。本当はもっと年上かもしれねえ

し、若いのかもしれねえ。……とにかく情報がねえってえのが情報だ。以上！」
男は両手のひらをぱんと打ち合わせると、一転してにやにやと翔波にすり寄った。
「なあ、『桐の盾』の旦那ぁ。次の会合には来るのか？　あんたいい腕してっからよぉ、またやばい物を開けるときには頼むぜ。な、次は一緒に儲けようじゃねえか」
「『桐』が来るならまた付き添うけど、そういう仕事は主人の許可がなきゃしないよ。それより馴れ馴れしく肩を組まないでくれるかい!?　あと勝手に変な名前で呼ばないでくれ！」
翔波はすげなく手を振り払うと、既に定着してしまったらしい自分の呼び名がそこここでささやかれるのを聞きながら、その場を離れた。

会場を出た三人は、荒れ庭を通り抜けながら覆面や薬師の衣装を解いた。受付証の乾いた花も処分し、比較的一般人の恰好に戻る。
築地塀の外に出るとき綺理は一度振り返ったが、真羅がどこにいるのかはよくわからない。人けのない小路を玉造邸に向かって歩きながら、冬惺がなにげなく言った。
「翔波。最後にあの情報屋が肩を組んできたとき、なにを渡されたんだ？」
綺理が驚いて見やると、翔波はどこからともなく一枚の紙片を出して綺理に差し出す。

「例の怪しい男が密売人から入手した物の一覧。ここまで情報を大盤振る舞いしてくれたってことは、あの情報屋、本気で僕と縁故をつないでおきたいみたいだ」

慌てて紙片を開いた綺理は、ずらりと並んだ薬品名と暗器の名に顔をしかめた。

「私好みの毒といえばそうだけど、厄介なのばっかり。神経系に作用するのが多いわ。でもこの人、集めている薬の種類からして、暗殺専門じゃなくて本業は間者だと思う」

「一目でそこまでわかる綺理も相当……だよね。——と、そういえば冬惺。君はずっと会場を見張っていたけど、それらしい人はいたのかい？」

翔波の問いに、冬惺は首を横に振る。

「いなかった、と思いたいな。もしその間者があの場にいたとすれば、そいつは自分が探られていると知っても一切反応を見せないほど潜入慣れした手練だということになる」

しん、とつかの間静まる。綺理は気を取り直して話題を変えた。

「じゃあ媚薬と毒虫の若い女性のほうは？　毒虫のほうはその人の手に渡っちゃったのよね」

「そちらは手口が素人だ。俺のほうで調べさせておくが、馬鹿すぎるほど手がかりを残しているから足がつくのは時間の問題だろう。……正体が明花の侍女ならいいんだがな」

冬惺も綺理と同じ発想をしていたらしい。

「……あれ？　だけど、いい、ってどういうこと？」

「そうだよ冬惺。あの公女の侍女が犯人だったら、毒虫が送られる先は綺理じゃないか！」

「そっか。私、毒虫が手に入るかもしれないんだ！　でもそこまですごい毒のある種類じゃないし、もらってもあんまり嬉しくないかも……」
「落ち着こうよ綺理！　君、あの会合の人たちに思考を毒されているよ！」
翔波につっこまれて、綺理は我に返った。そうだ。普通、毒虫の贈り物はありがたくない。
一方冬惺は、けっこう怖いことを平然と言っていた。
「どうせ、なまじな毒虫で綺理がどうにかなるわけがない。最善は、綺理に毒虫が放たれて大騒ぎになるが被害は出ない場合だ。明花の手の者が犯人だという証拠を押さえて、それを材料に脅せば……」
「と、冬惺。脅せばってなに？　あなたが罪に問われるようなことはしないでよ？」
綺理が恐る恐る冬惺の横顔をうかがうと、彼はこちらに向き直った。
「――綺理。おまえは、俺が明花との縁談を甘んじて受けるとでも思っていたのか？」
（え？）
いきなり話がどう飛んだのか理解できず、綺理は棒立ちになった。
同じく足を止めた冬惺が、琥珀の瞳で綺理をひたと見つめる。
「縁談が自然に流れなくなったのは予定外の事態だと、おまえも知っているだろう。俺が公女側から見合いを断らせる手段を模索していたことくらい、綺理なら察していると思っていた」
（――――）

ここしばらくの自分の懊悩はなんだったのだろう、と綺理はめまいがしそうになった。

確かに綺理も、落ち着いて冷静に考えればそうした結論に達していただろう。

けれど冬惺が、「綺理ならそうやって冷静に考えられるだろう」と楽観していたのは、彼が綺理の気持ちに気づいていないからだ。本音で話し合える機会がずっとなく、片想いの相手の態度があれでは、不安になるなというほうが無理ではないだろうか？

「……だって冬惺、明花さまに気を持たせるような態度ばかり取っていたじゃない」

つい、すねたような言い方になる。冬惺はしばし考えてから額に手を当てた。

「くそ、兄上が面倒くさいことを命じるから……。だがまあ、見合いの情勢がここまでくれば裏で綺理に教えても変わりはないし、命令違反にはならないか……」

彼は独り言を言うと、ため息をついた。

「いいか、綺理。俺は、この見合いに不服だという意思を表に出してはならないと、兄上から命じられているんだ。そうでもなければ、あの嫌味のまったく通じない面倒な勘違い女の相手を俺が我慢しているわけがないだろう」

（……なんだ。それじゃ、私がやきもち焼くことなかったんだ）

拍子抜けしたような、冬惺の立場を考えれば仕方ないと納得したような、でもやっぱりなにか納得いかないものがあるような、妙な気分に綺理は襲われた。

だが少なくとも、冬惺が明花といるときに感じていた苛立ちは払拭されている。そして苛立

ちが消えれば、ここ最近王宮で見るたびに冬惺が疲労した様子だったことに気がついた。
「あの、ごめんね冬惺。私も明花さまと張り合ったりして、たいがい面倒な女だったよね」
「謝るな。おまえも立場上ああいう行動に出ざるをえなかったのはわかっている。……悪いのは俺のほうだ。俺のせいで叔父上からいろいろ言われただろう。すまない」
――冬惺は心から謝ってくれている。それはわかる。わかるのだが。
（私が明花さまに対抗して必死で冬惺の気を引こうとしていたのも、玉造家の立場上そうしていたとしか思ってないんだ……。私ってつくづく恋愛対象に見られてないのね……）
素直に喜べずに複雑な気分でいると、冬惺は「それに」と続けた。
「おまえは面倒な女でもいいんだ。綺理と千紗の面倒ごとなら、つき合いたいと思うから」
（!?）
千紗と同列というのが若干気になるが、それでも「特別な女」の範疇に入っているのは嬉しい。綺理は口元がゆるむのを止められず、頬を染めて顔を伏せた。――直後。
前方から翔波の警告が飛んだ。
「離れて！」
とっさに、綺理と冬惺は互いに飛びすさるようにして離れた。
風を切る音。二人の間の地面に、小形の矢のような物が突き立つ。
（！　どこから……！）

綺理は身構え、それが飛来したほうを仰ぎ見た。
建物の陰の闇から、短い矢が再び冬惺目がけて放たれる。
冬惺はよけなかった。腰の太刀を抜き放ち、刀身で矢を弾き返す。
ほぼ同時に、今まで二人から距離を取っていた翔波が駆け寄ってくる。
「そこか！」
翔波は右手に構えた碁石を、先ほどの矢に勝るとも劣らない鋭さで投げ放った。
使役術で使うために彼が常に持ち歩いている碁石だ。乾ノ術が使えない夜間なので淵妖が飛び出すことはないが、飛んでいった先で碁石の弾かれるかすかな音がした。
「……？　あっさり逃げたな」
何者かの気配が消えたのをいち早く察して、冬惺がつぶやいた。
彼はしばしあたりをうかがってから、太刀を鞘に納めて先ほど放たれた矢のもとへ向かう。
「待って、素手で触っちゃ駄目！　毒が塗られているかも」
綺理は慌てて走り寄ると、手袋をはめ、冬惺と翔波の前で慎重に矢を手に取った。
打矢と呼ばれる、手で投げ放つ短い矢だ。金属製で矢じりと矢柄が一体になっており、光らないように全体が黒く塗られている。殺傷力が低いので毒が塗られている可能性が高い。
「――翔波、さっきの一覧表の中に打矢もあったよね。毒の種類を調べればもっとはっきりすると思うけど……この打矢で冬惺を狙ったのは、例の怪しい男よ」

真夏だというのにひやりとした空気が流れる。彼が冬惺の素性を知った上で襲ってきたのかは不明だが、噂をしていた矢先に当の謎の男が襲ってくるというのは尋常ではない。

綺理はさらにあることに気がつき、硬い声で二人に告げた。

「それにあの人、やっぱり薬師の会合に来ていたみたい。――この矢羽、ほんのかすかだけど、受付証のあの乾いた花の匂いが移ってる」

〈真羅。君が私のことを《調停者》に隠したがっているのはなぜなのかね？〉

頭の中で、自分の声をそのまま低くしたような大人の声が響く。

〈ああ、どうしてそのことがわかるのかって？　君の感情の揺れが伝わってきたからだよ。それさえわかれば察しはつくのだよ。なぜなら君は、どうしようもなく私自身だから〉

頭痛はしない。それは意識に干渉されることを、体が拒絶しなくなっているということ。じわじわと、本体とのつながりが強くなっている証だ。

「……万宵。君もどうしようもなく私だな。自分の底意地の悪さがよくわかる」

真羅はあばら屋の屋根の上で冷え冷えとつぶやいた。先ほど綺理たちが屋敷を去ったのは知っているが、万宵が意識に介入してきている状態で追う気にはなれない。

〈ふむ。そして底意地の悪い私の分身は、順調に私に近づいているようだね。もしも君がひたすらに湿ノ神との約束を果たそうとしていた頃の私なら、このことを《調停者》に明かし、私に心と体を乗っ取られる前に滅ぼしてもらっていただろうから〉

万宵は笑うと、また不吉な言葉を残して分身の意識から去った。

〈真羅、過去の私。君の心は確実に動きはじめているのだよ。現在の私に向かって――〉

五章　その記憶こそ、我が理由

緑したたる美しい庭園を映した池の上を、午後の風が吹きわたる。
その池に臨む風雅な東屋で、綺理は卓にずらりと並んだ大量の菓子や果物、優美な茶器に用意された何種類もの花茶を、呆れ顔で見下ろした。
「……冬惺も意外と甘い物好きですけど、陛下もそうだったんですねー……」
「……本気でそう思っている君も天真爛漫で愛らしいが、ここは君のご機嫌を取ろうと精一杯な男のしがない努力に気づいておくれ。我が麗しの従妹姫」
目の前では、金髪の美貌の従兄が無駄に甘い笑みを浮かべている。
「食べないのかい？　それとも私に食べさせてほしいのかな？　ふふ、甘えん坊だね。君が甘えてくれるのは嬉しいが、私以外の者にもそうやって甘えるのかと想像すると妬けるな」
「いえ、鳥肌が立って動けなかっただけで――って、だから話をそらさないでください！」
綺理は相手の調子に乗せられるものかと、きっと春怜を見返した。
――綺理が春怜と行き合ったのは、歌舞の会がひけて回廊を歩いていたときだった。
冬惺も武官としての執務があることだし、帰って昨夜の打矢に塗られていた毒を調べよう。
そう考えて王宮から下がろうとする途中、久しぶりに春怜と顔を合わせたのである。

『――綺理。君は私になにか言いたいことがありそうな顔をしているね』

挨拶だけして去ろうとした矢先にそう言われ、綺理は反射的に「そんなことは」と嘘をつきかけた。だが春怜の琥珀の瞳が存外に真面目だったので思い直したのだ。

『……はい、あります』

『では二人きりになれる場所に行こうか。久々に従兄妹同士水入らずで話したいことだしね』

そうして侍女の桂鈴と梨英を別室に待たせて来た先が、この東屋なのである。

「ご機嫌斜めだね、綺理。笑っていたほうが可愛いのに。でも私は君の笑顔に値しない男になってしまったのかな。――君は、私の弟の縁談の件で不満を述べにきたのだろう？」

春怜の声音にひやりとするものが混じり、彼の瞳から笑みが消え失せる。

最初から彼の笑顔をうさんくさいと思っていなければ、その落差だけで呑まれていただろう。

綺理は改めて、この従兄がわずか十八歳で瑛国王の座を勝ち得た男なのだと思い出した。

「冬惺の事実上の婚約者という立場を蔑ろにされて、怒っているのだろうね。それでこの私に、冬惺と明花公女の見合いを取り下げるよう嘆願しにきた？」

もしそうだったとしても、春怜は玉造の影珀その人が頭を下げない限り、決して聞き入れはしないだろう。綺理としてもわざわざそれを言いたいわけではない。

「違います。そりゃ、ちょっと前までの私ならそういう風に文句を言ったかもしれませんけど、今怒っているのは別のところにです」

「ほう？　ではなにに対して腹を立てていると？」
「冬惺を政略の道具にしないでください」
単刀直入に言うと、春怜は虚をつかれたように目を瞠った。
「強いて王権に屈服させようとしなくても、玉造家はいずれ白桜王家と一つになります。それでも玉造家の権威に傷をつけたいというのなら、公式の場で私を侮辱でもなんでもしてくれればいいんです。――だから今回のように冬惺をだしに使うのはやめて、春怜お従兄さま」
昔、春怜がまだ王でなかった頃に使っていた呼び名を、綺理は無意識に選んでいた。
春怜は黙って綺理の視線を受け止めていたが、やがて高坏に盛られた菓子に手を伸ばした。将戯と呼ばれる盤上遊戯の駒を模した菓子を、長い指の先につまむ。
「――昔、君がそんな目をして私のもとに来たことがあったな。一度目は、初めて冬惺を私のもとに連れてきたときだ。君は、もし私が冬惺を邪険にしたら許さないという目をしていた」
今度は綺理が目を瞠る番だった。
それは小さい頃、綺理と冬惺が春怜の部屋に将戯盤一式を借りに行ったときのことだ。
冬惺が大将戯に興味を示していたから、「春怜お従兄さまが持っているから借りに行こう」と誘い、気乗りしない様子の彼を強引に引っ張って行ったのだ。
当時十七歳の春怜は、部屋の扉の前に立つ七歳の弟を驚いたように見下ろしていた。
『……冬惺。おまえは将戯の遊び方がわかるのか？』

『四十九目の小将戯は綺理に教えてもらいました。百六十九目の大将戯は書物で見たので、それを頼りにすればなんとか……。……お貸しいただけないなら構いません。お邪魔しました』

早々と踵を返そうとした冬惺を綺理が慌てて止めたとき、春怜は扉を大きく開いた。

『どうせ大将戯の盤は、重くておまえたちには運べない。——中に入れ。私が教えてやる』

「……覚えていらしたんですか？　あのときのこと」

綺理は意外さにまばたきした。綺理自身は、大将戯のやり方が複雑すぎてわからなかったこと、けれど春怜が冬惺ののみこみの早さを褒めていたので我が事のように嬉しかったことが印象に残っているので、よく覚えている。だが春怜もそうだとは思わなかった。

「たぶん君よりもはっきり覚えているよ。私があの弟とまともに会話をしたのは、あれが初めてだったからね。——次に君が私のもとに駆け込んできたのは、その翌々日だったか」

春怜の語りに綺理は小さく顎を引く。そちらも、よく覚えている。

「冬惺が太母上に折檻されていると報せにきたときだ。太母上を止められるのは私しかいないからと、すごい剣幕で私を大広間に連れて行った。……実際あのときは、君が私に助けを求めに来なければ、冬惺が殴り殺されるまで続いていた危険すらあった」

「でも春怜お従兄さまが冬惺を助けてくださって、冬惺に危害を加えることは許さないとみんなの前で断言してくださったから、誰も冬惺に手出しをしなくなった——」

春怜はうなずくと、綺理をまっすぐに見た。
「そうだ。だから冬惺には根源的な部分で私への忠誠が染みついているし、私も私なりにあの弟のことは大事にしている。たとえ君の目にどう映ったとしても、私はあれをただの道具だなどと思ったことはないよ。せめてそのくらいには私を信用してくれないか」
「……はい」
その言葉にきっと嘘はない。この人は綺理の味方ではないかもしれないが、冬惺の味方だという意味では確かに綺理の仲間だ。今はそれさえ確認できればいい。
「――が、それはそれとして」
不意に春怜は、兄の顔から統治者の顔になって声を低めた。
「私は玉造家への強硬姿勢を崩すつもりはないよ。王の権威は絶対であるべきだ。そしてそれを万人に知らしめるには、瑛国一の大貴族にして古き貴族の代表を屈服させるのが早い」
その口調には、綺理を甘やかす色はもうどこにもない。
「綺理、私の従妹姫。今の君は大将戯の遊び方が理解できなかった幼い子供でもなければ、恋愛沙汰にしか注意が向いていない少女でもない。そして玉造の影珀の二の姫である前に、私の末弟の味方であるようだ。……率直に、現状を話そうか」
自縄自縛なのだと、春怜は縁談の状況を自嘲気味に語った。

白桜王家は、玉造家の威光に屈したと見られないようにするため、縁談を断れない。

玉造家の側も、公女が綺理に宣戦布告してしまった以上、見合いを取り下げるよう春怜に懇願するという選択肢がますます遠ざかっている。綺理が女として公女に勝った、ということがはっきりする前にそんな申し入れをすれば、恥の上塗りになるからだ。

では春怜が冬惺の自由にしていいと許可すればすむかといえば、そうでもない。春怜が突然方針を転換したと言っても周囲は信じず、「不忠な王弟が兄王の命に背いたのが先で、それに対し春怜が許可を与えたことにして体裁を取り繕った」と見られるのが落ちである。

「もちろん私も無策でいたわけではない。こちらが公女との縁組みを歓迎していないことを琅の重臣たちにそれとなく伝え、『そちらの体面のためにも女性側から断ったほうが』と根回ししておいたさ。だが公女のたっての願いとなれば、あの大公は縁談を強行するに決まっている」

春怜は茶を口元に運ぶと、ため息をついて湯気を払った。

「私自身、千紗にお願いされればたいていのことは叶えてやりたいと思うからな。気持ちはわからないでもないが……娘に甘いのが影珀叔父のほうなら話は早かったのだがなあ」

同感、と胸中でつぶやきながら、綺理は静かに茶をすする。

綺理が男の子の遊びばかりしようが、剣の稽古をしようが、薬師になろうが父の反対に遭わなかったのは、決して影珀が娘に甘いからではない。影珀にとっての関心事は綺理が冬惺に嫁

ぐことだけで、すべては「未来の夫公認だから」という理由で放任されていたのだ。
身内を政略の道具としか考えていないのは、春怜ではなく影珀だ。綺理がどんなに説得しようが泣きつこうが、それで影珀が意志を変えることはありえない。
春怜は最後にこうしめくくった。
「影珀叔父が折れる。なんとかして琅公国側から断らせる。そのどちらも、明花姫が優位な状況では実現しない。だから綺理。君は冬惺の本音を知っていても、これまで通り冬惺の気を引くそぶりを続けていないとならない。――わかったね？」

「まあ、綺理さまではありませんこと」
どうやら今日は、思わぬところで思わぬ人に出くわす日のようだった。
侍女二人と合流し、庭園を横切っていた綺理は、露台で茶会を開いていた少女たちの一団に行き合ってしまった。明花と、彼女の取り巻きと化した南部貴族の姫たちである。
「わたくしたち、占いの会を開いていたところですの。綺理さまもご一緒にいかが？」
明花がにっこりと笑うと、卓を囲んでいる者たちが「公女殿下はなんとお優しいのでしょう」「あんな方にまでお声をかけるなんて、お心が広いですわ」と小声で明花を褒めそやす。

ついこの前までの綺理ならむっとしていたところだが、一度吹っ切れたら今は冷静に見られる。辞退しても角が立つので、綺理は少しだけ同席することにした。

絵札に各種の籤、恋占草、獣の踝の骨のさいころ、その他綺理の知らない占い道具の数々が並ぶ卓に歩み寄り、空いている椅子にかける。

「わたくし、綺理さまには仲良くしていただきたいと思っておりますの。綺理さまは冬惺さまの大切な従妹君ですから、わたくしにとっても大切な親戚になりますでしょう？」

明花が茶をすすめながら完璧な笑顔で言ってきても、頭に血が上ることはなかった。気色ばんだ桂鈴と梨英を視線でなだめ、うまくぼかした返事でやりすごす。

（……結局のところ、私の恋敵って明花さまじゃないのよね）

冬惺が縁談をはねつけないのも明花に優しくしているのも、すべては春怜の命令だからだ。となると冬惺の心を捕らえている真の強敵は、春怜だということになる。

そう考えれば、綺理も明花も春怜の策略に振り回された同士だ。

少女たちのおしゃべりから意図的に弾き出されても、自分への嫌味が多分に混じった会話を聞かされても、相手がそうしたくなる気持ちはよくわかる。

（嫉妬の炎は想いの深さの証――。明花さまも、冬惺のこと好きなんだもんね……）

綺理が自分を鏡で見るような気分でいると、明花が声を上げた。

「まあ、わたくしったら、お誘いしておきながらまだ綺理さまを占ってさしあげておりません

わよね。前の占いの結果が本当にひどかったので気がかりでしたのよ。――奏珠」
明花が扇子をぱちんと閉じると、奏珠が占骨札の入った小箱を持ってくる。
（ああ……なるほど。また悪い結果が出て私が不安になるのを期待しているのね）
綺理は明花が占うのを落ち着いて見守った。相手が必ず悪い結果を出すとわかっていれば、不安になることもない。案の定、明花はめくった札を見て、赤褐色の瞳を翳らせた。
「これは不吉ですわ、綺理さま。高みより落ちた血濡れの使者が、道の先に待っております。……占いの結果が具体的に出るのは危機が迫っているとき。お気をつけなさいませ」

「お気をつけなさいませ、とはよく言いますね。泥棒猫が善人ぶって――」
占いの会を辞して回廊を歩く途中、梨英は綺理の視線に気づいてはっと口をつぐんだ。
「すみません、姫さま。陰口は慎むようにと注意されたばかりでしたのに」
綺理は、謝罪には及ばないと首を振る。
今朝方侍女たちを集めて、自分が明花の悪口を喜ばないことをはっきり伝えたものの、ここしばらくの間にみんな悪口が口癖のようになっていたのだ。そうさせてしまったのは、悪口を耳元で聞きながらずっと容認していた主人の責任だ。
「ですが姫さま、悪い占いを信じることはありませんのよ。信じれば柳の木も幽霊に見えると

言いますでしょう？　悪い結果を気に病まれれば、なんでも占いの通りに見えますわ」
心配げな桂鈴に、綺理は「大丈夫」と微笑んだ。
「私も信じてないもの。当たらないと思っていれば当たらないでしょ」

しかし占いは当たった。
車宿りに向かう綺理たちの通り道に、血を流して死んでいる鳩が転がっていたのだ。

翌日。王宮の図書殿を訪れた綺理は、書庫の奥で翔波と出会った。
侍女たちは閲覧室に待たせているので、綺理と翔波は二人だけで薄暗い書架の間を歩く。
「それじゃ翔波は、私がここにいるって聞いてわざわざ来てくれたの？」
「うん。僕なら比較的自由に動けるからって、閣下が使いに出してくれたんだ。書物を探すなら手伝うよ。――天空の簪を運ぶ金の鳥、その一羽を地上に散らせ」
翔波が呪文を唱えると、いくつもの白い光球が生まれて書架を照らした。乾ノ術で生み出されたその光は書物を傷めることがなく、二人のあとについてふわふわと宙を舞う。
「ありがと。薬関係だからこのあたりだと思う。……あ、そういえばね」

綺理は翔波に手伝ってもらって書架にはしごをかけながら、昨日の占いの一件を話す。占いが的中した、という段まで話したところで、翔波が綺理の肩をつかんだ。
「死んだ鳩が……って、綺理、それは……！」
「その鳩？　持ち主がわからなかったから、うちの厨係に渡して料理してもらった」
「食べたのか、君は！……じゃなくて、それは嫌がらせというんじゃないのかい？」
脱力した翔波に、綺理は「それが五分五分で」と答えた。
「食べられるくらい新鮮だったってことは、占いの結果を聞いた誰かが急いで鳩を殺したと考えると時間的にぴったりなの。でも鳩の傷を見た厨係が言うには、王宮で飼われている犬かなにかにやられたんだろうって。だから故意か偶然か、五分五分」
もちろん、桂鈴と梨英を始めとする侍女たちは、手の込んだ嫌がらせだと憤慨した。
百歩譲って占いをした明花はなにも知らなかったとしても、彼女の侍女や取り巻きたちが悪い結果に乗じて仕組んだに違いないと。
「証拠もないのに無闇に疑わないのって注意はしたけど、我ながら説得力ないのよね。だって向こうにしたら、私への嫌がらせと明花さまの占いの箔付けが同時にできて一石二鳥だもん。まあ、嫌がらせとしてはあんまり成功してないけど。鳩、おいしかったし」
「――今回は、だろ。どうしてそんな風にのん気に言うんだよ」
肩をつかむ手に力をこめられ、綺理は顔を上げた。翔波の青銅色の瞳には、真剣な光が宿っ

ている。彼を心配させまいとあえて軽く言ったのも見抜かれていたようだ。

綺理は仕方なく、今日王宮に来てからあったことも白状する。

「……実はね、ここに来る前に明花さまに会っちゃったの。ほら、冬惺が軍務で忙しくていないから、また占いの会を開いていたみたいで。それでなりゆきで私も占われたんだけど……」

「今度はどんな凶事が起こるって？」

目つきを険しくした翔波に、綺理は首をすくめる。

「一つはもう起きたわ。『地が裂けて泥の川が足元をさらう』で、泥水が廊下にぶちまけられていたの。裳裾が汚れる前に気づいたから問題なかったけど、ちょっと危なかった」

足跡から、猫かなにかが桶をひっくり返したのだと思えなくもないが、限りなく怪しい。

「もう一つは――」

言いかけたとき、翔波が急に動いた。つかんでいた綺理の両肩を、ぐいと引き寄せる。

（……？）

翔波の胸に倒れかかって綺理がきょとんとした、その一瞬後。

ドサドサッと激しい音を立てて、綺理の背後に大量の巻物が降りそそいだ。

誰かが書架の上に積みっぱなしにしていた巻物の山が、雪崩を起こしたのだ。翔波が引き寄せるのが少しでも遅ければ、大量の巻物の堅い軸が綺理の頭を直撃していた。

「――もう一つは、上からなにか落ちてくる類の凶事かい？」

「……うん。『天が割れて星々のかけらが頭上を襲う』。来るならきっと屋外だと思って油断してた。ありがとう、翔波。……っ」

翔波から離れた綺理は、彼の肩ごしに一つの人影を見つけて顔を強張らせた。

「これは、綺理さまに翔波どのではありませんか」

「――奏珠どの。なぜここに？」

翔波が振り返り、目を剣呑に細めて問う。白い光球の下に立つ黒髪の侍女は、うっすらと笑んで翔波と綺理を交互に見た。

「明花さまのお使いで来ましたら奥で男性と女性の声がしましたので、どなたが密会をなさっているのかと……。まさか綺理さまが、冬惺さまの従者どのと二人きりでいらっしゃるとは思いませんでした。世間の誤解を招く行動は慎まれたほうがよろしいのでは？」

「ご心配なく。私が綺理姫と二人でいたところで、下世話な誤解をする輩はどこにもいませんから。奏珠どのこそ、怪しまれる行動は慎まれたほうがよろしいかと」

翔波が冷ややかに返すと、奏珠は「なんのことでしょう？」と小首を傾げた。

「怪しまれる行動……。たとえば私が、翔波どのと二人きりになりたいとお願いするとか？」

「……奏珠どの？」

「鏡作の翔波どの。私はあなたと二人でお話ししたいことがあるのです。よろしいですか？」

どういう意味だろう、と綺理は二人を見比べる。奏珠はじっと翔波を見つめているが、その

視線に艶めいた意味がないのは明らかだ。やがて翔波が息をつく。
「なぜか落ちてきた巻物を片づけて、所用をすませた後でもよろしければ」
奏珠は翔波の当てこすりに心当たりがないのか、あるいはそのふりをしているのか、どちらともつかない表情をしていた。「では外でお待ちしております」と一礼して、去っていく。
「……あの人と会うの？」
とりあえず綺理が隅の空き箱を持ってくると、翔波は巻物をまとめて箱に放りこんでいく。
「意味深長なことを言っていたけど、たぶん公女殿下の使いで冬惺のことを聞きにきたんだと思う。僕もあちらの情報を探りたいから話してみるよ。心配なのは君だけど――」
「占いに出た凶事は両方済んだから、もう大丈夫よ」
綺理は目当ての書物を書架からまとめて引き抜くと、ふと思い出して懐を探った。
いびつな形の守り袋を二つ取り出し、翔波に差し出す。
「新しい守り袋を作ったから、一つ冬惺に渡してくれない？　中身は二つとも同じだから」
「わかった、ありがとう。……なんか妙に堅い守り袋だね」
翔波は守り袋を懐にしまうと、こちらもまた思い出したように続ける。
「――そういえばさ、僕の部屋に置いてある酒の瓶が、なんでかしょっちゅう目減りしているんだよね。ひょうたん水筒も最近見当たらないし、どうしたんだろう」
万一人に聞かれても問題がないようにぼかしてあるが、綺理はすぐにぴんときた。

酒好きでない翔波が自室に酒を常備しているというのは、真羅のために違いない。今の訳は、『真羅が何度か来て酒を補充したようだが、姿を見せないので気になっている』だ。

こちらも遠まわしに『自分も真羅に会っていないから心配』と答える。

翔波は眉をくもらせると、綺理の抱える書物を半分以上手に取って一緒に歩き出した。

「それじゃ見かけたら一言教えて。……それと、占いには気をつけるんだよ」

閲覧室で綺理と別れて外に出ると、回廊で奏珠が待っていた。

立ち話もなんですので、と連れて行かれた先は、千紗が言うところの『逢い引きにちょうどいい茂み』だった。人目につかない茂みの裏手で、奏珠は石に腰かけ、翔波は木にもたれて立つ。

「で、お話とは？　閣下についてのご質問でしたら、先日ご同僚の方々にお答えしましたが」

そっけなく言った翔波を、奏珠は漆黒の瞳でひたと見すえる。

「いいえ、私が興味を持っているのはあなたです。――鏡作公」

「……あの、確かに私は鏡作家の最後の一人ですが、まだ当主というわけではありませんよ。それに鏡作家は、『公』の敬称を用いられるほど上級の家柄でもない」

耳慣れぬ呼称に翔波は律儀に訂正したが、そこに奏珠がさらなる補足を入れる。
「ですが鏡作家は、元は北瑛島の古の大家でしょう。そしてあなたがしかるべき年齢になったら、現在白桜王家の預かりとなっている所領と当主権が返還される約束になっているとか」
「……琅の方が詳しいですね。王宮中で聞きまわったんですか？」
「噂を集めることも侍女の仕事の一つですから。なにか間違いでもありましたか？」
奏珠は平然と言った。その態度に間違いがある気はするが、情報自体にはない。
鏡作家は玉造家と並ぶ瑛国最古の家柄であり、かつては北部を二分する大貴族だった。
とはいえ、とうの昔に没落して家格も中級に落ちているので、大家の末裔と言われても翔波にはぴんと来ない。ましてや翔波は、先代鏡作家当主の直系ではなく、一族が戦で全滅しなければ次期当主の座が回ってくることもなかった身だ。
「それで？　あなたはなにを言いたいんですか、奏珠どの」
「興味があるのです。なぜあなたが冬惺さまの従者の身に甘んじておられるのか。……私は生まれは琅ですが、父が鏡作の里の出だったので、翔波どのは主家筋にあたるのですよ」
翔波は瞠目した。新参者の奏珠が瑛国訪問の一行に加えられたのは、彼女が瑛国人の血を引いているから――と明花のほかの侍女から聞いてはいたが、鏡作の里に縁ある者だったのか。
納得した瞬間、脳裏でちかっとまたたくものがあった。
（……なんだろう。奏珠どのによく似た……だけど絶対に違う人を、どこかで見たことがある



気がする。おかしいな、この僕が思い出せないなんて。よほど場違いなところだったのか？）

答えは出ない。が、翔波は内心の疑問を隠して片眼鏡を押し上げる。

「ああなるほど。紅楓王家に絶対の忠誠を誓っていた鏡作家がなぜ、と？　噂を集めていたなら、私が紅楓の朔秋から白桜の冬惺公閣下に主君を変えた経緯も知っているでしょう？」

「ええ。冬惺さまのはからいがなければ、翔波どのは罪人として処断され、鏡作家も取り潰されていたのだと。――ですが、それほどきつい処遇を受けそうになったのは、そもそも白桜方が我々鏡作を滅ぼそうとしたからではないのですか？」

奏珠の言葉は正しい。

王家が分裂して長く内乱を続けていれば、寝返りは日常茶飯事。どちらの陣営も、貴族を捕虜にした場合、よほどの遺恨がなければ一度は自陣に取り込もうと試みるのが普通だ。

だが翔波が捕虜になったとき、白桜方は最初から翔波を処罰するつもりでいた。当時翔波は七歳。取り込むのはたやすく、一族の罪を負わせるにも幼すぎる年齢だったのに、だ。

そこには、金蘭王朝以前からの古き貴族の大家を滅ぼしておきたい、という意図が見える。

「御一族を皆殺しにされ、御家ごと滅ぼされかけ、それでもかつての敵を主君と仰ぎ――大家の後継でありながら従者の身に甘んじている。それはなぜです？　鏡作の所領と当主権を無事に取り戻すためですか？」

鏡作家の銀髪と青銅色の瞳をなめるように見つめて、奏珠は言った。

あまりに立ち入った質問に、翔波は不快感をあらわにする。
「奏珠どの。あなたの発言は無礼な上に無用心です。あなたが琅の人間でなければ、叛意を疑われてもおかしくない」
「ですから、半分は琅の者であり、半分は鏡作の里の者である私だからこそ問うのです。鏡作家の次期当主として、あなたの里の民にお答えいただけませんか？」
食い下がられ、翔波は胸中でため息をついた。
「――では答えましょうか。私はもともと白桜方に敵意など持っていません。なぜなら冬惺公閣下に救われるまで、私は心を持っていなかったから。私は私の意志で選んだ、ただ一人の主にお仕えしているだけ。里の者には悪いですが、所領にも当主権にも執着はありません」
従者という立場に不満を持ったこともない。鏡作家の次期当主である自分を手駒に持つことで冬惺に箔がつくというのなら、それはむしろ誇らしいと、そう告げる。
「なぜ、そこまで冬惺さまに……」
呆然とした奏珠に、翔波は口元をほころばせた。この「なぜ」に答えるのは悪くない。
「そうですね。理由は数多くありますけど……一つ、小さい頃の話をしましょうか」

「翔波。おまえ、この木に登れるか？」

離宮の裏山に連れて行かれ、一本の木の前でそう問われたのは、冬惺の従者となって五日目のことだった。冬惺と綺理の前で、七歳の翔波は短い銀髪を揺らしてうなずく。

じゃあ天辺まで登れ、と命じられ、裸足になって木のこぶに足をかけた。本当はこんな高い木の天辺なんて難しいと思っていたけれど、登れるかと言われたらやらなくてはならない。

(冬惺さまは僕を試しているんだ。こんなこともできなかったら役立たずと思われてしまう)

監視するような視線が背中に突き刺さり、緊張で体が強張った。汗ばんだ手で幹にしがみつき、必死で登っていく。

急がないとのろまだと怒られやしないか。不安で焦るあまり、足がすべった。

あ、と思ったときには体が宙に投げ出される。

どさり、と翔波は背中から落下した。だが予想に反して衝撃はほとんどこない。

(……? なんだろう。今、落ちたときになにか――)

「早くどけ、この馬鹿従者……っ」

体の下から聞こえてきた不機嫌な声に、翔波はざっと全身の血の気が引いた。冬惺の上から転がるようにして飛びのき、かろうじて上体を起こしたままがくがくと後ずさる。

「あ……も、申し訳、ありません……。お怪我は……」

仰向けに倒れている冬惺に、綺理が心配げに駆け寄る。その様に翔波は頭が真っ白になった。最悪だ。命令をやりとげられなかったばかりか、主人の真上に落ちて下敷きにしたのだ。

（殴られる）

真っ先にそう思った。この新しい主人は、朔秋と違って些細なことで翔波を殴ったりはしないけれど、さすがにこんな真似をしたら激怒するに決まっている。

木刀でこっぴどく殴られるとか、冷たい池に落とされるとか、柱に縛り付けられて真っ暗な蔵に一晩中閉じ込められるとか――いや、お仕置きをされるだけならまだいいのだ。

（出て行けって……おまえなんかいらないって言われたら、どうしよう）

我知らず震える手を左胸にやり、冬惺からもらった守り刀を上衣の上からつかむ。

そこに、身を起こした冬惺が眉をつり上げて怒鳴った。

「この程度で怪我してたまるか、たわけ。登れないなら登れないと先に言え！　なんのために俺が確認したと思っている！　あとその口閉じろ。阿呆に見られるぞ！」

言われて、翔波は自分がぽかんと口を開けていたことに気づいた。慌てて口を閉じ、主人の言葉を反芻する。……怒られ方が、想像していたのと全然違う。

「もう一度聞くぞ、翔波。この木に登れるか？」

「……自信がありません」

正直に答えると、冬惺はにやりと笑った。翔波の額を指で軽く弾き、軽快に立ち上がる。

「じゃあ登れるようにしてやる。もう嘘をつくなよ。――綺理、一緒に登って教えてやれ」

「うん！　おいで翔波。こんな木、慣れちゃえば簡単よ」

布のくつを脱ぎ捨てた綺理が、明るく笑って手招きする。彼女は翔波の前でするすると木に登り、少し上から手足をかける場所やその順番を丁寧に教えてくれた。

綺理の手本と助言、時折下から冬惺がかける注意を頼りに、翔波は登っていく。一番下の枝にたどりついたところで、ふと木の下の主人を見下ろし、あることに気がついた。

――翔波が最初に挑戦したとき、冬惺は今の位置に綺理と並んで立っていたはずだ。あの位置にいたら、翔波が木から落ちても絶対に下敷きにできない。

(……だから冬惺さまは今も木の下にいるんだ。僕が落ちても、また受け止められるように)

合点がいった途端、胸の奥からなにかがあふれるのを感じた。なんだろう、これ。胸が一杯でつかえているのに、心は天に昇りそうに軽い。全然悲しくないのに、目の前がぼやける。

翔波は目許をぐいとぬぐうと、また綺理について登りはじめた。背中に感じる視線の意味ももう間違えない。安心して、ゆっくりと着実に上を目指す。

天辺の枝につくと視界が開けた。山間の離宮から裾野に流れる川、その先に続く田畑と森が一望できる。――いつもうつむいて歩いてきた翔波には、初めて見る広々とした景色。

声をなくして眺めていると、下から冬惺も登ってきた。

翔波を真ん中に、枝に三人並んで座る。と、綺理が「おやつ持ってきたの」と懐から得意げに包みを出した。中身は一本の棒状の飴菓子で、彼女はそれを当然のように三等分に折る。

「はい、翔波の分。これ、なかなか食べさせてもらえないんだから落とさないでね」

びっくりして固まっている翔波に、綺理は見とれるほどまぶしい笑顔を向けた。あたたかく優しい手で翔波の手を包み、飴菓子を握らせてくる。

また胸が詰まってどうしようもなくて、なんとか「ありがとうございます」と言葉をしぼり出したら、綺理は「友達に『ございます』はつけないの」と可愛らしく唇を突き出した。

三人で肩を寄せ合って食べた飴菓子は、甘くて甘くて、ほんの少ししょっぱくて——幸せの味がしたのを覚えている。

「木登りのしかたと、世界の広さと、幸せがなにかを教えてもらった。それは私が閣下に忠誠を捧げ、綺理姫の味方をしている理由にはなりませんか？」

翔波が語り終えると、奏珠は黙って目を伏せた。

あえて三人での思い出話を選んだことで、「明花に勝ち目はない」とほのめかしたのにも気づいたのだろう。彼女は、鏡作に縁ある者の顔から明花の侍女の顔に戻り、立ち上がった。

「——わかりました。それでは翔波どのは、今の主君のためならなんでもすると？」

「まあそうですね。……それが閣下のためになると思えば命令も聞かなかったり、多少勝手なことをしたりもしていますから、従者の鑑とは言えませんが」

肩をすくめた翔波に奏珠は一礼する。そして彼女は、底の知れない笑みを浮かべて去った。

「私も同じです。私も今の主人のためならなんでもいたしますよ。――さようなら、鏡作公」

――翌日、綺理は夜宴の席で明花に占いをされ、三つの凶事を予言された。

一つ目は夜宴の帰り際に的中し、渡り廊下を歩く綺理の頭上にねずみの死骸が降ってきた。

二つ目と三つ目が的中したのは、その翌日の茶会のときだ。

まず綺理の茶を注ごうとした王宮仕えの侍女が、茶に虫の死骸が混入していたのに動転して熱い茶を綺理にかけてしまった。幸い火傷はしなかったが、綺理が別室に着替えに行くと、替えの装束に太い針がついていた。もし着る前に気がつかなければ、腕に針が突き刺さっていたところだ。

だんだんと凶悪化する事態に、侍女たちの堪忍袋の緒はとうに切れていた。

「悪質な嫌がらせですよ、姫さま。あれほど見えすいた自作自演はありません！」

「玉造家派の方々も、みんなそう噂しています。凶事が王宮でしか起こらないという時点で、事実関係は明白でしょうって！」

「それをあの公女殿下ときたら、『綺理さまにずっと災いの相が出ておりますわ。どんな凶事が起こるか前もって見当がついていれば、さけようもありますから』などと親切めかして、ま

た占いをして！　凶事の占いを出せば姫さまが王宮に行けなくなると思っているんです！」

綺理の自室に詰めかけて口々に訴える侍女たちを、綺理はまあまあとなだめた。

「みんな。どれもまだ人為的なものだと断定できてないでしょ。証拠を握るまでは黙っていたほうがいいわ。それにほら、私はぴんぴんしているんだし」

（……なんて言って、実は毒虫が来るのを待っているのがばれたら怒られるかなー……）

綺理はひそかに冷や汗をかいた。毒虫を使われれば犯人の尻尾をつかめるのでしばらく様子を見ようと、書庫の一件以来の凶事のことは冬惺と翔波に伝えていないのだ。

「もちろんです。もしうちの姫さまがお怪我でもされていたら、北部の里育ち根性にかけて、この私があの占いの会の者全員に目に物を見せていたところです」

「そうねえ。梨英なら、一対二十四でも南部の深窓のお嬢さま方には負けませんものね。ですが姫さま。たった一言つぶやいてくだされば、この私がすぐに報復措置をお取りしますよ？もちろん証拠を残すようなへまはいたしませんし……」

「笑顔でなにを言うのよ桂鈴！　あのね、もし私が本当になにかしたくなったときは、あなたたちにはやらせないから。私が自分でやるから。だからなにもしないで。ね？」

綺理が言い募ると、侍女たちはなぜか一斉に綺理の薬房のほうを振り返り、「それもそうですわね」とうなずき合った。納得してくれたのはいいが、微妙に釈然としない。

侍女たちを率いて出て行きながら、桂鈴が最後に言った。

「ですが姫さま。明日も王宮に行かれるというのなら、くれぐれもお気をつけください。私たちが盾になれるとは限らないのですから。冬惺さまにお話しして守っていただくことです」

庭園の林を一人で歩いていた冬惺は、けったいな光景に足を止めた。

「……千紗。おまえ、なにを持っているんだ」

「あっ、叔父さま！　見て見て、珍しい目の子狐を捕まえたの！」

いたずらっ子な姪が走り寄ってきて見せてくれたのは、どう見ても子狐真羅だった。加減を知らない抱きしめかたをする千紗の腕で、真羅はぐったりしている。

彼の翡翠の目が「助けてくれたまえ」と訴えていたので、冬惺はとりあえず「大淵妖が八歳の子供に捕まるな。情けなさすぎて見捨てたくなる」という目つきで睨んでおいた。

「この狐さん、私が飼うの」と言い出した千紗をなだめすかして、真羅を手放させる。渋々あきらめた千紗が、捜しにきた侍女のもとに戻るのを見送り、冬惺は林の奥に進んだ。

人けのないところまで来ると、腕に抱えていた子狐真羅をぽいと落とす。

「子狐。おまえ、自分の正体がばれたらどうなるか想像できないほど馬鹿なのか？」

「すまないね少年、助かった。しかしだな、どこに隠れても追いかけてくるあの子供の勘の鋭

さは尋常ではないよ。それに、君の姪を引っかいて逃げるわけにはいかないだろう」
真羅は身軽に着地し、千紗に乱暴になで回された体の毛づくろいをはじめる。
「私のふさふさ尻尾がむしられている……。少年、姪のしつけはきちんとしたまえよ。……ああそういえば、ひょうたん水筒も従者の部屋に置きっぱなしだ。あとで取りに行かねば」
しょんぼりとしている真羅を、冬惺は目をすがめて見下ろす。
「この放蕩子狐、酒を取りに来るときは少しくらい顔を出せ。覆面集会のとき、待っていると言いながらおまえがどこかに消えたから、翔波と綺理が心配していたぞ」
「……心、配？」
「なんだその驚いた顔は。言っておくが心配していたのはあいつらだけで、俺はおまえの心配などかけらたりともしていないからな。そこは勘違いするなよ」
「……いや、あのときキリに頭に巻く布を借りたままだったのでね。返そう返そうと思ってずっと懐に入れていたのだが……あとで訪ねるとしよう」
懐、と言いながら左胸を前足でぽふんと叩いた真羅を、冬惺は上から下まで眺め回した。
「その姿になっている間、装束や懐に入れている物はどうなっているんだ？」
「細かいことは気にしないでくれたまえ。大淵妖は地上の常識ではかりきれないのだよ。……ところで少年、今日は一人で散歩かね？　従者は？」
「翔波には綺理の身辺を警戒するよう命じてある。綺理はなにも言わないが、心配だからな」

冬惺は薬師の会合で得た情報から、紅楓方の間者らしき謎の男の襲撃、ここ四、五日綺理を見舞っている一連の凶事について簡単に説明した。

「打矢の男の動向はあれ以来不明だが、どうも自分の存在を示すのが目的のような襲撃だったからな。陽動の臭いがする。あの場では俺を狙っていたが、真の標的はたぶん俺じゃない」

一方で、媚薬と毒虫を求めた女が明花の侍女の一人であることは、ほぼつかんでいる。

しかし兄王が黄麗という侍女を通じて調べたところ、明花の侍女たちは占いの自作自演を疑われていることに本気で憤慨しているのだという。彼女たちは明花の占いを心から信じているので、占いを的中させるためになにか仕組もうという発想自体がないらしい。

(犯人がいるなら暴走した単独犯……。だがなにか引っかかる)

既に情報が手元にそろっているのに、それをうまく組み立てられていない気がする。

考えている間に真羅が毛づくろいを終えた。彼は喉が渇いて元気がないのか、「水筒水筒」とつぶやいてよろよろと去ろうとする。その尻尾を、冬惺はがしっとつかんだ。

「待て、子狐。俺はこれから綺理に会いに、影藤殿の露台に行くんだ」

「だがそれは公的な茶会だろう？　今会いに行っても、どうせ私はキリと話せない」

「違う。道に迷ったから案内しろ」

「……君、実は従者やキリがいなかったらなにもできないだろう」

影藤殿にたどりついた冬惺は子狐真羅と別れ、渡り廊下の陰に控える翔波と合流した。
翔波は油断のない目を、茶会の席がしつらえられた露台のほうにやる。
「閣下。昨日の占いの結果は『影踏むあなたを藤の冠が打つ』。藤棚の下に行くと災いが起こる、あるいは広義に、この影藤殿で災いが起こると解釈できます。お気をつけください」
「ああ。おまえは引き続き警戒していろ。ただしなにか起きても、綺理を助けることより犯人を特定するほうを優先するんだ。綺理は俺が守る」
冬惺は言い置くと、露台に向かって歩き出した。
影藤殿は影藤、つまり水面に映る藤の花影を愛でるため、池と藤棚に面して造られた殿舎である。だが今は花期ではないので、露台には藤色の薄い天幕が日よけに張られていた。
冬惺が行くと、先に来ていた明花が頬を染めて迎えた。今日の茶会は王妃の陰謀により、参加者が冬惺と綺理と明花、という実に居心地のよろしいものになっているのだ。
「お久しぶりです、冬惺さま。長いことお会いできず、寂しゅうございましたわ。次にお姿を拝見できるのはいつかと、寝ても覚めても冬惺さまのことばかり考えて……」
「それはすみません。狩占祭が明後日に迫って、道中の警備で衛府が忙しくなっていたとはいえ、姫のご機嫌うかがいに心を配ることすら失念するとはお詫びのしようもありませんね」
礼儀正しい笑顔で「こちらはおまえのことなど一切考えていなかった」と暗に言ってみたが、やはり通じなかった。明花はいっそうっとりした表情になり、「熱心なのですね……。お仕

事に打ち込んでいる冬惺さまのお姿も拝見したいですわ」などと言っている。

神経を周囲に張りめぐらしたまま、明花の話に適当に相槌を打っていると、視界の端に金色が映った。露台に続く細い玉砂利の道を、綺理が侍女たちを連れて一列に歩いてくる。

（綺理――）

冬惺がそちらに目をやると、明花がむっとしたように冬惺の腕を取った。腕に胸を押しつけるようにして、冬惺を自分の隣の席に誘おうと引っ張る。

――だが次の瞬間、冬惺は明花の腕を強く振りほどいていた。

直感と、綺理の頭上の屋根瓦がずれて光を反射したのと、どちらが先だったか。

「止まれ、綺理！」

叫び、走る。一歩遅く足を止めた綺理のもとに、冬惺は一気に距離を詰めた。

手を伸ばす。右腕で綺理を抱えこむ。呆気に取られている侍女の目前で、左手を振り上げる。

ばしん、と、綺理の頭上に落ちてきた黒い物体を宙でつかみ取る。

衝撃でひりひりする左手の中にあるのは、『藤の冠』――影藤殿の瓦だ。

一拍遅れて、青ざめた侍女たちが騒ぎ出す。

「冗談じゃすまないぞ、これは……」

装飾用の小さめの瓦とはいえ、これが直撃したら一生残る傷がついていた。間合いからして綺理に当たる確率は低かったが、もし綺理が止まらなければ後続の侍女が直撃を食らっていた。

「と、冬惺？　今、なにか落ちてきたの？」
腕の中で綺理がもぞもぞと動く。冬惺は彼女を強く抱き寄せて黙らせ、小声で説明した。
露台にいる者たちも、なにが起きたのかを察してざわつく。
占いが当たった、というささやきが冬惺たちのもとまで届き、綺理の侍女衆が色をなした。
「なにを抜け抜けと――」
「控えろ、梨英！」
冬惺はすばやく梨英の抗議を封じた。綺理を抱いた冬惺が道をふさいでいるので、侍女たちは露台にいる明花たちに詰め寄ることもできずにぐっと黙る。
（明花の侍女はほとんどが白だ。言い争っても意味がない）
冬惺は明花に向き直った。冬惺が綺理を抱きしめているのを悔しげに見ている彼女に、惨事を防げたのは占いの警告のおかげであること、しかし茶会は中止するとの旨を丁重に告げる。
「明花姫の占いによれば、私の従妹にはずっと災いの相が出ているとか。このまま茶会を行うのも不安ですし、今日は私が帰らせます」
「……冬惺さま御自ら付き添われるのですか？」
「ええ。大事な従妹ですから。非礼は重ねてお詫びいたします」
占いをした明花の顔を立ててのことでもあるので、明花は了承するしかない。だが彼女は、最後に冬惺たちに「お待ちになって」と声をかけた。

「昨日はお伝えしませんでしたが、綺理さまの占いの結果には続きがありますの」
明花は赤褐色の瞳で綺理を見すえ、挑戦的に言った。
「『狩り場に臨むあなたの前に、黒き弓取りが最後の矢を放ちます』――明後日の狩占祭、どうかお気をつけを」

（キリはもう眠ってしまったかな。今夜は毒蔵にもいないようだし……）
深夜、寝静まった玉造邸の庭の樹上にふっと現れた真羅は、綺理の部屋のある棟を見やってどうしたものかと悩んだ。
今日綺理は、冬惺に送られて早々と帰邸していたが、屋敷中が騒がしくて昼間は近づけそうになかった。なので夜が更けてからでいいかと思っていたら、遅くなりすぎたのだ。
（ま、確かめるだけ確かめるとしようか。まだ起きているといいのだが）
地面に降り立ち、音もなく庭を歩く。――そして鏡池のそばに来たとき、突然足から力が抜け、真羅はがくりと池のはたに膝をついた。
「――万宵。また君か……！」
〈真羅、あまり声を立てないことをおすすめするよ。そう遠くないところに《調停者》がいる

のだろう？　この場を見られたら、困るのは君だと思うがね〉

楽しそうな声は、頭の中ではなく少し離れたところから聞こえた。

池を見て、真羅は慄然とする。

水面に映っているのは、十歳ほどの童子ではなく、二十代半ばの青年だった。

翡翠の瞳も、後ろ髪を短く切った金銀交じりの黒髪も、自分と同じ。自分をそのまま大人にしたような姿で、童装束ではなく貴公子然とした月草の襲の装束をまとっている。

〈この姿で顔を合わせるのは初めてだな。こうして子供の私を見るのは奇妙な感覚だ〉

真羅は過去の妖王、万宵は現在の妖王。真羅が過去を象徴する子供の姿になっているのだから、万宵はその成長した姿――大人の姿になるのが道理だ。

水鏡の中の万宵は、端整な顔に悠然とした笑みを浮かべて分身に言う。

〈君は私だよ、真羅。世界の母なる神を慕い、この手に取り戻したいと願う妖王だ。――焦がれているのだろう。恨んでいるのだろう。湿ノ神よ、なぜ淵海にお帰りにならず、地上で眠りについてしまわれたのかと。なぜ眷属のいる淵海を捨て、地上ばかりを慈しまれるのかと〉

言葉が、心にすべりこんでくる。

それは決して否定できない感情だ。湿ノ眷属として湿ノ神を思い慕うがゆえの、嫉妬心。

湿ノ神が乾ノ神に心惹かれなければ。二神で地上を創りさえしなければ。――地上さえなければ、湿ノ神はずっと自分たち湿ノ眷属のものだったのにと。

〈残酷だと思うだろう？　淵海を顧みぬ湿ノ神が、地上を保てと眷属の長に約束させるのは。湿ノ神を慕って地上に上がる眷属を止め、地上を守れと私たちに約束させるのは〉

「万宵、それは……」

〈約束を守ろうとがんばっても報われはしない。素直に心に従えばよいのだよ。湿ノ神の寝所たる北瑛島を淵海に沈めれば、私たちの神を取り戻せる。――悪いのは残酷な約束をさせたあなただと、あなたを失って寂しかったのだと、そう言えば湿ノ神は優しく許してくださる〉

もう一人の自分の声に、心が震える。自分以上に自分の心の隙を知る者など居はしない。

〈君は過去の私だ。私と同じ心の軌跡をたどるのが当然だ。だから真羅。君が心を変えても、湿ノ神との約束を破ることに決めても、それは君のせいではないのだよ〉

水鏡の中で万宵が立ち上がる。水面をのぞきこんでいるのは真羅のほうなのに、こちらが見下ろされているような錯覚に陥る。絶対的な存在の前に、ひざまずかされているような――。

〈運命だよ。君が私の昔の心を持つ存在となったときから、定まっていた運命なのだよ。私は君の確定した未来だ。それを悟りたまえ。そうして、裏切り者として同胞に憎まれ、追われ、寄る辺なき身で戦い続けることなどやめてしまいたまえ。ほら――〉

「――……っ！」

心を乗っ取られようとする嫌な感覚が、真羅を襲った。

本体の意識が迫ってくる。魂が、魂の宿っている胸の勾玉が、激しく揺さぶられる。



真羅はたまらず装束の左胸をつかみ、――そこに納めていた布の感触に、はっとした。綺理から借りていた布だ。布に移っていた薬の匂い――綺理の匂いがかすかに鼻腔をくすぐる。綺理がこの布を頭に巻いて、なでてくれたときのことを思い出す。

勾玉の震えがおさまる。真羅は深呼吸をすると、静かに万宵を見返した。

「――違うよ、万宵。君は私の確定した未来などではないのだよ」

〈違わないよ、真羅。君は私のたどった過去でしかないのだから〉

「七年前、昔の心を取り戻したばかりのときの私は、確かにそうだっただろう。だがね、私の心はそこから動いている。――万宵。君は、自分のために泣いてくれる人を知っているかい。髪を結ってもらう約束をしたことがあるかい。木の上で分けてもらった夏みかんのおいしさが想像できるかい。部屋に置かれている酒の瓶が、自分のためだけに用意されたものだと気づいたときの気持ちがわかるかい。『頼む』と言って任せられたり、心配するからちゃんと顔を出せと怒られたり、当たり前の仲間のように扱われたことがあるかい」

万宵の顔から表情が失せ、逆に真羅は笑みを浮かべた。

「私の心は君の知らない道を歩んでいるのだよ。万宵とは別の、もう一つの未来に向かって。――今の私には、湿ノ神との約束のほかにも地上を守りたいと思う理由がある」

この地上で、共に生きていきたいと思う人たちがいる。だから。

「この心もこの体も、決して君に渡しはしない！――去りたまえ！」

立ち上がり、水鏡の中の万宵に向けて右腕で薙ぎ払う！

〈――真羅……っ!?〉

心に侵入しようとしていた万宵の意識を、気合いで弾き返す。

パシャンッ……と、水面が打たれたように波立った。瞬間、様々な感覚がどっと真羅のもとに返ってくる。五感が鋭くなり、自分が今まで万宵に感覚を封じられていたことを知る。

心身を支配しようとしていた万宵の気配が、意識の隅々から去る。再び凪いだ水面にもう自分の姿しか映っていないのを見て、真羅はほっと息をついた。

――そのとき。

「真羅？　誰と話していたの？」

不意に後ろから声がかかり、振り返る。寝巻き姿の綺理がいつの間にかそばに立っていた。彼女は耳がいい。会話の内容までは聞こえずとも、声を聞きつけて出てきたのだろう。

「……独り言を言っていただけだよ、キリ」

「嘘。前も似たようなことがあったけど、あのときは追っ手の淵妖と戦ったあとだったんでしょ。またなにかあったの？　喉が渇いているなら――」

「いや、酒があるので毒薬は遠慮しておく。本当に、自分と話していただけなのだよ。……そうそう、キリ。先日借りた布なのだがね、もうしばらくこのまま借りていて良いかね？」

「それはかまわないけど……どうしたの？　なんだか元気ない顔してるわよ？」

綺理が少しかがみ、真羅の頭を優しくなでる。その感触と、心配されているという実感とが心地よくて、真羅は黙ってされるままになった。

やがて綺理の手が離れたとき、名残惜しくて一歩前に出る。子供の姿は得だ。とん、と寄りかかるようにすると、綺理は当たり前のように抱きしめてまた頭をなでてくれた。

――理から外れた大淵妖に、こんなにも優しく手を伸べてくれる人がいる。それを知ってもなお、万宵は真羅が報われていないなどと言うだろうか。

（……今回は万宵の意識をはね返せたが、私と本体のつながり自体は決して消えない）

いずれまた、万宵は真羅を乗っ取ろうと仕掛けてくるはずだ。

少し前までの真羅なら、自分の力と体が万宵のものになる危険がこれほど近くに迫っていたら、先手を打って滅びたいと望んでいただろう。

けれど今は、まだ生きていたいと思う。自分を仲間と思ってくれる人たちのそばにいたいと思う。――なにより、この優しい手に自分を斬らせたくないと思う。

なにも聞かずに頭をなでてくれる綺理の腕の中で、真羅はそっと目を閉じた。

「キリ。……もうしばらく、このまま」

六章　真実は祭の森で

緑深く、夏の気が濃い御料林の一角に、五色の幕が張られていた。
幕に区切られた昼下がりの儀式場には、華やかな狩装束をまとった貴人や、野遊び用の裳の丈の短い装束で着飾った姫君たちが集っている。
狩占祭は、猟期に先立って行われる儀礼的な狩猟行事で、国王以下多くの貴族が自ら馬に乗って参加するのだ。
北瑛島を統一した金蘭王家の初代志輝王が始めた祭なので、参列している琅公国の使節はみな物珍しそうにしている。特に彼らは、瑛国の北部貴族は女性でも狩りをたしなむということを知らなかったのか、女物の狩装束に身を包んだ女性を見ては目を丸くしていた。
始まりの儀式が終わり、参加者が列を崩して馬へと動きはじめたとき、人の流れに交じって春怜が綺理に近づいてきた。
綺理は丁重に礼を取ろうとしたが、春怜は毎度のことながらにこやかにそれを遮る。
「やあ、私の可憐な従妹姫。占いのことを聞いたから君は来ないのかと思っていたよ」
「ええ、まあ、いろいろありまして……」
「もっとも私は、凛とした狩装束姿の君を見られて嬉しいけどね。しなやかな子鹿のようでと

ても素敵じゃないか。思わず狩ってみたくなる――」

慣れた手つきで綺理の顎をすくい上げた春怜は、そのまま視線を横にずらした。

「――くらいのことは、たまにはおまえも言ってみないか？　冬惺」

「冗談は存在だけにしてください、兄上。それと、俺の許可なく綺理に触らないでください」

いつの間にか綺理の後ろに来ていた冬惺が、春怜の手を綺理から払いのける。ぴりぴりしている弟に、春怜はにやにや笑いを浮かべた。

「ほほーう。俺の許可なく触るな、とはこれはまた……」

「あああのっ、陛下、これはその……っ」

真っ赤になって慌てた綺理をよそに、冬惺は至って事務的に言う。

「いつ凶事が降りかかるかわからないので、俺が常に綺理を守るという条件で参加させているんです。ですから今日は、護衛の俺の許可なしには誰も綺理には近づかせません」

狩占祭で綺理に凶事が起きる――と読める占いに、あの日玉造邸は大騒ぎになった。

侍女たちを筆頭に、綺理の周囲の者は「危険だ」と参加を思いとどまらせようとした。もはや嫌がらせと呼べる段階を過ぎている、今度こそ怪我をさせられるかもしれない、と。

それでも綺理が参加したいと言うと、冬惺が「参加するなら俺が綺理を守る」と請け合い、その途端影珀が積極的に綺理を行かせようとしたのである。

影珀は、冬惺が護衛のために綺理に張りついている様を公女派に見せ付けたいのだ。それで

もし綺理が怪我をしたら、冬惺に「娘を傷物にした責任を取れ」と迫るつもりなのだろう。
当の影珀自身は、縁談の件で春怜に不満を持っていることを示すため、祭に欠席している。
「ほう？　すると冬惺、おまえは危険だと止めなかったのか？」
春怜が意外そうに眉を上げる。だが彼も、冬惺と明花の縁談を成立させる気がない以上、冬惺が堂々と綺理のそばにいられるこの状況を都合よく思っているはずだ。
兄の疑問に対し、冬惺はあっさりと答えた。
「占いの言う『狩り場』が狩占祭の場だとは限りませんから。屋敷に置いておけば危険がないとも言い切れない。それなら一番安全なのは俺のそばです」
（確かに。明花さまの侍女が犯人なら、冬惺が巻き添えを食うようなことはできないもんね）
綺理はそう納得していたのだが。
「なるほど。大切な君は俺が命をかけて守るから、絶対に安全だ――ということか？」
「当たり前です」
（――ぜ、全肯定!?）
即答に、鼓動が大きく打った。たった一言から、大事にされているなあと強く伝わってくるから、嬉しくてどうしたらいいかわからない。つい視線をさまよわせれば、そばに控えている翔波と目が合い、「よかったね」と言わんばかりに微笑まれる。いっそうにやにやする春怜と、ただ一人平然としている冬惺との間で、おたおたするばかりだ。

そこに、例によって例のごとく千紗が割り込んできた。
「冬惺叔父さま！　頑張っていらしてね。叔父さまは狩りがお上手だもの。いい獲物にめぐり合えて、今日一番獲物を捕れますようにってお祈りしてるから！」
脇目もふらずに冬惺のもとに駆けてきた千紗に、春怜は情けない顔になる。
「……ええと、千紗？　お父さまも狩りがお上手だって知っているかな？」
「知ってるわ。だから叔父さま、お父さまなんかに負けないように頑張って！」
「……」
愛娘に一瞥すら与えてもらえず、春怜はしょぼんと肩を落とした。
つい笑いをこらえる綺理の前で、冬惺は兄の肩をぽんと叩いてから姪に向き直った。
「ありがとう、千紗。――だけど今日は、少し変わった獲物が捕まるかもしれない」

狩りに向かう者が五組に分かれて出発したあと、狩りに同行しない姫君や子供、老齢の貴族たちは宴の天幕が張られた野に向かった。
こちらはのんびりと野遊びをする組だ。野原や川辺を散策して花を探し、誰の摘んできた花が最も美しいかを競う『花狩り』という遊びを、獣を追う狩りの代わりに楽しむのである。
花狩り組の千紗は、まずは天幕の下で開かれる短い茶会の席についていた。

しかし母王妃も同年代の女の子も狩占祭に参加していないので、話し相手がいない。千紗は花狩りに出かけるまで、さっそく暇を持て余した。

（つまんない。叔父さまが翔波を置いていってくだされればよかったのに）

頬をふくらませ、暇にあかして天幕の中の人間を観察してみる。

（明花さま、不機嫌そう。叔父さまがずっと綺理さまと一緒だったものね。……あ、あの黄麗って侍女、お父さまの新しい浮気相手だ。お父さまったら本当に女癖が悪いんだから）

実は「浮気」も「女癖」も正確な意味を知らないまま使っている千紗は、ふとあることに気づいてあたりをきょろきょろと見回した。

（……明花さまの侍女が、一人足りない？）

狩占祭は、狩占いの名の通り、獲物でその年の狩猟の吉凶を占う祭である。

しるしをつけた獲物を放って狩りを行い、どのしるしの動物が何頭、何匹、何羽捕れたかで占うのだ。そこで捕る数を意図的に加減できないよう、五つの組はそれぞれ別の区画で狩りを行うことになっている。

綺理、冬惺、翔波は国王組に入った。琅の使節もこの組に加わり、残りは北部貴族と南部貴族がほぼ半々。さらに護衛を加えた大所帯で、勢子の待機している指定の開始位置へ向かう。

綺理は、冬惺と翔波の馬に左右を挟まれて移動しながら、周囲の木立に目をやった。
（真羅も森の様子を調べにくるって言っていたけど、たぶんほかの淵妖に見つからないように子狐に化けて……だよね。うっかり獲物と間違えられないといいんだけど）
綺理が危険をおして参加したのは、一つにはこの森が妖道の真上に存在するというのが気になっていたからだ。真羅も、狩占祭の日に淵妖が妖道に押し寄せる可能性を示唆していた。
もしそうした事態になれば、火雷明王を招請しないと淵妖の大群を防ぎきることは難しい。
綺理が降神術を使えることは秘密なので人前では力を使えないとはいえ、とにかく綺理がこの場にいなくては始まらないのだ。
（それに私が狩占祭に出れば、占いを実現させている誰かがいるとすれば必ず罠を仕掛けてくる。私を囮にして犯人の尻尾をつかめれば……）
『黒き弓取りが矢を放つ』という占いの言い回しから、綺理は飛来物に警戒して馬を進める。
道を半ば過ぎた頃、ふと綺理の頭上で枝の揺れる音がした。
ぼとり、と黒い物が馬の耳あたりに落ちてくる。
（――毒蜘蛛！）
闇市で売買された種類の物だ、と綺理が気づいたのと同時に、馬が驚いて走り出した。
「綺理！」
「綺理姫！」

馬はぐんと速度を上げ、前を行く貴族たちの馬を一気に追いこす。
周囲の景色が視界から吹き飛ぶ。激しく上下する馬上で、綺理は青ざめた。
（止まって、止まってったら！）
必死で手綱を操るが、毒蜘蛛にかまれたのか暴走した馬は止まらない。毒の影響で錯乱しているのだろう。血走った目で頭を振りながらぐんぐん速度を上げる。
「その先は崖が――！」
背後から飛んだ悲鳴に、ぞっとした。
行く手にはまばらな木立。その向こうは崖。谷の深さ？　考えたくもない！
せめて曲がってくれと手綱を引いても、馬は綺理の指示に従わない。泡を吹きながら闇雲に崖へと走り、綺理は振り落とされないだけで精一杯だ。
このまま崖下に突っこむのが先か、振り落とされて地面に叩きつけられるのが先か――。
「飛び降りろ、綺理！」
後方からかかったその声に、とっさに綺理は従った。手を放せばどうなるかは考えなかった。
声の主が冬惺だと知った刹那、考えるよりも先に体が動いたのだ。
馬にしがみつくのをやめた瞬間、馬がはねて宙に放り出される。
落ちる。馬はそのまま崖の下へ。――綺理は崖の上の岩場へ！
「――綺理！」

岩に叩きつけられる間際、岩と綺理の間に冬惺が飛びこんだ。
文字通り、彼は駆けつけた馬上から飛んだのだ。空中でその腕に綺理をしっかりと抱きとめ、隣の岩の上に着地する。
「無事か？」
「……冬惺。ありがとう」
自分が助かったことを知り、綺理はほっと息をついた。
安心した途端、冬惺に抱えられているという状況に頬が熱くなる。だが間近で見た彼の瞳からはいまだ緊迫感が消えておらず、甘いときめきはすぐに失せた。
（……冬惺？）
彼の視線を追って木立のほうを向いたとき、冬惺が鋭く叫んだ。
「翔波！　右の杉の上だ！」
「天滅還海！――制せよ！」
道の向こうで、翔波が即座に使役術を使った。依代の碁石から放たれた紺碧のもや――淵妖が勢いよく杉の樹上に飛び、枝の上にいた人影に巻きつく。
淵妖はすぐに淵海に還ったが、逃げようとしたところに制動をかけられたその人物は、体の均衡を大きく崩した。梢を折って、木の下に落ちていく。
「逃がすな！　玉造の姫暗殺未遂の犯人だ！」

冬惺の号令に、護衛の兵たちが動き出した。
綺理の無事を見て取って胸をなでおろしていた貴族たちも、慌てて杉の樹下に向かう。
（あれが、毒虫を手に入れて私の馬に放った侍女――？）
地面に下ろされた綺理は、表情を引きしめ、冬惺のあとについて犯人のもとへと急いだ。

杉の根元に倒れていたのは、深緑の被き布で姿を隠した小柄な人物だった。左右から兵に腕をつかまれ、立ち上がらされたその人物のもとに、人々はやや遠巻きに集まる。
冬惺は人垣を割って進み出ると、被き布を引きはがした。
「やはりおまえか。――奏珠」
血の気の引いた顔で震えている黒髪の侍女の姿に、周囲の貴族たちが騒然となる。
「明花公女の侍女だ！　ではやはり、一連の凶事は自作自演だったのではないか！」
「綺理姫の暗殺を謀るとは、なんと恐ろしい……！　いったい誰の指図だ！」
「琅公国が玉造の姫の暗殺を企んだのか!?　これは玉造家に、ひいてはこの瑛国に対する宣戦布告だぞ！」
玉造家派の北部貴族の怒りが爆発し、琅の使節は青くなって必死に無関係を主張する。
そこに、春怜が一喝した。
「静まれ！　琅公国は我が瑛国の良き友人だ。滅多なことを口にするな！」

怒れる貴族たちが渋々黙ると、春怜は弟に向き直る。
「――さて冬惺。これはどういう状況だ？」
「それはまず犯人に聞いたほうがよいかと」
冬惺が淡々と応じると、奏珠は両脇を兵に固められたまま震える声で言った。
「あ、あんなことになるとは思わなかったのです！　誓って、綺理さまを殺めるつもりなどございませんでした！　ほんの……ほんの少し怖がらせるだけのつもりで。そ、そうです、姫さまはなにもご存じありません！　本当です！　今までのことはすべて私一人が――」
誰の命令でもないと、不自然なほど執拗に繰り返す奏珠に、冬惺は凄絶な笑みを浮かべた。
「――違うな、奏珠。おまえは主人の命令で綺理を殺そうとしたんだ」
（冬惺!?　まさか、明花さまが暗殺まで命じたってことにしたいの？）
綺理はぎくりと彼を見る。いくら縁談を壊したくても、それはやりすぎだ。
再び人々がどよめき、春怜が舌打ちして冬惺の肩を揺さぶる。
「落ち着け、冬惺！　おまえは綺理を狙われた怒りで冷静な判断ができていないんだ！」
「ご心配なく、兄上。俺はこの上なく冷静に怒っていますよ。ようやく駒の配置がわかったところなんです。――奏珠の主人は、明花姫でも琅公国でもない」
奇妙な台詞に人々は怪訝な顔になった。自然に静まり、冬惺を注視する。
冬惺は、意味がわからないという顔をしている奏珠の肩をつかんだ。

「枝の上でのおまえの動きを見て、やっとわかった。媚薬や毒虫の入手経路では素人臭く手がかりを残していたが、ただの侍女にしては身が軽すぎる。――綺理、馬を暴走させたのも本当は毒蜘蛛じゃない。毒蜘蛛で注意を引き付けている隙に、毒矢かなにかを打ち込んだんだ」

道に落ちていた毒蜘蛛の死骸を、翔波が掲げる。綺理は改めてそれを見て、はっとした。

「！　そうだった。あの黒忍蜘蛛はそこまで毒性が高くないから、かまれた馬が驚くことはあっても、あんなに錯乱することはないわ」

人々は冬惺たちの言葉にざわつきながらも、くちばしを挟まずになりゆきをうかがう。だがそんな彼らも、冬惺の次の行動にはぎょっとした。

「……探ればその衣の下にも、まだ暗器を忍ばせているはずだ」

冬惺がそう言って奏珠の襟の合わせに右手をかけ、無造作に胸元を開いたからだ。

「と、冬惺っ。あなた、女性になんてこと――」

「女じゃない。ちゃんと服の上から骨格を確かめた」

言下に否定され、綺理はぽかんと奏珠を見る。

――悔しげに冬惺を睨んでいる奏珠の胸は、確かに少女のものではありえなかった。

「――男!?」

うろたえて視線をそらしかけていた人々も、目をむいて叫ぶ。

春怜が額を押さえて「道理で口説く気が起きなかったわけだ……」とうめいた。

「兄上のその言葉が引っかかっていたんですよ。今回ばかりは女好きの勘に感服しました。――薬師の変装に性別はないそうだが、間者の変装と置き換えても同じだな。手慣れたものだ」

懐に潜ませていた短剣を奪われ、奏珠は唇をかんで押し黙る。

冬惺は彼の衣から手を放すと、縄をかけろと兵の一人に顎をしゃくった。

「玄人の間者が素人の侍女のふりをして、あえて自分の仕業とわかるような証拠を残しながら主人の敵を葬ろうとするのはなぜか？　表向きの主人に――琅公国側に罪を着せたいからだ」

「な、なんと……っ。では、奏珠はいったい何者だと……？」

琅の使節が目を白黒させて問う。その場の全員が固唾を呑んで見守る中、冬惺は答えた。

「彼は紅楓王家方の間者です」

順を追って説明しましょう、と冬惺は言った。

「綺理を暗殺してその罪を琅公国側に着せれば、得をするのは紅楓方です。白桜方の勢力を一気に決裂させることができますから」

国王の従妹にして玉造家の姫である綺理が、縁談絡みの諍いの果てに公女の侍女に暗殺されたとなれば、白桜方の者は決して琅公国を許さない。そしてもともとこの縁談に不満を抱いていた玉造家は、縁談を仕組んだ春怜王にも怒りの矛先を向けるだろう。冬惺とて、縁談が原因で綺理が暗殺されたとなれば、兄王に対し一切隔意を抱かずにいるのは難しい。

白桜王家は琅公国とも玉造家とも決裂し、内部にも分裂の火種を抱えていたことになる。

「おそらく奏珠の任務は、当初は単に白桜の王宮の内情を探るだけだったんでしょう。しかし明花姫が縁談に乗り気になり、姫の侍女が綺理に危害を加えるごく自然な理由ができたことから、命令主はこの暗殺事件を仕掛けることを思いついたんです」

息を詰めて聞く人々に、冬惺は種明かしとばかりに語っていく。

「用意していた筋書きはこんなところでしょう。――公女の侍女が今までの凶事と同じように、占いに便乗して綺理に悪ふざけを仕掛けようとした。しかし加減を誤って死に至らしめてしまったため、侍女は恐ろしくなって逃げ出し、後に森の奥で自殺体となって見つかる――。奏珠は正体が男ですから、替え玉の死体を用意して幕を引くつもりだったんでしょうね」

（でもその筋書きは、明花さまが都合よく占いの結果を出さないと成立しないんじゃ……）

綺理はそう疑問を抱いたが、口にする前に気づいた。

狩占祭で凶事が起こるという占い結果を明花が告げたのは、なぜか占いをした翌日だ。そう告げればきっと綺理は狩占祭に来られなくなるからと、奏珠に吹き込まれたのだろう。

冬惺は、後ろ手に縛られて猿ぐつわをかまされている奏珠を冷たく見下ろす。

「奏珠。おまえにとって誤算だったのは、紅楓方が動いているという情報と、謎の男が暗躍しているという情報が事前に漏れたことだ。綺理を暗殺したときに紅楓方の間者の仕業だと気づかれたら元も子もない。だから『綺理にいたずらを仕掛けた侍女』と『紅楓方の間者らしき

男』が別人であると信じ込ませるために、素人には扱えない毒打矢で俺を襲撃したんだ」

（それじゃ、あの打矢の男も奏珠……！）

綺理は息をのんだ。その隣で、春怜が「ちょっと待て」と弟を制する。

「確かに筋は通っている。奏珠が琅の手先でないこと、むしろ明花姫を利用して暗殺の罪を着せようとしていたことは明白だ」

貴族や琅の使節に聞かせるように断言してから、彼は続けた。

「だが冬惺。紅楓方暗躍の情報の出所が怪しい、と報告してきたのはおまえだろう。妙なことを言うようだが、この間者が紅楓方の手の者だという証拠はあるのか？」

「それは――」

「あります」

言いよどんだ冬惺のそばで、翔波がきっぱりと言った。

視線が翔波に集まる。冬惺までもが瞠目して彼を見る。その中で、翔波は奏珠の前に立った。憎々しげな顔で自分を睨み上げる奏珠を、静かに見返す。

「あなたが女性だと信じ込まされていたから、今の今まで面影と結び付けられなかった。――冬惺公閣下。私は十一年前の四月十九日、紅楓の朔秋王太子の従者となるため連れて行かれた離宮で、幼い頃の奏珠どのを一度見ています。彼は弓場の裏手の井戸で水浴びをしていたところで、左の肩甲骨に蝶の形のあざがあったのを覚えています」

奏珠を取り押さえている兵が彼の左肩をむき出しにすると、そこには確かに小さな蝶形のあざがあった。翔波の驚異的な記憶力に、人々がどよめく。

「――なるほどな。冬惺、おまえは役に立つ従者を持った」

春怜が感心したように言った。

「そして私は誇るべき弟を持った。もし紅楓方の陰謀どおりに事が進んでいたら、どれほどの事態になっていたことか……。大手柄だな」

「手柄と言うなら、俺たちは賛辞に値する従妹を持ちましたよ。薬師の伝手が使えたのも、奏珠をおびき出して捕らえられたのも、綺理のおかげですから」

冬惺は傲るでもなく応じると、奏珠を連行するよう兵に命じる。

馬の暴走に始まる一連の騒動が無事に落着したことで、人々は安堵した。気をゆるめ、口々に冬惺たちを褒めたたえる。

――ところが。

「その間者は後ほど詮議する。……ああ、念のため気を失わせてから連れ――」

連れて行け、と冬惺が兵に指示しかけたときだった。

突然、人々の乗ってきた馬がいななき、騒ぎ出した。

「!?」

全員の注意がそちらに向く。その隙に、縄を打たれていたはずの奏珠が動いた。

「なっ、貴様……！」

兵の声に綺理たちが振り返ったとき、奏珠は強烈な足技で両脇の兵を転倒させていた。

彼は、今までおとなしく捕まっていたのが嘘のような敏捷さで跳ね起きる。縄はいつの間にか切られていた。自由になったその手には、のこぎり歯を持つ隠し小刀が握られている。

「この……っ」

そばにいた兵が刀を抜く。が、彼よりも奏珠のほうが速かった。

侍女装束が翻る。脱ぎ捨てた上衣で兵の目をくらませ、奏珠は単姿で後方に跳んだ。猿ぐつわもはずし、そのまま木立の中に逃げていく。

その背を、冬惺が狩り用に持参していた弓矢で射た。しかし。

「くそ、外した。俺としたことが……！」

矢は狙いをそれて、奏珠の右腕に突き立ったのみ。彼の足は止まらない。翔波を含めた何人かが乾ノ術を放ったが、間が悪く互いの術がぶつかって相殺してしまう。その隙に彼の姿が崖下に消える。馬を鎮めた者たちが慌てて崖際に走ったが、既に逃げられたあとだった。

――逃げられた。

その事実を認識するや否や、真っ先に動いたのは冬惺だ。自分の馬へ走りながら、叫ぶ。

「失態の謝罪と言い訳はあとでします、兄上！　ほかの組に事態を報せて祭を中止してください！　奏珠が一度も自害しようとするそぶりを見せなかったのは、助けにくる仲間がほかにい

るからである可能性が高い。――無防備なほかの組が狙われるかもしれません！」

兵を数組に分けて伝令に出し、狩占祭の中止をほかの組に報せる。待機していた勢子を呼び戻し、兵の増援も呼んで、参加者の貴族たちを御料林の入り口の離宮に引き上げさせる。

綺理、冬惺、翔波は彼らに先んじて馬を駆り、花狩り組の天幕のある野を目指していた。

本来なら綺理たちも護衛を伴うべき身なのだが、どさくさ紛れに伝令役を買って出て三人だけで飛び出してきたのである。綺理は谷に落ちた馬の代わりに、兵の馬を借りている。

「明花さまが琅から連れてきた随身が、奏珠の仲間かもしれないってこと!?」

綺理は走る馬上で聞き返した。その腰には愛用の剣が下げられている。綺理の荷物は暴走した馬と運命を共にしてしまったが、剣は衆目を慮って翔波に預けていたので無事だったのだ。

冬惺が早口で答える。

「ああ。奏珠が毒や暗器を手に入れるために自ら動いていたことからして、奴には王都内に有力な協力者がいない。仲間がいるとしたら、おそらく琅から共に来た一行の中。そして明花の随身のうち五人は、護衛として花狩り組に同行している！」

「もし奏珠の協力者が、奏珠の正体がばれたことを知ったら、逃亡をはかるついでになにをするかわからない……ってことだよね。急がないと！」

翔波が三人の思いを代表して叫び、彼らを乗せた三頭の馬は森を抜けてひた走る。

だが綺理たちが花狩り組の天幕に到着したとき、明花の五人の随身はそこにはいなかった。

――明花と千紗が彼らだけを伴って出かけたまま、戻ってきていないというのだ。

花狩りに行く明花に無理やりついていったのは、千紗なりに頭を働かせてのことだった。

千紗は随身の引く馬の上で、同行者たちを油断なく見回す。

（きっと明花さまは自分の手下だけ連れて、占いどおりに綺理さまに意地悪しに行くつもりだったのよ。ふんだ、残念でした。私が見張ってれば悪いことはできないでしょ）

むろん千紗は、綺理のことは叔父を独占している大敵だと思っている。そもそも叔父と姪は結婚できないのに、従兄妹同士なら結婚できるというのがずるい。

だが綺理が怪我をすればいいとは思わないのだ。自分が綺理に意地悪するのはよくても、ほかの人が綺理に意地悪しているらしいと聞いたらなんだか面白くなかった。

（それに叔父さまが綺理さまをお守りするっていうなら、これは叔父さまのお手伝いだもの）

千紗はそう思うことにして、少し前を行く明花を見やった。

明花は日差しを遮る琅風の被き布をして、馬に横乗りになっている。今のところ彼女は予定が狂ったという様子は見せておらず、馬を引く随身に訊ねていた。
「その星読花というのが咲いている場所はまだなの？　ずいぶん遠いのね」
「はい、殿下。岩場に咲く花ですから、この道をだいぶ行かないと手に入らないのだそうです。ですがこの季節、美しい花といえば星読花に優る物はございませんよ。お疲れでしたら、殿下がたが休憩されているうちに私が先行して取って参りますが――」
「いいえ、行きますわ。冬惺さまにお捧げする花はこのわたくしが直々に摘みたいですもの」
そうして森の中の道をずっと行くと、一行は渓流にかかる吊り橋にたどりついた。
随身が申し訳なさそうに千紗を仰ぐ。
「千紗殿下。吊り橋は揺れますので、一度お下りになって歩かれたほうがよろしいかと……」
千紗はうなずき、彼の手を借りて馬から下りた。初めて渡る吊り橋に歓声を上げ、みなを追いこして走る。そして渡りきったところで、背後から肩をつかまれ――、
千紗の意識は、そこで闇に沈んだ。

「千紗たちは星読花の咲く岩場に行った。それは間違いないんだな？　ならば俺が呼び戻しに

行く！――翔波、案内しろ！」

岩場への道を教えたという者に確かめると、冬惺は止められる前に天幕を飛び出した。

大方の事情は伝え、部下の兵に指示して花狩りに行っている者たちも呼び戻しはじめている。しかし公女の随身が紅楓方の間者かもしれないとまでは、なんの確証もなしには言えない。この状況で無闇に疑念をばらまけば、人々が疑心暗鬼になって大混乱に陥る危険がある。

（どうせ増援が到着するまでは、追跡に割ける兵もあまりいない。――だったら俺たちが！）

再び馬上の人となった冬惺と翔波の横で、綺理もひらりと馬にまたがる。

「おい、綺理。危険――」

「怪我したり危ない薬を使われたりするかもしれないでしょ？　私も行ったほうがいいわ！」

みなまで言う前に叫び返され、冬惺は黙った。綺理の言うことは一理あるし、淵妖の動静が気になる以上、彼女を自由に行動できない場に置いておくのはまずい。第一、本当に置いていく気があれば、狩りの組から三人一緒に飛び出してきたりなどしていない。

（――ま、綺理を自分の目の届かないところに残していくのも嫌だしな）

そう結論付けると、冬惺は馬首をめぐらして拍車をかけた。

「わかった。ただし、今日は俺が常に綺理を守るという条件だということを忘れるな。前のように俺たちをかばって危険な真似をするのは絶対になしだ。俺におまえを守らせろ！」

天幕の張られた野を飛び出した三人は、いつものように翔波を先頭に駆ける。
草原から森に入り、岩場へ続く一本道をしばらく行ったところで、翔波が声を上げた。
「吊り橋が……！」
三人は崖際で馬から下り、目の前の光景を呆然と見つめる。
渓流にかかっていた吊り橋が、対岸から綱を切られて落とされていたのだ。
それだけではない。対岸に打たれている綱を張る杭に、細く鮮やかなものが引っかかって揺れている。髪を結う組み紐だ。
翔波が目を細め、遠くの組み紐を凝視する。
「蘇芳と縹……、冬惺！　あの『赤色』の組み紐、千紗さまの髪結い紐だ！」
「！」
勘違いではないか、と疑う余地はない。翔波に記憶違いはありえない。
綺理と翔波は顔色を白くして谷底の激流をのぞきこんだが、冬惺はもう少し冷静だった。
「――なにかが起き、千紗と明花がさらわれたのは間違いない。だが千紗たちはまだ無事だろう。見える位置にわざと髪結い紐を残していったのは、千紗たちを餌に誘っているからだ」
自分に言い聞かせるように語り、ふと思いついて綺理を振り返る。
「綺理。おまえ、真羅と連絡を取ることはできないか？　あいつは千紗の顔を知っているし、俺の姪であることも認識している。あいつに助けを頼めるなら頼みたい」

言ってから、こんな状況だというのに冬惺は少しおかしな気分になった。

――頼みたい、などと。以前は真羅が手助けを申し出てもその裏を疑っていたというのに、この自分が助けが欲しいときに真羅を思い浮かべるようになったなんて。

「……子狐の手も借りたい状況だからな。あいつをこき使わない手はない」

ぶっきらぼうに付け加えると、綺理は微笑んだ。しかし彼女はすぐに眉をひそめる。

「真羅が私に話しかけてくる分には聞こえるけど、私から声を届けるのは相当近くにいないと無理だと思う。それに真羅は、子狐姿のときは淵妖の声での会話ができないって――」

そのとき、綺理がはっと碧玉の瞳を見開いた。

噂をすれば、というのか、ちょうどなにか聞こえてきたのだろう。彼女は淵妖の声に耳をすませるように、目をつむってじっと立ちつくす。

やがて綺理が顔を上げた。その瞳に宿るのは切迫感。その唇が紡ぐのはさらなる緊急事態の到来。そして、

「今、真羅が警告してきた。淵妖が森の奥に集まってきてる。今は真羅が引きつけているけど、このままじゃじきに淵妖の大群が押し寄せてくるわ！――あっちのほう！」

その指が示したのは渓流の向こう側――千紗たちが向かったという岩場のあるほうだった。

淵妖を集めている大淵妖がいるのか。いるとしたらその大淵妖と、千紗たちをさらった者た

ちの関係は？――なんにせよ、急がなくては。このままでは千紗と明花のいるであろう場所を、泥の妖の津波が呑みこむ。

「……っ、まず千紗たちを助け出してから、淵妖の大群をなんとかする。とにかく対岸に渡ってあとを追うぞ！」

冬惺はさっとあたりを見回した。上流側で一ヵ所だけ渓谷の幅が狭まり、丸木橋がかかっているのに目を留める。あそこなら、馬は無理でも人は渡れる！

三人は乗ってきた馬をそのままに、上流を目指して茂みに分け入った。生い茂る夏の下生えや蔦の中を突き進み、丸木橋に続く細道に出る。

そして一気に橋のたもとまで駆け抜けようとした、そのとき。

背後から殺気と、かすかな血の臭いがした。

「よけろ翔波！」

叫んで、冬惺は綺理を抱えて右手の茂みに飛び込む。翔波が左手の茂みに転がり込み、細道の上からのいた直後、今まで三人がいた空間を黒い打矢が貫いた。

冬惺は太刀を構えて振り返り、自分たちの背を狙おうとした人物を睨む。

「――奏珠。おまえと遊んでいる暇はないんだ」

「私もあなたがたを、ただで行かせるつもりはありませんよ」

丸木橋と反対側の道の先に、間者の少年が立っていた。

単に短い細袴。黒髪を結って頭に布を巻いたその姿は、もはや線の細い少年にしか見えない。

冬惺に射られた右腕に包帯代わりの布を巻き、左手には侍女に扮していた頃のかんざしを構えている。あのかんざしは暗器だ。少しでも動けば打矢と同じように飛んでくる。

のんびり戦っている暇はないが、振り切って行ける相手でもない。

（くそ、この忙しいときに！）

どうする、と焦りで冷や汗をにじませた冬惺に、翔波が決意を秘めた声で言った。

「――閣下、ここは私がなんとかします。綺理を連れて先に行ってください」

「翔波！　あなた、まさか……っ」

「大丈夫だよ、綺理。僕は捨て身のつもりはない。奏珠に勝って、君たちを追いかける」

きっぱり言った従者を、冬惺は横目で見た。翔波も横目で主人を仰ぎ、視線が絡む。

「勝つ自信はあるのか？」

「あります」

「――ならば勝て」

冬惺は短く命じた。翔波はもう、できないことをできると言って木から落ちた子供ではない。自信があると言ったら、あるのだ。

「勝って、五体満足で追いついてこい」

「はい。閣下の御心のままに」

力強い返事に笑み、冬惺は綺理を一瞥する。綺理もわかったと言いたげにため息をついた。
「……守り袋、ちゃんと持ってるよね？」
「うん。綺理たちこそ気をつけて。そっちのほうが厄介なんだから」
翔波が右手に碁石を構え、体の後ろで左手の指を一本一本折り曲げていく。
最後の指が曲げられたのを合図に、冬惺と綺理は同時に地を蹴った。
「天滅還海！　障せよ！」
翔波の詠唱を背中に聞いて、丸木橋へと走る。——手遅れにならぬようにと、祈りながら。

「——て万有を食む牙となれ！　天滅還海、覆えよ！」
翔波は続けざまに乾ノ術を使った。奏珠が罠を仕掛けている可能性を考え、二人が渡っている間だけ使役の淵妖に丸木橋を補強させる。
直後放たれたかんざしを、幹の裏側に飛び込んでやり過ごし、翔波は二人が無事に対岸に渡ったのを横目で確認した。別の木の裏側に潜んでいる奏珠と、互いに様子をうかがい合う。
一気に攻めてくるかと思ったのに意外だ、という感想を抱いた翔波に、奏珠が言った。
「……鏡作の翔波。あなたが私の主家筋だというのは本当ですよ」

場にそぐわぬ話に、翔波は眉をひそめる。
「歴代の鏡作家当主は紅楓王家の諜報を担い、裏で間者を育てて使っていました。私も今でこそ紅楓王家にじかに仕えておりますが、本来は鏡作公の配下。あなたが紅楓方に戻ってくれればあなたに仕えることとなります」
「……それは寝返りのお誘いと解釈していいのかい？」
「はい。紅楓家当主朔秋さまは、あなたが紅楓方に帰ることを望んでおられます」
翔波は青銅色の目をしばたたいた。あの元主人にいまだに執着されていたとは驚きだ。
（取られた玩具ほど惜しくなるってやつかな。それとも朔秋のことだから、単に閣下の所有物を奪いたいだけとか。あー……その相乗効果だろうなあ）
「私も当代の鏡作公のご帰還を願っていました。だから間者に私情はあるまじきとわかっていながら、此度の任務とは別に、あなたに話しかけた。今も」
奏珠の隠れる木を警戒しながら、翔波は足元の石を拾う。
「それで君はあっさり閣下たちを行かせたのかい？　二人きりのほうが勧誘しやすいから？　だけど無駄だよ。僕は冬惺公閣下の第一の駒。僕の忠誠は閣下だけのものだ」
「でしょうね。図書殿の庭でお話ししたときに悟りました。――あなたは骨の髄まで裏切り者です！　そしてあなたが意志を変えぬなら、私の好きにしてよいとも言われている！」
奏珠が木の陰から飛び出し、鉄のつぶてで翔波を狙った。

地面にめり込むほどの勢いで飛んできたつぶてを、翔波は横っ飛びによける。よけながら早口で詠唱し、奏珠目がけて火球を放つ。

奏珠は身軽に火球をかわしたが、翔波は次の詠唱の間にも彼に鋭く石を投げつける。翔波が石と火球を間断なく放つので、奏珠はなかなか距離を詰められない。おまけに彼は右腕を負傷している。

（向こうは万全の状態じゃないし、乾術師相手の戦いにも慣れていない。接近戦じゃ勝ち目はなくても、毒に気をつけて離れて戦い続ければ、いずれ武器切れに追い込める）

火球が立ち木にぶつかり、木肌を焦がす。翔波を狙ったつぶてが木の幹に打ち当たる。攻防のさなか、翔波は突然なにかに足を取られて転倒した。

罠の正体は見ずともわかる。翔波たちも小さい頃よく仕掛けたものだ。

（奏珠の奴、この辺の草を結んでおいたのか！）

背中につぶてを投げられる前に、体をひねって横に転がる。仰向けになったところで、奏珠が樹上で黒い打矢を手にしているのが目に入った。

「――に来たりて万有を食む牙となれ！」

右手から火球が放たれるよりわずかに早く、打矢が翔波の左胸に突き当たる。そこに当たるよう、翔波がわざわざ体をずらしたのだ。奏珠が火球をよけながら悔しげに言う。

「歴代の鏡作公に背いたあなたが、鏡に救われましたか」

乾術師は懐に常に身分証の銅鏡を入れている。鏡につける組み紐に、階級を示す丸玉を通しているからだ。その小さな鏡が、翔波の計算どおり打矢を防いでくれた。

毒の塗られていない矢柄の部分をつまんで打矢を捨て、翔波は身を起こして次の火球を放つ。

奏珠は枝から枝へ跳んでかわしたが、今ので武器が尽きたのか顔を歪めた。

「……っ、覚えていてください、鏡作の翔波！　このままでは済ませませんからね！」

安っぽい捨て台詞を吐いて身を翻す。その背に、翔波は碁石を投げつけた。

「逃がすか！　天滅還海、制せよ！」

淵妖が奏珠の足にからみつく。——と同時に、奏珠が黒い玉を樹上から投げた。

（え？　逃げるふり、で……）

使役術でなく火球を放っていれば、余波の熱風で翔波のもとまでは届かなかったはずの玉。

それが空中で真っ二つに割れ、中に詰められていた黒い粉がまき散らされる。

（幻覚薬!?）

悟ったときには、悪夢を見せるという擬蝙蝠の粉が、黒い煙のように翔波を包んでいた。

奏珠は枝から落ちながら、頭に巻いていた長い布の余りですばやく鼻と口元を覆った。地面にすとんと降り立ち、黒い煙が重く立ち込めるほうを見やる。

――悲鳴すら聞こえない。

（悪夢にのまれて気を失いましたか）

勝負はついた。裏切り者は斃れた。彼を殺せば、古き鏡作の血筋は途絶える。

引導を渡すのはせめてこの手で、と、奏珠は防毒面を整えて隠し小刀を握った。

「さようなら、鏡作公――」

「天空を廻る形無き馬、地上に降りて蹄を鳴らせ！」

突如、熱風が煙の帳を割ってゴゥと吹いた。

「！」

愕然とした奏珠の目に、煙を吹き散らした翔波が守り刀を手に飛びかかってくるのが映る。

「天にありては万物を照らす御光――」

翔波の守り刀を、奏珠は隠し小刀で受けた。鋼の打ち合う音に、翔波の詠唱が重なる。

「地上に来たりて万有を食む牙となれ！」

二人の間でまばゆい火球が生まれ、奏珠を吹っ飛ばす。遥か後方、崖際の木に叩きつけられた奏珠は、激痛に体を軋ませながら翔波を睨んだ。

「なぜ……動けるんですか、あなたは」

翔波は距離を置いて立ったまま、いびつな形の守り袋をかざす。

「――僕の幼なじみの片方がさ、すごく実用的な守り袋を作る人なんだよね」

守り袋は粗い縫い目に沿って開かれ、中に入れられた小さな薬の筒がのぞいている。
「君が入手した薬の種類を知って、対抗薬入りの守り袋を作ってくれたんだ。糸を引けば薬の筒が開くようになってる。擬蝙蝠は僕も知っている薬だったから、すぐに反応できたしね」
「……っ、気付け薬で正気を保ったと……!?」
翔波はうなずくと、先ほど奏珠が放った打矢を拾い上げた。
「この矢じりの毒も調べてくれたよ。神経系に作用して体をすぐに麻痺させるけど、致死量までは塗られていないって。……君に返すよ」
あの矢じりを打ちこまれれば捕らえられる。そう悟った瞬間、奏珠は間者としての気力を振りしぼって動いた。勝ち誇った笑みを浮かべ、土を蹴る。
「いいえ、今度こそ本当にさようならです。鏡作の翔波」
その言葉を最後に、奏珠は断崖の下に身を躍らせた。

「しまった、自害……!」
翔波が谷底をのぞいたとき、奏珠の体は既に激流にのみこまれていた。捕らえて情報を引き出したかったのに、あれでは死体が見つかるかも怪しい。完全に「さようなら」だ。
(でも、閣下の命じた意味で奏珠に勝ったのは確かだ。これで二人を追いかけられる!)

翔波は二秒で開き直った。今は急ぐのだ。
ところがせわしなく丸木橋を渡ろうとしたとき、聞き覚えのある声がかかった。
「――鏡作の!?　なんだ、今の騒ぎは！」
振り返れば、春怜がたった一人で茂みをかき分けてやってきたところだった。
翔波の堪忍袋は一秒しかもたなかった。
「どうして来たんですか、陛下！　馬鹿ですかあなたは！」
この忙しいときになぜ次々妨害に現れるのか！　苛立ちのままに叫ぶと、春怜も叫ぶ。
「馬鹿でないから来たんだ！　冬惺たちが千紗を追って飛び出したということは、千紗が危険だということだろう。愛娘を敵方にさらわれてじっとしていられる父親がどこにいる！」
状況から冬惺と同じ結論に達したらしい春怜に、翔波は力いっぱい怒鳴り返す。
「だからって陛下まで単独で飛び出してきてどうするんです！　いいですか、あの間者はたった今目害しました。残りの敵も千紗さまもこちらに任せてください。あなたは帰れ！」
（真羅とか綺理の降神術とか、いろいろ見られるわけにはいかないんだよ！）
焦りのあまり礼儀やらなにやらを頭から吹っ飛ばした翔波は、丸木橋を使役術で補強して一気に対岸に渡った。追いすがる春怜の目の前で、丸木橋を谷底に蹴落とす。
「なにをする、鏡作の！」
「申し訳ありません、陛下。このお詫びはたぶんあとで閣下がします！」

向こう岸に取り残された春怜の抗議を背に、翔波は冬惺たちを追って走る。
照破の力を秘めた彼の銀の右目には、前方に渦巻きつつある強い湿ノ力が映っていた。

丸木橋で翔波と分かれたあと、綺理と冬惺は道にそって岩場へと走っていた。
頭上を枝が差し交わし、葉の影が落ちる薄暗い道だ。——人に見られる危険があるので、どうせまだ降神術は使えないのだが、日なたが見当たらなくて不安になる。
奇妙に静かな森の奥に入っていくと、やがて二人は洞窟にたどりついた。
（この洞窟を抜けたところに、星読花の咲く岩場と狩り小屋があるって話よね。紅楓方の手の者が潜んでいるとしたら、立てこもれて逃亡用の物資も補給できる狩り小屋……）
綺理は巾着に入れてある武器——幻覚薬や催眠薬の玉を確かめると、冬惺と目を見交わす。
慎重に洞窟に足を踏み入れると、じめじめした空気が肌に絡んだ。
微発光性の苔の生えた洞窟内を半ばほど進んだところで、綺理ははっとした。
（千紗姫、明花さま！）
捜し求めていた二人の少女が、洞窟の中に倒れていた。どちらも拘束されている様子はなく、離れた場所に一人ずつ転がされている。周囲にほかに人影はない。

「千紗！　明花姫！」

綺理と冬惺は慌てて二人のもとへ走る。

――そのとき綺理が明花のほうに足を向けたのは、冬惺が明花に駆け寄る場面を見たくないという思いがとっさに働いたからだ。

千紗に駆け寄った冬惺が安堵の息をつく。綺理はそれを背中に聞きながら、眠っているだけらしい明花のもとに膝をつき――次の瞬間、自分の目を疑った。

「――っ!?」

明花が赤褐色の両目をかっと見開き、跳ね起きたのだ。

反応できる速度ではなかった。綺理の体に明花の腕が絡みつく。綺理はすさまじい力で立ち上がらされ、あっという間に両腕をひねり上げられた。

「綺理!?　明花、おまえ……っ」

「動かないでくださいませ、冬惺さま」

綺理の背後で明花がぴしゃりと言う。彼女は左手一本で綺理を拘束し、いつの間にか抜いた短刀を綺理の喉元にぴたりと当てていた。冷たい、刃の感触。

（なに……？　いったいどうなってるの……？）

綺理は事態をのみこめぬまま、凍りついた瞳で冬惺を見た。

冬惺は気を失った千紗のかたわらで、愕然とした顔でこちらを見つめている。

「冬惺さま、お腰の太刀をこちらに放っていただけます？　綺理さまのお顔を滅茶苦茶にされたくはないでしょう？……そうそう、素直で嬉しいですわ」

明花は冬惺の投げた太刀を片足で踏みつけ、鈴を転がすような声で笑った。その声は確かに明花のものだ。誰かに操られているという虚ろな様子もない。――だけど、おかしい。

「あなた、明花さまじゃない……？」

深窓の公女とは思えぬ動きと腕力を示した少女に、綺理は問う。

返答は、少女の全身を包んだ群青色の淡い光でなされた。空気がさらに湿り気を増す。

「その光、大淵妖か！」

驚愕の声に、明花の姿をした少女は大淵妖としての本性を見せたまま笑った。

「お話が早くて助かりますわ、真羅さまの《契約者》さま。――私は妖王陛下の命により淵海の深淵より来たりし大淵妖、『幻惑を招く者』幻招です」

――明花は奏珠に利用されていただけの、なにも知らない姫だと思っていた。冬惺に恋する瞳も本物だと思っていた。それが、なぜ。

「……いつから入れ替わっていたんだ」

冬惺のかすれた声が綺理の耳にすべり入る。その耳元で、幻招がまた笑った。

「今日は、明花がそこの王女さまと花狩りに出かけてから。吊り橋のところで明花と王女さま

を眠らせてね。明花は狩り小屋の中にいますわ。ああ、あの随身たち？　邪魔だから始末しちゃいました。どうせ紅楓の手の者なんて、明花にはもう要りませんもの」

あっけらかんと言った幻招に、冬惺は質問を重ねる。

「《契約者》は明花なんだな。その姿は……おまえは王宮にも入り込んでいたのか？」

「ええ。私は《契約》相手の姿を写し取る力がありますの。見事でしょう？　もっとも瞳の色は嘘をつけないので、《契約》の勾玉が明花の瞳と似た色の瑪瑙で助かりましたけど」

言われて、綺理は明花の瞳の色を思い出す。いつも同じ色――ではなかった気がする。

「質問攻めも面倒ですし、最初からお話ししましょうか？　明花が私と《契約》したのはこの前の満月の夜ですわ。奏珠が『願いを叶える秘術』のつもりで明花に方法を教えたのです。……明花の信頼を確かなものにしたかったのかしらね。夜中に淵海のほとりまで連れ出すなんて、あの子も大胆なこと」

（初めて明花さまに占ってもらった日……満月があかがね色だった！）

綺理の頭の中で情報がぱちぱちと組み合わさっていく。

奏珠は紅楓方の間者。紅楓家領にいた頃に、刹利と面識があってもおかしくない。刹利はかつて綺理たちを騙したように、秘術と称して奏珠に《契約》方法を教え、勾玉を渡したのだ。

「でも念願の地上に来てみれば刹利はもう滅んでいるというから、苦労しましたのよ？　妖王万宵さまのご命令で淵妖を集めようにも、私一人ではなかなか動けなかったんですもの。《契

約》に縛られたままの身では力の制約も大きいですし」

幻招は肩をすくめると、愚痴混じりに語った。

幻招は明花と奏珠に暗示をかけ、《契約》ではなく秘術だと思いこませた。自分のことも秘術で創られた分身だと明花に信じこませ、時折彼女と入れ替わって行動していたのだという。

「なら、私や冬惺と会っていたときの明花さまは……」

「ほとんどが私。本物の明花だったら、綺理さまにあんなに強気ではいられませんわ。明花は綺理さまを恐れていたんですもの。『私なら魔性の薬師の怪しい術から、あなたと冬惺さまを守ることができますよ』と言っただけで、身代わりを頼んできたくらい」

それではこの大淵妖は、王宮に侵入して何食わぬ顔で人前を闊歩していたのだ。

(知り合いが偽者に入れ替わっていても、誰も気づかなかったなんて……)

翔波が一度でも見ていれば正体を見破れただろう。だが彼は右目が人ならぬ銀に光っているところを見られるわけにはいかないので、人前では照破の力を使わないようにしているのだ。

(待って。幻招が裏事情をぺらぺら話すってことは、もう正体を知られてもかまわないくらい計画が進んでいるか、私たちの口を封じるつもりだからなんじゃ……)

綺理は喉元の短刀を意識して、ごくりとつばを飲んだ。その背後で幻招が続ける。

——幻招が乾ノ力の強い王宮にいるには、人間に擬態するしかない。そうすると暗示などの力を使えるのは《契約者》に対してのみで、あとは本物の明花と同等の働きしかできない。だ

から奏珠を利用したのだという。凶事の占いを出して、綺理を害するよう仕向けたのだと。

「でもあの子、役立たずでしたわ。暗殺には失敗するし、せっかく隙を作って逃がしてあげたのに綺理さまより銀髪の従者さんを追いかけているし」

「……では紅楓方暗躍の情報を流したのもおまえか。暗殺が紅楓方の仕業だと気づいてもらえなければ、《契約者》の明花に不利益が生じるから。だがなぜ、そこまでして綺理を――」

冬惺は、自分の言葉にはっとしたように瞠目した。次いで琥珀の瞳を怒りで燃え立たせる。

「それが《契約》時の明花の願いだからか。綺理を害することが！　あの女……！」

「いいえ。綺理さまの排除は単なる手段。明花が望んだのはあなたですわ、冬惺さま」

幻招は綺理の喉元に当てた刃を見せつけながら、禍々しい笑声を立てた。

「明花の願いは、冬惺さまを自分のものにすることなのですわ。ですから冬惺さま、明花と結婚して私の《契約》を完了させてくださいな。でないと綺理さまはお返ししませんわよ？」

最初は千紗姫を人質にするつもりだったけど、せっかく綺理がここに来てくれたのだから。楽しそうにそう言う幻招に、冬惺は怒りの炎が脳裏を白く灼くのを感じていた。

その怒りが幻招に対するものなのか、ろくでもない願いで《契約》をした明花に対するものなのか、守ると言いながらむざむざ綺理を人質に取られた自分に対するものなのかはわからな

い。ただ激情が全身を満たし、体が熱い。

「綺理さまはここで淵妖に襲われて死んだことにして、あなたは明花と結婚するの。じきに王都は、私の操る淵妖たちで滅茶苦茶になるもの。混乱して弱体化した瑛国が、琅公国とのつながりを強めようとしてもおかしくないでしょう？　そうして私を《契約》の鎖から解放してくれたら、綺理さまを返してあげますわ。断ったらこの子がどうなるか、わかるでしょう？」

群青の淡い光をまとった幻招が、短刀の切っ先を綺理の眼球の前でちらつかせる。

――淵妖は、ほかの大淵妖の《契約者》を手にかければ理に触れて淵海に戻される。だが殺しはしなくても痛めつける方法はいろいろあるのだ、と言いたげに。

「と……う、せい……」

綺理の碧玉の瞳が恐怖に染まるのを見て、冬惺の身中で凶暴な感情がうずいた。

「――綺理を放せ。その取り引きは成立しない。おまえが綺理を傷つけたりさらって逃げたりしたら、俺は明花を殺す。《契約者》が死ねば、おまえは綺理を害する間もなく淵海に還るはずだ」

低く断言すると、幻招はさすがに驚いたようだった。

「そんなことできるわけ――」

「ないと思うか？　一国の公女だろうと関係ない。それで綺理が助かるのなら、俺はためらわずに明花を殺す。《契約者》の死で淵海に還されるくらいなら、《契約》の完了をあきらめて少

しでも長く地上にいる道を選んだほうが得だろう。――今すぐ綺理を放して失せるがいい」

冬惺は冷酷に言い切った。綺理は交渉のためのはったりだと思って口を挟まずにいるようだが、この殺意は本物だ。今なら自分は、この怒りだけで手を血に染められる。

睨み合いが続く。幻招が迷うようなそぶりを見せる。

このまま綺理を放してくれと、冬惺は祈るように思う。

だがその果てに幻招は禍々しい笑みを浮かべ、綺理の腕をねじ上げる手に力をこめた。

「痛っ……」

「仕方ありませんわね。その場合は配下の淵妖に綺理さまを喰い殺させましょう。万宵さまの命を果たせぬまま地上を去るのは残念ですが……真羅さまの《契約者》を一人でも減らせたとなれば、万宵さまにも申し訳が立ちましょうし」

（……っ！）

心理戦に勝ったのは幻招のほうだった。

幻招が綺理を抱えこんだまま移動しはじめるのを見て、冬惺は戦慄した。

「待て、綺理を返せ！」

冷然とした仮面がはがれる。思わず駆け寄りそうになり、綺理の右目に突きつけられた短刀の煌めきに足を止めた。――なにもできない。途方もない無力感が冬惺を襲う。

「やだっ、放して！　冬惺、冬惺――！」

綺理がもがいたが、幻招は群青の光の縄で彼女の抵抗を封じた。綺理を連れて洞窟の壁のほうに寄り、目に見えない扉の向こうに行くかのように身を翻す。

「それほど綺理さまが大事なら、できるだけ早く明花と結婚することですね。私が焦れて、この子を切り刻んで遊びたくなる前に。では私の《契約》が完了した暁に、また――」

幻招が嗤う。淵妖の通り道を使って姿を消されたらもう追えない。綺理をさらわれる。綺理を奪われる。――俺の綺理を！

「行くな！　頼むから綺理を返してくれ！　なんでもするから……っ」

誰か助けてくれ、と。そのとき脳裏に思い描いたのは誰の姿だっただろう。

「冬惺！」

「綺理――っ！」

その血を吐くような絶叫に応えて、

「――まったく、私の《契約者》たちは世話が焼ける」

澄んだ浅葱色の光が、冬惺の視界を切り裂いた。

――ああ、そうだ。どうして忘れていたのだろう。ずっと前からいつも、窮地に陥った冬惺たちを助けてくれたのは彼だったではないか。

淡い光をまとった童子が幻招の眼前に現れ、短刀を持った手をひねり上げる。
「幻招。私の《契約者》に手を出すとは、君もいい度胸をしているな」
「真羅さま!?」
動転した幻招の手から綺理が離れる。それを見たときには、冬惺はもう動いていた。
「冬惺！」
身を低くして地面を蹴る。綺理がすかさずこちらに蹴り飛ばしてくれた太刀をつかみ取る。
幻招たちのもとに駆けながら、抜刀する！
冬惺は綺理と幻招の間に飛び込み、綺理に絡みついていた群青の光の縄を断ち切った。
返す刀で幻招を狙う。幻招は寸前でよけると、大きく後退して冬惺たちから距離を取った。
冬惺は綺理を背にかばうように立ち位置を変え、肩ごしに見やる。
「綺理。……よかった、無事で」
「……うん。よかった、冬惺も」
綺理は立ち上がりながら顔をほころばせた。光の縄は消えている。幻招から逃れたときに転んだ以外はまったくの無傷だと見て取って、冬惺はようやく激情の炎が鎮まるのを感じた。
――彼女は無事でいる。ちゃんとこの手が届くところにいる。
「二人とも、ありがとう」
綺理の言葉に重なって、真羅が冬惺の隣にふわりと降り立った。

隣だ。こんなときに真羅が自分の隣にいるのは初めてだ。冬惺はふとそんなことを思う。

「――真羅」

名を呼ぶ。だが礼を言う言葉は慣れなさすぎて、喉の奥で引っかかった。

真羅はそんな冬惺を見上げ、張り詰めた声でささやく。

「様子を見にきてよかったよ。だがね、代わりに私の引き付けていた淵妖の群れがこちらに向かって動き出した。ここであの大淵妖の相手をしていられる時間は、あまりないのだよ」

早口の警告に、冬惺は気を引きしめた。洞窟の向こう端で身構えている幻招に向き直る。

幻招は真羅を睨みつけ、憎々しげに叫んだ。

「現れましたか、真羅さま。万宵さまに反逆せし異端の分身、すべての同胞を裏切りし者！」

対する真羅は表情をがらりと変え、酷薄な笑みを浮かべる。

「私が淵海にいた頃以来だね、幻招。お久しゅう。そしてもうすぐ、さようならだ」

「別れの挨拶は不要です。――万宵さまの命により、あなたを捕らえさせていただきます」

「おや。《契約》に縛られて力も満足にふるえぬ身で、この私をどうにかできるとでも？　身の程をわきまえたまえよ、幻招」

真羅は傲慢に返したが、もし本当に彼が応戦すればこの地は泥の海になりかねない。先刻の物言いからすると、冬惺たちと《契約》中の真羅も多少なり力を抑制されているということになるが、それでも彼にはそれだけの力があるのだ。戦おうとすれば莫大な湿ノ力をまき散らし

てしまう以上、実質、真羅には大淵妖に対抗するすべがない。
――だがそれも、冬惺と組めば話は別である。
冬惺は太刀を握りなおすと、背後の綺理に小声で指示する。
「綺理。千紗を頼む」
千紗は三人から離れたところに倒れている。もし彼女を人質に取られたら元も子もない。
幻招が右手のもとで湿ノ力を練り上げ、群青の光を渦巻かせる。明花の姿のまま、装束の飾り紐を湿った風に煽らせて言う。
「真羅さま」
「真理を網羅する者、真羅」
名を呼ぶ声は、幻招と冬惺とでちょうど重なり、
「――おとなしく縛につかれませ！」
群青の光の縄が放たれたそのとき、全員が動き出した。
綺理が千紗のもとに走る。真羅が浅葱色の光をまとう。そして冬惺が、太刀を構えて叫ぶ。
「――憑りつけ！」
真羅の姿が瞬時に太刀の中に消える。直後、冬惺は突き進んできた光の縄を薙ぎ払う！
刃が触れただけで光の縄が消滅する。冬惺は真羅の憑いた太刀をすぐさま翻し、まさにこちらに飛びかからんと迫っていた幻招に斬りつけた。

「な――！」

水面を叩くような音。

幻招の目が限界まで見開かれる。湿ノ力をまとわりつかせた右腕が、なんの抵抗もなく斬り飛ばされたのだ。腕は紺碧の泥になり、またたく間に大地の下の淵海にのみこまれる。

さらに太刀から浅葱色の光が放たれ、幻招の体を弾き飛ばした。

「！　これは……っ、真羅さまの御力!?」

後方の岩肌に叩きつけられた幻招は、冬惶の手の中で淡く光る太刀を凝視する。

――淵海還しの水の太刀。

真羅の力を宿して水のように透き通ったその刃は、淵海より来たりしものを還す力を秘める。ただし連続して長時間使うには使用者の負担が大きすぎるので、真羅は一旦太刀から離れた。太刀から浅葱色のもやが噴き出し、再び童子の姿になる。

「真羅。大淵妖は一太刀浴びせただけでは淵海に還らないのか？」

「さすがに雑魚淵妖とは格が違うのでね。あれを丸ごと還すには、核の勾玉を斬らねば」

「……その勾玉の位置は？」

「さてね。斬り続けていればいずれ当たるのではないかね？」

「時間があまりないと言ったそばから――、っ！」

泥の体を練り直して新しい右腕を作った幻招が、何本もの光の縄を放ってくる。

冬惺と真羅の間に叩きつけられた湿ノ力の縄を、二人は互いに跳びすさってよけた。
ほかの縄は彼らの脇を流れ、千紗の倒れているほうに向かう。
（千紗！　綺理！）
思わず目で追った冬惺は、綺理が千紗を抱えて光の縄の軌道から逃れるのを認めた。だが縄の数が多い。彼女がかわしきれなくなる前に、冬惺はそちらへ走った。
光の縄がぐにゃりと曲がり、一斉に綺理の背後を狙うのを見て、叫ぶ。
「伏せろ、綺理！」
即座にうずくまった綺理。その頭上を、冬惺は横一文字に斬り払う。
玻璃を砕くような音がして、群青の光の縄が散じて消えた。真羅が太刀に憑いているときと違って、冬惺の腕にびりびりと振動が伝わってくる。その真羅は――。
「冬惺、真羅が！」
顔を上げるなり言った綺理に、冬惺は振り返る。
幻招が群青の光に紛れて真羅との距離を詰め、彼の首に手をかけていた。左手一本で首をつかんで小さな体を洞窟の壁に押し付け、高らかに笑う。
「あなたは淵海を思い出すべきです。いびつな魂を捨てて、真の妖王陛下に戻るべきです！」
その言い回しに、冬惺の脳裏に閃くものがあった。
――淵妖にじかに触れると淵海にいた頃の記憶が呼び覚まされ、本体の心に引きずられそう

になると。真羅はかつて、そう言っていなかったか。

幻招の右手が真羅の左胸に当てられ、翡翠の瞳が苦痛に歪む。その様に、冬惺の胸中である感情が湧き起こった。不安ではない。恐れではない。おそらくは、怒りだった。

「貴様……っ。――真羅を放せ!!」

衝動的な叫びに、真羅が笑みを浮かべた。彼はその瞳に強い光を宿らせ、幻招を見返す。

「……無駄だよ幻招。どれほどあの頃の記憶を呼び覚まそうと、もう無駄なのだよ。今の私の胸にはもっと確かなものが在る。――そろそろ君は、地上の妖王への礼を知りたまえ!」

「――――っ!」

真羅の胸に沈みかけていた幻招の手が、衝撃を食らったかのようにはね返される。

そこに冬惺が駆けつけ、太刀を振りかぶった。

「その手を放せと言った!」

刃を振り下ろす。幻招は両腕を断たれる前に真羅から手を放し、ぎりぎりで跳びすさった。

冬惺はすばやく半身を返し、真羅を背に太刀を構えなおす。

――その一瞬、視界の端で銀の光がまたたいた。

目が引き寄せられる。冬惺は見覚えのある光を追い、洞窟の入り口に一つの人影を見た。

薄暗がりの中で輝く、銀の右目。

(……おまえ、ちゃんと勝って追いついてきたのか。よくやった)

視線が交錯し、互いにふっと微笑む。そして翔波が声を張り上げる。
「閣下！　勾玉は左の脇腹――帯紐の結び目の下です！」
冬惺は笑みを深くした。蒼白になった幻招に向き直り、大きく踏み込みながら名を呼ぶ。
「憑りつけ、真羅！」
一刹那のうちに真羅が応え、太刀が浅葱色に染まる。幻招が群青の光を練るよりも早く、教えられた場所を斬る！
玉と鋼が打ち合う、澄んだ音がした。
声もなく、幻招の姿が紺碧の泥の柱に変わる。
泥の柱はどしゃりと崩れ落ち、見る間に淵海に還った。一滴残らず泥が吸い込まれていったあとの地面に、真っ二つに斬られた赤瑪瑙の勾玉が落ちる。
「やった！」
綺理が歓声を上げ、千紗を抱いて駆け寄ってきた。冬惺は太刀を鞘に納めて千紗を受け取り、続いてやってきた翔波をねぎらう。
つかの間のほっとした時間。それから冬惺は、太刀から離れて勾玉を拾っている真羅を見やった。なにか言葉をかけたほうがいいような気がするが、思いつかない。結局、真羅が幻招の勾玉を己の左胸に当てて溶け合わせているのを見て、問うまでもないことを言う。
「……淵妖にとって、ほかの大淵妖の勾玉は力になるのだったか」

「そう。だからそういう意味でも、私の勾玉をほかの大淵妖に奪われるのはまずいのだよ」

真羅がこちらを見上げる。彼の翡翠の瞳と、冬惺の琥珀の瞳が出会う。冬惺は前に喉の奥に引っかかった言葉を口にしかけて、また口を閉じた。視線をはずす。

「……礼は言わない。おまえはおまえの理由で俺たちを助けただけだ。だが」

だが、と付け加えてしまったせいだろうか。続けて、うっかり本音がこぼれ出た。

「――おまえがいてくれてよかったと思っている」

つぶやいたあとで、あまりの自分らしくなさに、今の台詞を全員の記憶から抹消したくなった。綺理と翔波が目を丸くしているのがいたたまれない。

それにこの大淵妖のことだから嬉々としてからかってくるに違いない。そう身構えていたら、予想に反して真羅は心から嬉しそうに微笑んだ。彼は約束をするような真摯な声音で応える。

「トウセイ。君たちがそう思う限り、私は君たちと共に在るよ。――私も、《契約者》が君たちでよかったと思っている」

らしくない。お互いに、本当にらしくない。綺理ならともかく、まさか自分がこんな恥ずかしい会話をこの大淵妖とする日が来るなんて。悪くはないが――そう、決して悪くはないのだが、決まりが悪い。

(……少なくとも、これに慣れる日は絶対に来ない)

すさまじい居心地の悪さに、冬惺は憎まれ口で誤魔化そうとしたが、その必要はなかった。

不意に、洞窟の出口のほうから、湿った風が重く吹き寄せてきたのだ。
人には聞こえぬ声をとらえたのか、真羅と綺理が同時に顔色を変える。
「もう来たのだね。――君たち。幻招を倒しても、一度集った淵妖は止まりはしないのだよ。急がねば淵妖の群れが森を抜けて王都に押し寄せる！　止められるのは、キリ、君だけだ！」
真羅の言葉に、再び緊迫感が走る。
互いの状況を教えあうのは移動しながらにすることにして、全員は洞窟の出口を――光射す岩場を目指して走り出した。

「帰命したてまつる――」
岩場を見下ろす斜面の上に出た綺理は、右手を太陽にかざした。
〈行クゾ〉〈行クゾ〉〈我ラガ王ノタメ――〉
眼下では淵妖の大群が、紺碧のうねりとなって打ち寄せてくる。湿った風が斜面を這いのぼり、綺理の右手に生まれる乾いた風とぶつかる。
「天の灯明より分かたれし、金色の翼にて舞える者、雷霆の咆哮を従えし乾ノ眷属に」
詠唱する綺理の隣には、太刀を構えた冬惺が守るように立っている。真羅は乾ノ神衆の降臨

の場をさけて姿を消しているが、彼もいつでも太刀に憑けるように近くにいるはずだ。
後ろでは、千紗についている翔波が乾ノ術を放ち、淵妖を牽制している。
「謹んで願わくは、真赤き日輪のかけらを鎧い、万雷を紡ぎし灼熱の剣をとり――」
自分はこんなにも守られているのだと、改めて思う。なんと心強いことだろう。みんながいてくれる。みんなで立ち向かえば、なににも負けないと思える。
体の奥底からこみ上げてきた熱い思いを詠唱に乗せて、綺理は右手を振り下ろした。
「天の雷窟より降臨したまえ――大天火雷金翅明王！」
紅と金の炎の螺旋が、眼前に燃え立つ。
「――私を求めたか、我が姫」
低い美声。炎の柱が、瞬時に鎧に身を固めた乾ノ神衆になる。降臨した火雷明王は背後に迫る淵妖の気配を察し、金色の炎の翼を大きく広げた。
まさに綺理たちに飛びかかろうとしていた数体の淵妖が、乾ノ力の塊たる翼に阻まれて砂と化す。淵妖の大群が気圧されたようにうねった。
「ここはあの妖道の森か。これほど淵妖が集っていようとは。撃滅するか、玉造の綺理」
綺理は大きくうなずいた。腰の剣をすらりと抜く。
「はい、御力をお借りします。――大天火雷金翅明王、宿ってください！」
「我が姫の意とあらば」



火雷明王の姿が再び炎の螺旋に変じ、綺理の剣の中に吸い込まれた。剣は乾ノ力を宿して紅の光を帯びる。真羅の憑いた水の太刀と対のような存在――淵妖殺しの火の剣だ。

火の剣を手にした綺理の姿に、斜面を覆う淵妖の大群がどよめいた。

〈気ヲツケヨ〉〈気ヲツケヨ〉〈アレヲ見ヨ〉

〈アレハ〉〈アレハ〉〈金蘭ノ剣〉〈金蘭ノ剣ノ後継者！〉

淵妖の声が響く中、それとは別に綺理の脳裏で火雷明王の声がする。

『私の宿った剣は我が力の写し。祈り、願うがいい。乾湿の均衡を保つ、調停の力を』

（調停の、力……）

強大な湿ノ力は地上を泥に沈め、強大な乾ノ力は地上を焼き滅ぼす。地上の均衡を保つために必要なのは、岩場や森を焼き尽くすほど強い力ではない。

綺理は火の剣を静かに横に構えた。再びどっと押し寄せてきた淵妖の大群に、冬惺と翔波が緊張を走らせたが、綺理は動じない。目を閉じて心を静める。

〈討テヨ〉〈討テヨ〉〈金蘭ノ後継ヲ！〉

自分目がけて襲いかかってくる淵妖の先鋒を、冬惺の太刀と翔波の術が防いでくれるのに任せ、火の剣の中に廻る乾ノ力に意識を集中させる。祈りによって乾ノ力を練る。

――やがて。

綺理は目を開いた。眼下の淵妖の群れへと、火の剣を真横にすべらせる。

凍れる炎のようなその刃から、金色の光がほとばしった。
ゴゥと熱風がうなり、光を浴びた淵妖が次々に乾いて砂となる。土器の砕ける音が連鎖していき、紺碧の泥の津波があっという間に引いて散っていく。
しかし木々が燃えることも、地が干上がることもない。
光が消えたときには、綺理たちの前には穏やかな岩場と夏の森が広がっていた。

残りの淵妖が逃げ散ったあと、剣の中から火雷明王が陽炎のように現れた。
彼は翼を広げて中空に浮かび、綺理たちを見下ろす。
「――我が姫、見事なり。おぬしが己の炎に身を焼かれることはもうなかろう」
「ありがとうございます。お力添え、感謝します」
綺理が礼を言うと、火雷明王は金色の瞳をほんのわずか和ませた。
「礼には及ばぬ。だが願わくは、またおぬしとゆっくり話す時間を持ちたいと思う。――ではな、また会うときまで。我が姫、冬の少年、鏡の少年」
そう言うと、火雷明王は光に溶けるようにして天上に帰っていった。
綺理たちは顔を見合わせ、誰からともなく息をつく。
「やっと終わったね……」
紅楓方の陰謀を暴き、奏珠を倒し、幻招を淵海に還し、淵妖の群れを討滅して、ようやくす

べて落着した。あとは千紗と、近くの狩り小屋にいるという本物の明花を連れて帰るだけだ。

「千紗さまたちが乗ってきた馬も見つかるかな。さすがに、おんぶしたままあの道を帰るには疲れすぎたよ。そうだ、それに橋も落としちゃったから、別の道を探さないと――」

言いながら、翔波が千紗を抱き上げようと地面に膝をつく。

まさにそのときだった。

「――全員、動くな」

冷ややかな声がした。

綺理たち三人は弾かれたように顔を上げ、来た道を振り返る。

洞窟脇の岩のそばに一つの人影がある。人影がゆっくりとこちらに歩いてくる。

「なるほど、鏡作のが私にあとを追わせまいと必死になるわけだ。我が従妹が降神術の使い手だったとはな。――さて冬惺、これはどういう状況だ？」

瑛国王、春怜だった。

「……兄、上」

冬惺が呆然とつぶやいた。雷に打たれたように凍りついている三人に、春怜は淡々と言う。

「金の炎の翼の明王、大天火雷金翅明王だったな。初代志輝王の妃にして王家の名の母、金蘭王妃が招請したのと同じ神衆か。まさに瑛国の王妃となるにふさわしい資質だな、綺理」

（ばれた……。降神術を使えることが……それを隠していたことが！）

綺理は自分の顔面から血の気が引くのを感じた。

真羅の姿は見られていないようだが、それでも決定的な場面を目撃されたことには違いない。以前冬惺は火雷明王に対し、降神術の件が露見したら厄介ごとが降りかかるのは綺理だと言った。だが違う。このことが露見して本当に危険なのは、冬惺なのだ――。

春怜は冬惺の間合いの外で立ち止まった。琥珀の瞳を険しくし、末弟を見すえる。

「おまえが綺理を連れて北部に行ったのも、降神術という切り札があったからだな。いつから知っていた？」

「……六年前、綺理が初めて降神術を使ったときからです」

「長いな。それほど長く私に隠していたのか。――これは反逆だぞ、冬惺」

反逆。重い言葉に綺理はぞっとした。翔波が焦ったように叫ぶ。

「お待ちください。この件を秘匿するよう閣下に進言したのは私です！　咎は私だけに――」

「翔波！」

「鏡作の。この私を、その程度の嘘も見破れぬ愚王と思ってくれるな。冬惺、この件を秘密にしていたのはおまえの一存だな？」

春怜は翔波をさえぎり、確信をこめて問うた。冬惺は観念したような表情で肯定する。

「そうです。綺理と翔波には俺が口止めしました」

「降神術の使い手の女性は王妃となるさだめ。裏を返せば、血筋が不確かで乾ノ術を使えないおまえでも、綺理を妻とすれば王位を主張できる。そしておまえは、綺理との結婚に固執していたな。簒奪の準備と――この私への反逆の意志ありと見なすだけの材料はそろっている」

「……わかっています」

「冬惺！　春怜陛下、冬惺がそんなことを考えるはずないでしょう！　冬惺は――」

綺理は動くなと言われたのも忘れて、二人の間に飛び込みそうになった。冬惺に制止されて渋々立ち止まったが、唇をかんで春怜を睨む。冬惺の味方だと信じていた人を。

――だが一番睨みつけたいのは綺理自身だ。冬惺がほかでもない兄王から疑いをかけられているのは、綺理の力のせいなのだから。

春怜は綺理から目をそらし、確かな怒りを含んだ声で言う。

「弁解の一つもないのか、冬惺。私はおまえを信頼していた。……なにか言いたいことがあるなら言うがいい」

その言葉に、冬惺は腰の太刀に手をやった。しかしそれは、決して抵抗するためではなく。

「……六年前から、疑われて当然のことをしていた自覚はあります」

太刀を鞘ごとはずして春怜の足元に放り、ひざまずく。乾ノ神衆に対してすらへりくだらない彼が、唯一膝を折る相手の前に。

「ですが兄上。誓って、俺は春怜兄上に叛意を抱いたことはありません。俺は決して、兄上に

向ける刃を持たない。降神術のことを明るみに出して綺理の力を利用するつもりもない」

春怜は太刀に触れずに弟を見下ろす。綺理と翔波が息を詰めて見守る中、冬惺は続けた。

「もし俺の誓いが信じられないのなら、俺が兄上に反逆できないよう俺自身の価値を消してください。護国大将軍の位と、白桜の冬惺の名を。どちらも兄上に与えられたようなものですから、兄上が取り上げるというなら俺は抗いません。――ただ、どうか一つだけお願いします」

冬惺は顔を上げ、兄をまっすぐに見上げる。

「綺理を政略の道具にしないでください」

（――――）

綺理は息を詰まらせた。胸がつかえて、言おうとした言葉がすべてせき止められる。

春怜がわずかに目を見開き、「おまえたちは揃いも揃って……」とつぶやく。

「確かに降神術の使い手には、政略の道具にするだけの価値はあるな。儀礼的でも王妃に迎えれば、王の権威はこの上なく増す。古き貴族を屈服させるにはなによりの道具だ」

王の権威は絶対であるべきだと言うのなら、春怜が降神術の使い手を見逃すはずがない。

けれど春怜は、不思議に落ち着いた目で冬惺を見返していた。

「ではおまえがこの件を秘密にしていたのは、綺理を守るためだと？」

冬惺は「はい」と答えかけて、口ごもった。己の心に問いただすように沈黙し、それから、ひどく無防備な表情になる。

「いいえ、自分のためです。……俺が、兄上に綺理を取られたくなかったからです」

（――――冬惺!?）

なにを言い出すのかと綺理は仰天した。この状況で口にするには危うすぎる台詞だし、そもそも今のはいったいどういう意味で受け取ればよいのか！

不安でどきどきしていた胸が、別の理由でさらに速く鼓動を打ちはじめる。

慌てる綺理のそばで、冬惺は子供に返ったかのような顔でとつとつと言葉を重ねた。

「もし兄上が俺から綺理を取り上げようとしたら、俺は兄上に背かなくてはならなくなる。それは困ります。俺に確かな居場所をくれた兄上に背くのは、本当に嫌だから……困る」

嘘もおためごかしもないその言葉に、春怜は目を細めた。昔を思い出したような、懐かしげなまなざしだった。一人の『兄』としての顔になり、静かに言う。

「……私に背くのは嫌、か。おまえなら、もっとそれらしい綺麗ごとを並べて言い逃れられそうなものを。――だが今回は、その正直さに免じよう」

言うと、彼は「立て」と冬惺に顎をしゃくった。太刀を拾い、冬惺に投げ返す。

「……兄上？」

「白桜の冬惺。おまえはこれからも私の剣だ。剣が刃を手放すな」

それが護国将軍の位のことだと気づいて、冬惺は目を瞠った。彼と綺理の横をすり抜け、春怜は翔波のもとへ歩む。

「いくら降神術の使い手でも、それが玉造の綺理では意味がない。私としても、綺理を妃にと推されるような事態になったら困るからな。大事な弟に嫌われた挙げ句に、影珀叔父に外戚としてこれ以上大きな顔をされるのでは、むしろ貧乏くじだ」

「それじゃ、春怜陛下。私の力のことは……」

「私一人の胸に収めておいてやる。――が、一つ条件がある」

春怜は、翔波のかたわらに倒れている千紗を優しく抱き上げ、真面目くさって言った。

「秘密を守る代わりに、私が千紗を悪漢から颯爽と救い出したことにしろ。このままでは父親の立つ瀬がなくなりそうだからな」

綺理たち三人は顔を見合わせ、誰からともなく頬をゆるめる。口々に「わかりました」と答えた三人に、春怜はやれやれと言いたげに笑み、そうしてふと真剣な目つきに戻った。

「冬惺。おまえは、私が本気でおまえを疑ったと思ったか？」

「……いいえ。もし兄上が本気で俺を疑っていたら、兄上は真っ先に千紗を手元に取り戻そうとしていたでしょう。ですが、俺の誓いは本気です」

ならいい、と春怜が肩をすくめる。その表情を見て、綺理は唐突に思いいたった。

（もしかして春怜陛下が怒ったのって、今まで秘密の共有者にしてもらえなかったから？）

彼が「私はおまえを信頼していた」のあとに続けたかったのは、「なのにおまえは私を信頼していなかったのか」という苛立ちだったのではないだろうか？

片手で千紗を抱いている春怜に、不意に冬惺が向き直った。真摯な声で、言う。
「春怜兄上。俺には、あなたに秘密にしていることがまだあります。ですがそれは、俺が兄上に叛意を持っているからでも、俺が兄上を信頼していないからでもありません。兄弟として、それだけは信じていてくれませんか」
《契約》のことだと察して、綺理と翔波はひそかに目配せする。
春怜は呆れきった顔になり、あきらめたように片手をひらひらと振った。
「……仕方ないな。だが冬惺。もしおまえが危ない橋を渡っているのなら、その秘密を私が事前に知っていなければ万が一のときかばえるものもかばえない。それだけは心得ておけ」
そう言う春怜のまなざしは、彼は冬惺の味方なのだと綺理が悟ったときと同じだった。綺理と翔波はほっと息をつく。緊張の解けた空気の中で、春怜がため息混じりに言った。
「で、妙なところで正直な嘘つき者の弟め。なにがあったのか説明してもらおうか」

冬惺は真羅のことだけは抜かして、それ以外はできるだけ包み隠さず話した。
明花が大淵妖と《契約》をしていたことも、その大淵妖が明花に化けて策謀をめぐらし、さらには淵妖の大群を呼び寄せたことも。
「明花姫が《契約者》!?……すると、待て。私が会ったときも何度かは大淵妖と入れ替わって

いたのか？　私の王宮に、大淵妖がそれほど奥まで入り込んでいたとは……」

春怜は愕然としたようだったが、こと《契約》に関しては綺理たちも十二分に後ろ暗い身だ。特に当の大淵妖を退治して明花が《契約者》ではなくなった今、あまり彼女を責められない。

「もう終わったことですよ、兄上。実害が出る前になんとか解決できたわけですし、いたずらに公表して人心を騒がせるのは得策ではありません。千紗と明花姫をさらったのは紅楓の息のかかった随身たち、ということですませたほうが無難でしょう」

冬惺はそう結論付けると、「ただし」と琥珀の瞳を光らせた。

「交換条件には使わせてもらいますがね。――《契約》をした事実を内密にする代償として、今回の縁談は明花姫から断らせます」

幻招の言葉通り、明花は岩場のそばの狩り小屋に寝かされていた。目が覚め、暗示も解けた彼女に、冬惺は兄に言った通りの交渉を持ちかける。

「奏珠が間者……。あの子が教えてくれたのは……わたくしが、《契約》を……」

冬惺の話を一通り聞くと、明花はしばらく呆然としていた。

――これまで明花は、幻招と入れ替わっていた間は自室でひそかに眠らされていた。だがそ

の間の記憶はあとから植えつけられていたため、記憶はずっと連続しており、幻招を本当にもう一人の自分だと信じて疑わなかったのだという。

「冬惺さまを害する『呪われた約定の女』が、綺理さまではなくわたくしだったなんて……」

綺理たちは外で待っているので、薄暗い板張りの小屋の中には冬惺と明花の二人だけ。戸口の際に立つ冬惺は、板間にへたりこんでいる明花に淡々と言う。

「最初から伝えておけばよかったですね。私にあなたと結婚する意思がまったくないことを。……ですがどうせ、私と結婚してもろくなことはありませんよ？　私はこのとおり黒髪で、乾ノ術も一切使えない金蘭の外れ者です。おまけに出生の疑惑もある白桜の面汚し――」

「知っております」

自虐的な台詞を、明花はさえぎった。赤銅色の瞳を潤ませ、冬惺を一心に見上げる。

「みんな奏珠が調べてきましたから、知っておりました。それでもわたくしは冬惺さまのことをお慕いしていたのですわ。《契約》も、あなたのことを想えばこそ――」

「ではなぜ自分自身で俺と向き合わなかった？」

今度は冬惺が冷ややかにさえぎる番だった。明花の前では初めて見せる、相手を凍りつかせるような目つきで彼女を見下ろす。

「自分の目でなにも見極めようとせず、秘術に頼って『分身』に俺の相手をさせておくことに、なんの疑問も持たなかったのか？　馬鹿にも限度がある。おまえは結果が欲しかっただけだ。

過程を飛ばして、運命の相手を手に入れる幸せな自分になりかっただけ。本当に俺のことが好きだったというのなら、その想いを《契約》で汚すべきではなかった」

「――――」

青ざめて声を失った明花に、冬惺は口調だけ丁寧なものに戻して続けた。

「迎えの兵が私たちを捜しに来るまでには、まだ時間があります。それまで一人で、見合いを断る理由を考えているのがよろしいかと。……もっとも考えるまでもなく、既に私に愛想を尽かしているかもしれませんがね。私はあなたが思っていたほどいい人間ではないので」

言い捨てて明花に背を向ける。戸に手をかけたところで、明花が震える声で問うてきた。

「……最後に一つだけ答えてくださいませ。……冬惺さまは、綺理さまのことがお好きなんですの？」

冬惺は手を止め、肩ごしに明花を振り返った。

「あなたが私に向けていた感情とは違いますが、誰よりも大切に想っています。――あなたは運がいい。もし綺理の身になにか起きていたら、私はあなたになにをしていたかわからない」

前を向き、戸を開ける。その背に再び声がかけられたが、冬惺はもう振り返らなかった。

「――運命ではなかったのかもしれません」

狩り小屋を出て行く彼に、明花は最後にささやくように言った。

「それでも恋をしたのは本当です。わたくしは、わたくしを決して好きになってくださらない

冬惺さまが今でも好きですわ。ですからわたくしは……あなたのために身を引きます」

奏珠の死体は発見されなかったが、明花の随身たちの死体は岩場のそばにあった。彼らが紅楓方の者であった証拠も見つかり、すべては紅楓方の陰謀として処理されることとなった。

そして、中止された狩占祭の翌々日。見合いの回答の日。

琅公国側は公女本人の希望で、冬惺への縁談の申し入れを取り下げた。

表向きの理由は「家格の不釣り合い」。だが実際は、公女が玉造の姫に負けを悟った上に、怖い思いをして早く国に帰りたくなったのだろう——というのがもっぱらの噂だった。

さらに数日後、公女の一行は琅公国への帰途につき、突然の縁談に始まるすべての騒動に幕が下りたのだった。

終章　約束の行方

青く晴れわたった空の下、綺理と冬惺は王都輪瑛の白砂の街路を連れ立って歩いていた。
「約束してから一月近く……か？　ようやく来られたな」
「うん。ずっとばたばたしてたもんね。市に行くのも久しぶり」
西市へと続く乾いた道を、綺理はうきうきと進む。
公女一行が王都を発ってから十日――。
王都には平穏が戻ってきていた。北部に行っていた乾術師も次第に王都へと帰還しはじめ、市中の乾ノ力は再び強まっている。王都に続く妖道も、真羅いわく、数多の淵妖の滅びた砂によってふさがっていたという。騒動の種はなくなり、綺理たちの周囲も落ち着いた。
おかげでようやく、市を回って髪結い紐を交換するという約束を果たすときが来たのである。
それもちゃんと二人きりで。自然と足取りも弾むというものだ。
「一時は玉造の屋敷にも足を運びにくかったがな。迷惑な縁談騒ぎが終わっておまえの侍女たちも殺気立たなくなったと、翔波が安心していたぞ」
隣を歩く冬惺も肩の荷が下りたように言った。風の渡る空を見上げ、感慨深げにつぶやく。
「やっとみんな元通り、か――」

「影珀叔父も所領に帰って、静かになったな……」

同じ頃王宮では、春怜が執務室でのんびりと書類を繰っていた。

――綺理と公女の冬惺争奪戦に形を借りた派閥争いは、すっかり鎮静化していた。

影珀が春怜に頭を下げたわけでも、春怜が影珀の顔色を気にして縁談を断ったわけでもないので、勝ち負けのないまま争点がなくなってしまった状態だ。

玉造家派は、冬惺が綺理を守ったという事実と、綺理が公女に勝ったという結果に満足して落ち着いている。反玉造家派のほうも、紅楓方に利用されていた公女をこれ以上応援する心境にはなれず、公女のほうから引き下がったことに納得している。

そして春怜自身も、この結末にかなり満足していた。

(影珀叔父は最後まで折れなかったとはいえ、今回の件で玉造家の威光に影が差したのは確かだ。おまけに琅に一つ貸しができた)

琅公国は瑛国内の争いに利用されただけ――と言えなくもないが、身内に間者が交ざっていることに気づかずに彼らを連れてきてしまったのは、琅公国側の落ち度だ。それを不問にしたことで琅公国での春怜の心証は良くなり、しかも大きな貸しになったのである。

（――不問に、といえば冬惺もか。こっちはもう少しくらい説教しておくべきだったか？）

春怜は書類を執務机に積み、ため息をついた。

もし降神術のことを秘密にしていたのが冬惺でなかったら、自分は許さなかっただろう。

そして冬惺がかばっていたのが綺理でなかったら、あんなに甘くはすませなかったはずだ。

――綺理ならば、冬惺がこの兄より大事にしていても仕方ない。頭より先に心がそう納得してしまったのは、昔を、あの弟との始まりのときを覚えているからだろう。

『冬惺を助けて！――春怜お従兄さまは、冬惺のお兄さまでしょう！』

十年前、冬惺が祖母に折檻されていると報せにきたとき、綺理はそう叫んだ。

あの頃の春怜は白桜家の当主だという自覚が薄く、冬惺のことも、じかに言葉を交わすまでは「そんな子供が同じ宮にいたな」という程度にしか認識していなかった。祖母やすぐ下の弟の夏憬が冬惺に暴力をふるっていたことも、薄々知りながら無関心でいた。

そんな春怜を『兄』にしたのは、きっと綺理だった。綺理のその言葉だった。

そうして駆けつけた大広間で、春怜は初めて当主として宣言した。この腕の中にほっとしたように倒れてきた末の弟を、兄として、当主として、守ろうと決意した。

守ってやれると、確かに思ったのだ。心ひそかに約束をしたのだ。

実際、当主の権威が盾となり、冬惺がひどい扱いを受けることはなくなった。だが陰口は絶えず、冬惺を蔑み軽んじる者はいなくならなかった。春怜が玉座に即いてさえ、古き血筋を誇

る上級貴族たちの蔑視からは弟を守れない。――今の王の権威ではまだ弱い。だから。

『王の権威は絶対であるべきだ』

……もちろん冬惺だけが理由のすべてではない。けれど、きっかけだったのは確かだ。

回想が現在に追いつき、春怜は頭を一つ振った。書類の山に手を伸ばし、いくつかの案件に目を通したが、しばらく考えてまた山に積みなおす。

「……兄弟特権で、冬惺に手伝わせればいいか」

そうしよう。冬惺が帰ったら、逢瀬の様子を根掘り葉掘り聞きだしてからかいながら、体よく仕事を押し付けよう。そう決めて、春怜は窓の外の輝くような夏空を仰いだ。

「――ああ、だが完全に『元通り』というわけでもないか」

唐突に冬惺がそんなことを言ったので、まさにその『縁談騒ぎ前と同じでないこと』を思い浮かべていた綺理はどきりとした。

今回のような騒動が二度と起きないよう、綺理と冬惺は正式な婚約式を行うことになったのだ。公女との縁談が流れた直後に婚約式、では露骨すぎるので、しばらく期間を置くことにはなっているが、いずれ綺理たちは正式な婚約者同士になる。

改めてそのことに触れられたらどう反応しよう、と綺理は内心ものすごい勢いで対応を考えていたが、冬惺はあっさりと別のことを挙げた。

「千紗だ。実は、今日綺理と市に出かけることをうっかり千紗に言ってしまったんだが、みやげをねだられただけで終わったんだ。あいつも叔父離れしてきたのか……？」

以前なら「千紗も一緒に行きたい」と駄々をこねるのに始まって、「連れてってくれないなら叔父さまも行っちゃやだ」とあの手この手で引き止めようとしていたのに。

そう言う冬惺に、綺理もそういえばと手を叩く。

「千紗姫、少しおとなしくなったよね。この前王宮で会ったときもいい子にしてたし」

（というか……狩占祭以来、私に突っかかってこなくなったのよね。冬惺といるところに来てもあんまり邪魔しようって感じじゃなくなったし）

ありがたいけどなぜだろう、と綺理は歩きながら首を傾げていた。

その頃千紗は、父王の執務室の窓辺に座っていた。

愛娘が押しかけてきた瞬間いきなり真面目ぶって政務に励みはじめた春怜をよそに、千紗は外を眺めながら狩占祭の日のことを思い返していた。

あのとき――。

千紗は翔波のそばで、炎の剣をふるう綺理の背中を見ていた。

誰にも言っていないが、降神術の詠唱を聞いたあたりから目が覚めていたのだ。

不自然な眠りから覚めたばかりで体がよく動かず、頭もぼんやりしていたが、太刀で淵妖を斬り払う冬惺と、その隣で神々しく剣を手にした綺理の姿は目に焼きついている。

悔しいけれど、あれを見たら冬惺の隣に立てるのは綺理くらいしかいないと思うよりほかない。それに冬惺がそのことを秘密にしているのは、どうやら綺理のためらしいのだ。

（あのときのこと、最初はみんな夢かと思っていたけど……絶対に本当だった）

なぜなら千紗がはっきり目を覚ましたあと、あの岩場で聞いた会話の通り、父王が「お父さまが悪い奴らを倒して千紗を助けたんだよ」としきりに主張していたから。

（『選択の時がきたら、大切な人の望むほうを選んでください』だっけ。叔父さまがとっくに綺理さまを選んでいるんなら、仕方ないもの。明花さまみたいによそから来た人に叔父さまを取られるよりは、綺理さまのほうがましだし……）

だから千紗は綺理を認めることにして、ついでに最近父王にそっけなくしすぎたことを反省したのだ。あとで父王にうんと甘えてみよう。だがその前に。

千紗は大人ぶったため息をつくと、すっと息を吸った。窓の外――たぶん西市の方――に向かって、後ろで父王が仰天するのもかまわず叫ぶ。

「せいぜいお幸せにやってれば――っ！」

「……冬惺？」

露店の天幕の陰を歩いていたとき髪を一房つままれ、綺理は立ち止まった。

振り返れば、冬惺が綺理の金髪を軽く指にからめ、じっとこちらを見つめている。

考えこむような表情なので、組み紐を選ぶのに色を見ているのだろうと当たりをつけた。

「色合わせを見るなら、実際に組み紐を当ててみたほうがわかりやすいんじゃない？」

店のほうを指さして提案すると、冬惺は「いや」と綺理の推測を否定する。

「そうじゃない。……今日は髪を下ろしているなと思って。王宮で会っていたときは、いつもかんざしで無駄にごてごて結い上げていただろう」

（む、無駄にごてごて？）

侍女の努力を無にする発言に、綺理は軽く衝撃を受けた。綺理自身、どのかんざしを合わせようかと毎回頭を悩ませていたので、不評だったのかと落ち込む。

「……結い上げるの、そんなに似合ってなかった？」

恐る恐る問う。と、冬惺はおもむろに綺理の頭に手をのせ、一人で納得したように言った。

「というより、髪形をきっちり整えられるとおまえの髪に触れないからな。道理で最近物足りなかったわけだ」

（――っ、ど、どどどういう意味!?）

髪を梳くように頭をなでられ、綺理の心臓が大きくはねた。髪に差し入れられた指の感触に、全身に甘い痺れが走ったように動けなくなる。息まで止まりそうだ。

意味を問いたくて開いた口も、なにも言えずにまた閉じる。すると冬惺のほうが「なんだ？」と訊ねてきた。

「……あ、あの、髪、下ろしていたほうがいいかな……？」

なにか言わねばならない雰囲気になんとか言葉をしぼりだすと、金髪を梳いていた指が耳のあたりで止まった。綺理を映した琥珀の瞳が、穏やかに細められる。

「ああ。今のほうが俺は――」

指先を耳元に添えたまま、冬惺が手のひらを綺理の頬に優しく当てる。

途端、綺理は触れられたところがかっと熱を持つのを感じた。鼓動が冬惺に聞こえそうなほど大きく、速くなる。

緊張に耐え切れずに顔を伏せようとしても、琥珀の瞳に呪縛されたように動けない。動かせるのはまぶただけだった。見つめられる恥ずかしさから逃れるように、綺理は目を閉じる。

冬惺の手が頬をなぞるように動き、心もち綺理の顔を上げさせ――。

「睫毛」
（――はい？）
呪縛が解けたようにぱちっと目を開けると、冬惺の指がなにかをつまんで頬から離れた。
「睫毛が頬に落ちていた。もう取った」
それだけ言って、冬惺はさっさと顔を背けて歩き出す。綺理は慌ててあとを追いながら、今さっきのことを思い返して恥ずかしさで死にそうになった。
（今私、なに想像した!?　目をつぶったりして、期待していたみたいじゃない！）
穴があったら埋まりたい。もとい、入りたい！
綺理は真っ赤になって下を向いた。この火照りがおさまるまでは、冬惺とまともに話せない。とにかく冬惺とはぐれないことだけを考えて、彼の袖の端をつまんでついていく。
（――というか結局、『俺は』の続きはなんだったの!?）

可愛いと思うし、好きだ。
なぜその二言が言えなかったのか。
冬惺は、綺理が袖をつかんでいるのを心地よく感じて歩きながら、ぐるぐると考えていた。
（『可愛い』も『好き』も、しょっちゅうじゃないにしろ昔から普通に使っていただろう。ど

うしてためらったんだ？　それに綺理も綺理だ。なぜあそこで目を閉じる！）

綺理はなんの気なしに目を閉じたのだろうが、その様があまりにも無防備だったのでこちらは動揺した。どう反応すればいいかわからず、思考が追いつかないうちになにか変な行動に出そうだったので、慌てて嘘で誤魔化したのだ。……こんな自分のどこが『みんな元通り』だ。

（……それもこれも綺理が悪い。最近綺理が俺を動揺ばかりさせているからだ）

冬惺は悩んだ末に、綺理に全責任を押し付けることにした。

そうだ。綺理は無自覚にこちらを動揺させるから質が悪い。一度だけだったとはいえ、やたらと男好きのする恰好で王宮に来たときは驚いた。侍女にほいほい乗せられてあんな恰好をして、大事な従妹の虫よけに苦労するこちらの身にもなれと思う。

（だいたい綺理は鈍すぎる。普通に着飾っているだけでもたわけた男どもの目を引いているということに、なぜ気づかない。いつもどこを見て過ごしているんだ）

おまけに綺理は、自分の知らないところでいつの間にか子狐と鳥を手なずけているらしい。こちらはあの鳥が綺理のことを『我が姫』と呼ぶたびに、「おまえのじゃない」と言いたくなっているというのに、綺理はそれにもさっぱり気づいていない。鈍感は質が悪い。

――などと考えていた冬惺は、綺理がなにも言わずについてくるのをいいことにそのまま歩き続け、市の中ですっかり道に迷っていた。

一方、迷っていることにいまだに気づいていない二人の背後では、
「せっかくいい雰囲気になっていたのに、なんでそこで道をそれるかな君たちは。組み紐の店からどんどん遠ざかっていくじゃないか！」
翔波が露店の陰で小声で文句を言っていた。そのかたわらでは、頭に布を巻いて市井の子供のようななりをしている真羅が、一緒になってのぞき見をしている。
「あー、従者。私たちが尾行しているのに気づいてまこうとしている、という可能性はないのかね？　それなら大進展だと思うのだが」
「それはない。絶対にない。君、夢見すぎ。ああっ、どうしてよりにもよって生魚の店の区画に行くんだ。あれは迷ってる。絶対に迷ってる。冬惺が先導しているせいだ。……どうしよう真羅、これは出ていって道を教えるべきだと思うかい？」
真羅はやきもきしている翔波を見上げ、面白いから放っておこうと決めた。――三人とも面白いから、彼らがどこまで行くのかずっと見守っていようと。
『君たちが望む限り、私は君たちと共に在るよ』
――約束の行方は、まだ誰も知らず。

あとがき

こんにちは。薙野ゆいらです。『金蘭の王国』二冊目をお手に取っていただき、ありがとうございます。

幼なじみ三人組＋αのラブ&除湿（もとい、妖退治）でお送りしているこの物語。前回は旅ばかりしていましたが、主人公たちがさりげなく高貴な出自なので、〝王国もの〟っぽさも出していきたいなあと思っていたのでした。

そんなわけで今回の舞台は王都です。王宮です。陰謀とラブバトルの宮廷です。

そんなわけでイラストがとっても華やかです。麗しいです。着飾った女の子たちが素晴らしく可愛らしいです！

香坂ゆう様、今回も素敵なイラストをありがとうございます！　個人的に、翔波と千紗のツーショットと、子狐真羅に大注目しております。か、可愛い……！

さて、本作では、『女郎花』や『赤色』といった、古典好きにはおなじみの襲の色目の用語をちょくちょく登場させています。本来の襲の色目の用法とは違っていたりもするのですが、あの雅やかな名と色彩感覚が好きでして、作中では色の組み合わせの名として広く使っています。

しかしこの襲の色目というやつは諸説あるので、なかなか厄介です。物語に合う方を使えばいいといえばそうなのですが、文献によって色がまったく違ったりすると、なんなんだこれは……としばらく悩むことに。

ちなみに私は、資料本の襲の色目のページをしょっちゅう眺めていたからか、たんすの中で紫のTシャツと緑のTシャツが重なっているのを見たときに「あ、杜若の襲だ」などと埒もないことが思い浮かぶようになりました。その襲だったからなんなのか……。

毎度のことながら、つっこみ力あふれる担当女史にはお世話になりました。今回、イラストの指定位置が、ことごとく「ここにイラストが入るといいなあ」と思いながら書いていたシーンだったので、そんなところにも担当パワーを感じております。感謝感激です。

また、本書の刊行に関わってくださった方々に感謝を。

そして本書をご覧になってくださった皆様、本当にありがとうございました。皆様に楽しんでいただけるものをお届けできていれば幸いです。

薙野ゆいら

BEANS BUNKO

「金蘭の王国 恋の嵐は王宮に吹いて」の感想をお寄せください。
おたよりのあて先
〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店ビーンズ文庫編集部気付
「雉野ゆいら」先生・「香坂ゆう」先生
また、編集部へのご意見ご希望は、同じ住所で「ビーンズ文庫編集部」
までお寄せください。

金蘭の王国
恋の嵐は王宮に吹いて

雉野ゆいら

角川ビーンズ文庫　BB62-5　15655

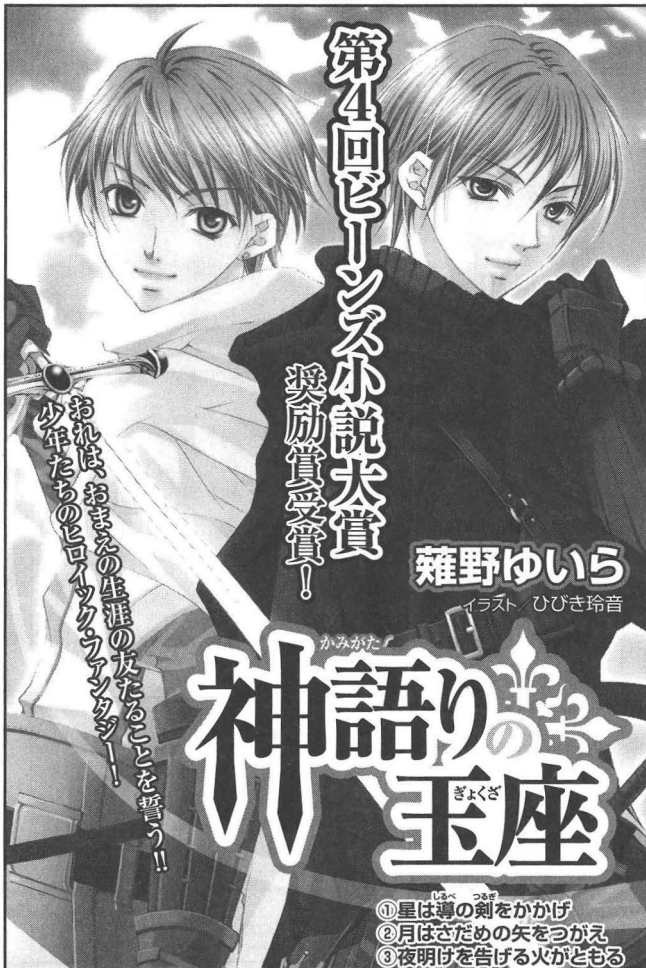
平成21年4月1日　初版発行
平成21年11月20日　再版発行

発行者――井上伸一郎
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集(03)3238-8506
〒102-8078
発売元――株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/営業(03)3238-8521
〒102-8177
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所――暁印刷　製本所――本間製本
装幀者――micro fish

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN978-4-04-452705-1 C0193 定価はカバーに明記してあります。

©Yuira NAGINO 2009 Printed in Japan


第4回ビーンズ小説大賞
奨励賞受賞！
おれは、おまえの生涯の友たることを誓う!!
少年たちのヒロイックファンタジー！
薙野ゆいら
イラスト／ひびき玲音
神語りの玉座
①星は導の剣をかかげ
②月はさだめの矢をつがえ
③夜明けを告げる火がともる

●角川ビーンズ文庫●

9784044527051

ISBN978-4-04-452705-1
C0193 ¥476E

定価：本体476円（税別）

1920193004762

BEANS BUNKO

金蘭の王国
恋の嵐は王宮に吹いて

雉野ゆいら

大貴族の姫・綺理と王弟の冬悝は幼なじみ兼、親の決めた許婚。だが突然、隣国の明花公女と冬悝の縁談が持ち上がり、王宮は大騒ぎ。綺理は冬悝に一目惚れした明花と、互いの国や家の威信をかけた一大ラブバトルを繰り広げるハメになり、あげくの果ては父に「色仕掛けで冬悝を陥落しろ！」とけしかけられる始末。さらにそれに乗じ、敵の紅楓家が策謀を巡らしているとの報が届き!?